

記憶喪失な雪風と勇者
王(改訂中)

蒼妃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ありそうでなかった「艦隊これくしょん」と「勇者王ガオガイガーシリーズ」のクロスオーバー作品。

久々に、スパロボにガオガイガーが参戦すると聞いて思わず書いてしまった。反省はしているが、後悔はしていない!!

(注)クロスオーバー作品の影響で、艦これが艦これしてない現象(?)に見舞われる可能性大。

*大量の矛盾を解消するため、只今改訂中。

改訂したパートについては“(改訂)”と表記。全話の改訂が終了次第、題名を変え

ます。

目次

第1章 夢幻島のGGG

序章 第1話 1

序章 第2話 16

序章 第3話 31

第1話 43

第2話 57

第3話 74

第4話 (前編) 92

第4話 (中編) 110

第4話 (後編) 126

第5話 144

第6話 158

第7話 173

番外編 駆逐艦 響の過去 189

第9話 205

第10話 219

第11話 236

第12話 257

第2章 動き出す黒幕

雷牙とソールの設定紹介 世界観編 272

第1話 281

第2話 292

第3話 307

第4話 322

第 6 話

第 5 話

|

|

352 335

第1章 夢幻島のGGG

序章 第1話

青い空に、白い雲。そして、何処までも続く青い大海原。

気が付くと、私はそんな光景を眺めながら海の上を漂っていました。

見渡す限り周りに島はなく、どこまでも広大な青い海が広がっています。

「……………どこでしょう、ここは？」

どうして、こんな場所に居るのか、まったく分かりません。

どこから来て、何のためにここまで来たのか……私には、わかりません。

「それよりも……私は誰でしょうか？」

海面に映るのは、あどけない顔立ち。

その顔が私の顔だと言うのは、分かります。名前もちやんと覚えていきます。でも……わたしが——雪風が、どういう性格だったのか、どういう人生を歩んできたのか。それがまったく思い出せません。

「はて？　そういうえば、どうして海の上に立てるのでしょうか？」

道具を使わずに海の上に立てないのは、常識です。

ですが、わたしには、船の舵のようなブーツが付いたブーツだけ。とても海に浮かぶような装備じゃありません。

「むむむ……謎が増えました。」

背中に背負っているモノといい、首からぶら下げてるモノといい、分からないことが多いです。一体、記憶を失う前のわたしは、何をしていたのでしょう？

「うゝそれにしても、お腹が空きました……」

それはそうと、さっきからお腹の虫がグーグーと鳴いています。

でも、手元に食べ物はありません。あるのは、武装一式とボロボロになった地図だけ。しかも、地図は長い間水に浸かっていたせいかな、文字がにじんで読めません。

「ううっ、どうしましょう……」

—— ちよん、ちよん ——

「んっ？」

どうしようか悩んでいると、頬を誰かに突かれました。

顔だけを向けると、わたしの肩に小人さんが立っていました。

「えつと……どなたですか？」

小人さんに聞いても、小人さんは何も喋りません。

でも、言いたいことは何となく伝わってきました。

この小人さんは、艤装妖精と呼ばれる妖精でわたしが背負ってるモノ——艤装って言らしいです。——に宿っているそうです。その役目はわたしの補助だそうです。

「妖精さん。海を滑る方法、教えてくれませんか？ —— ふむふむ、やってみます。」

少し不安ですが、ここは進むしかありません。

教えてもらった通りに頭の中でゆっくりと海面を滑るわたしをイメージしながら、重心を少し前にして……。

「おっ？ おお〜良い感じですよ!!」

海面を滑るように前進するわたしの身体。

頭では覚えてなくても、身体の方はきちんと覚えているみたいです。これなら、もう少しスピードを出しても大丈夫かもしれません。

「よし。全速前進ですよ!!」

飢え死にする前に、食糧見つけますよ〜!!



「う〜ん……島は増えてきましたが、どれも小島ばかりですね。」

かれこれ、数時間は航行していますが、見えるのは小島ばかりです。

できれば、人が住んでいそうな島が望ましいのですが……サバイバルの経験なんてありませんし。でも、高望みし過ぎですかね？

「ん?」

人が住んでいそうな島を探していると、海上を動く物体が目に入りました。

一瞬、クジラかと思いましたが、目を凝らすと、全然違うことがわかりました。

緑色に光る眼、不揃いで大きな歯、太陽光を反射して黒光りする身体。

そして、わたしの本能が言っています。あれは倒すべき敵だ、と。

そんな悠長なことをしていると、クジラのような敵に見つかりました。

「オオオオオツ——!!」

「見つかってしまいました!!」

あたしを見つけた敵は、一直線に向かってきます。

道中で妖精さんに身に付けた武装の使い方を教えてもらったので、問題なく扱えます。

弾薬節約のため、実際に撃ってはいませんが……

「……追ってこられるのも面倒ですし、ここで倒しましょう!!」

首から掛けてある武器——12.7cm連装砲を掴み、その照準を敵に向けます。

後は、トリガーを引けば、弾が発射されるんですが、どれくらいの弾が残っているのか、わたしには分かりません。つまり、あまり無駄撃ちはできません。

確実に当てられる、回避が落ち着かない距離まで引き付けて……

「撃ちます!!」

突進してくる敵に向かって、トリガーを引きます。

砲口から飛び出た砲弾は、無事にヒットすると同時に爆発を引き起こします。念を入れて、砲弾を4発連続で叩きこみますが、黒い煙に敵の姿が隠れてしまいました。でも、さすがにこれだけ叩きこめば、敵も……

「オオオオオオツ——!!」

「ふえっ?」

黒い煙から出てきたのは、倒したと高を括っていた敵。顔の部分に凹みが出来てるから、まったく効かなかった訳じゃないけど、効果が薄かったみたいですね。

そして、明らかに怒ってます。

「ギギ、ギギギ……」

「?」

何やら奇妙な音を鳴らす敵。様子を窺つてると、口の中から出てきたのは……一本の砲塔。その照準は、当然ながらわたしに向けられています。

それに気付いたわたしは、すぐに射線上から離れます。

砲弾が発射される音が聞こえたのは、その直後でした。

もう少し回避行動が遅れていたら、あの砲弾が直撃していたかもしれません。

「ギ、ギギ……」

敵が再びわたしに照準を向けます。ですが、それを逆手に取ります。

トリガーを引き、再び放たれる砲弾。今回の目標は、敵の身体……ではなく、わたしに向けられる砲塔の口。

撃った砲弾は砲塔の内部に入って、その奥で大爆発を起こします。

多分、砲塔の奥にある弾薬庫に引火したのでしょう。

「グオ、オオオオ……」

「やりました、か……?」

流石に、外皮が頑丈でも内部からなら、と思つての行動ですが、効果抜群のようですね。外したら、わたしの方が大けがしてたかもしれません、上手く行つて良かったです。

「ふ……無事に終わつて良かったです。」

——ぐ——

ああ、安心したら空腹感がまた……そういうえば、食べ物を探してる途中でした。動いたせいか、さつきよりも空腹感が増しているような気がします。

これは本気で探さないと、飢え死にすることになりそうです。

「それにしても、何なんでしょうか? この生き物は」

口から砲塔を生やしたり、鋼鉄の外皮を持つてたり、普通の生き物でないのは分かります。ついでに、食べるのには向いていない、つていうことも……。

うくん……生物的部分もありますから、生物兵器と言ったところでしょうか？
取り合えず、敵というのは分かりませんが。

「妖精さんは何か知っていますか？」

わたしの質問に妖精さんはコクンと頷きました。

ふむふむ……あの生き物は『深海棲艦』という生き物で、今は海の大部分を支配している。つまり、さっき倒したのと同じような奴が一杯居る訳ですか……。

ぐ

「それよりも、一刻も早く食糧を見つけないと……できれば、出くわしたくないですね。」

今回の場合は1体だけでしたが、複数で襲われると危険ですからね。
一刻も早く、食べ物と安全な休憩場所を見つけないと……。

「うーん……一先ずあの島で休みましょうか。」

さすがに海の上をずっと進んでいるのは疲れました。

島で休んで、食べ物も確保しましょう。何か果物ぐらいは実ってる筈です。
できれば、弾の補充もしたいですが……。

「さすがに無理ですよね〜」

でも、取り合えずの目標は空腹を何とかすることです!!

その後のことは、それから考えましょう。

「そのこの駆逐艦、止まりなさい。」

「ふえ？」

出発しようとしたら、呼び止められてしまいました。

でも、周囲に私以外の人影はなかった筈なのですが……

「貴女、どこの所属の艦娘？」

「え、えつと……？」

私に声を掛けて来たのは、少し年上ぐらいの女の子でした。

少し茶色みが掛った黒髪に茶色の瞳。身長は私よりも少し高いです。

「此処は鎮守府も基地も何もない海域よ。艦隊から逸れたの？」

「えつと、その……雪風にも分からないです。気が付いたら、海の上に居ましたから」

「じゃあ、所属の鎮守府は？」

「すみません、それも分かりません。」

「……なるほど、記憶喪失の艦娘って訳ね。」

「あの、艦娘って、何ですか？」

「……えっ？」

私の一言で、この場の空気が凍りつきました。

そして、そんな「何で知らないの？」みたいな視線を向けなくてください。本当に分からないんです。いや、覚えてないっていう方が正しいのかもしれないんですが。

「えっと……本当に分からないの？」

「はい。というより、雪風は自分の名前以外何も覚えていません。」

「それは……重症ね。」

そう言つて、黒髪の女の子は何やら考え込んでしまいました。

やがて、インカムで何処かに連絡を取り始めましたが、生憎と話の内容を聞き取ることはできません。

「はい、了解しました。火麻参謀、回収お願いします。」

「あの……どうかしましたか？」

「貴女のことを私の基地に伝えただけです。すぐに迎えが来ますから」

「そうですか。それよりも、何か食べ物持つてませんか？ 雪風、お腹が減つて死にそうです……」

初対面の人にこんなお願いをするのは恥ずかしいですが、この際仕方がないです。

記憶が元に戻らないまま死ぬのは真つ平ごめんです。それも死因が空腹だなんて

……

「ええ、良いわよ。——つと、来たわよ。」

空を見上げると、白い雲を突き抜けて巨大な飛行船な降りてきました。

灰色の船体には緑色の紋章があしらわれていて、その全長はとんでもなく長いです。迎えにこんな巨大なモノを使うなんて、どれくらい大きな組織なんでしょうか。

「高速射出甲板母艦、タケミカズチ。私が所属する基地が保有する飛行母艦です。そして、私はGGG長官秘書兼海上機動部隊特別隊員、大鳳よ。」

序章 第2話

く高速射出甲板空母　タケミカズチ内部く

「じゃあ、雪風さんは自分の武器の使い方も覚えてないんですか？」

「むぐむぐ……ごくん。そうなんですよ。」

妖精さんに教えてもらったおかげで、何とか扱えますけど……」

「そんな状態でよく駆逐イ級を倒せましたね……」

「運が良かったんですよ。はむはむ」

空腹のおかげで一段と料理がおいしく感じます♪

一時はどうなるかと思いましたが、わたしは本当に運が良いようです。

あつ、わたしが居るのはさっきの飛行船の中にある休憩室です。

大鳳さんが曰く、この飛行船は大鳳さんが所属する基地に向かつてるそうですが、到着までに少し時間があるので、先に腹ごしらえをすることになりました。

「ふうく……お腹一杯です。」

「よつほどお腹が減ってたのね。」

「はい。もうお腹がペコペコすぎて死にそうでした。」

「まあ、お腹が膨れて良かったわ。」

「大鳳さん、料理お上手なんですね。」

「料理が趣味なの。暇つぶしにやり始めたら、いつの間にか趣味になってたわ。」

「おう、大鳳。此処に居たのか。」

「あつ、火麻参謀。」

お腹が一杯になったので、休んでいると、男の人がやつてきました。

独特な髪型に一目でわかるくらいに鍛えられた肉体。年齢は30代後半でしょうか？

「雪風さん、紹介します。GGG鎮守府参謀長官の火麻 激さんです。」

「おう、よろしくな。」

「雪風です!! どうぞ、宜しくお願い致します!!」

「それで、火麻参謀。何か、緊急事態でも?」

「いや、基地に着いたから呼びに来ただけだ。」

「どうやら、ご飯を食べてる内に大鳳さんが所属してる基地に着いたそうです。」

窓が無いこの場所からだ、外の景色が一切見えないので気付きませんでした。

「そうですか。じゃあ、私は雪風さんに一通り説明してから向かいます。」

「おう。長官にそう伝えておくぜ。ついでにメデイカルチェックも済ませておけよ」

そう言つて、火麻さんは何処かに行つてしまいました。

「さて、と。じゃあ、続きの説明しないとね。」

「お願いします!!」

大鳳さんは、何も覚えていない私に色々教えてくれました。

私や大鳳さんは“艦娘^{かんむす}”と呼ばれる存在で、かつての軍艦の魂が人の姿を成したモノ。私は、陽炎型駆逐艦の八番艦で、かつては「奇跡の駆逐艦」という称号が与えられるような船だったそうです。覚えはありませんが……。

そして、艦娘の役目は、この世界に突然現れた「深海棲艦」を倒すこと。

深海棲艦の正確な目的は不明。でも、海に出る船舶を頻繁に襲撃してくる上に陸地を侵略することもあるそうです。

また、深海棲艦よって海路だけではなく、空路も制圧されているせいで物資の流通がかなり滞るような事態になって、地球の人口も結構減っているみたいです。

「それと、深海棲艦は基本的に人の姿に近い種ほど手強くなるわ。

相手の艦種や強さを把握することも、深海棲艦との戦いでは重要になるわよ。」

「ふむふむ。あつ、そういうえば、深海棲艦に普通の武器とか効かないんですか?」

「効果はあるわ。でも、艦娘が戦うより圧倒的に被害が大きくなるの。」

「どういうことですか?」

「深海棲艦は、サイズが小さい上に個体数が非常に多いの。」

だから、攻撃が当てにくく、迎撃に失敗して懐に入られたら終わり。

過去には、駆逐イ級一体を倒すのに、3隻の軍艦がやられたらしいわ。」

そこまでで一区切りして、大鳳さんは湯飲みに口を付けました。

「そう言った経緯もあって、今は深海棲艦の対処は艦娘に一任されているわ。」

「ふむふむ。」

「さて、取り合えず、説明は一先ずこれくらいにしておきましょうか。」

私たちの長官に会う前にメディカルチェックも受けてもらわないといけないし」

「はい、わかりました!!」



健康診断の後、大鳳さんに連れて来られたのは、この基地の司令部。通称、メインオー
ダールーム。

この先に所属する艦娘をサポートしてくれる人たちが居るそうです。怖い人じゃないと良いけれど……

「大河長官。大鳳、ただいま帰還しました。」

「うむ、御苦労。」

「それと、偵察任務中に保護した駆逐艦娘の雪風を連れてきました。」

「は、初めまして!! 陽炎型駆逐艦、八番艦の雪風です!!」

「GGG長官の大河 幸太郎だ。ようこそ、雪風くん。」

大鳳さんに紹介されたのは、長い金髪に黒い眉のナイスミドルな男の人です。

年齢は……火麻さんと同じぐらいでしょうか？ 取り合えず、怖い人ではなさそうです。

「それから、このGGGを支える皆を紹介しておこう。

まずは、艦娘及び深海棲艦の研究を行っている獅子王 雷牙博士だ。」

「ヨロシク。」

最初に紹介されたのは、とても鼻が長いおじさんです。

とても気さくそうな人ですが、艦娘や深海棲艦については地球上で一番詳しい人物らしいです。

「それから、諜報部の猿頭寺 耕助くん。」

「深海棲艦の解析ならお任せください」

次に紹介されたのは、だらしない服装の男性。

よれよれの制服に乱れた髪……身だしなみは整えた方が良いと思うのですが……。

「そして、さつき会つただろうが、参謀の火麻 激くん。」

「おう。」

「他にもスタッフは大勢居るが、追々紹介していこう。

さて、大鳳くん。雪風くんには、どこまで説明したのかな？」

「基礎知識だけです。艦娘の詳しい生体については、雷牙博士に説明してもらった方が
良いと考えまして。」

「ほいほいっと。じゃあ、ご希望に依って、僕ちゃんが説明しちゃうよー」

雷牙さんが手元で何かコントロールすると、司令部の正面に大きなモニターが出てきました。そこに映し出されたのは、私でも大鳳さんでもない艦娘です。

「知つての通り、艦娘はかつての……それも、第2次世界大戦期に存在した軍艦の魂が人の姿を成した存在だと、言われておる。しかし、それだけない。」

モニターを使って、雷牙さんは分かりやすく艦娘のことを詳しく教えてくれました。雷牙さんの話によると、艦娘は「セファイラ霊水晶」と呼ばれる結晶を持っていて、そこから放たれるエネルギーが艦娘を艦娘たらしめるそうです。

生み出されるエネルギーは常に全身を巡って、艦娘の肉体を強化しているだけではなく、艦娘が使う武装に供給されて、威力を増大してくれるみたいです。

だから、私の12.7cm連装砲も小さい割に駆逐艦に搭載されていた本物と同程度の威力を発揮できるのも、そのおかげです。

あと、海面に浮いたり、身体全体に張られている防御シールドのようなモノにも、このエネルギーが使われているそうです。

「それと、このセファイラ霊水晶には、無限にエネルギーを生み出せる訳ではない。

外部から燃料を補給せんと、エネルギーは生成されんのじゃ。」

「それから、戦闘中の主機の破損やエネルギーの枯渇は艦娘の死を意味する。これをよく覚えておいてほしい。」

「はい!!」

「まあ、分かっているのはこんな所じゃな。何分、まだ研究途中でな。何か質問はあるかい？」

「あの……艦娘って、どうやって生まれてくるんですか？」

「おっと、説明してなかったのう。艦娘は妖精が生み出しておる。

一度だけ自然発生の例があるが、基本的に妖精によつて生み出されるんじや。」

「だが、妖精は秘密主義でな。どういう原理で生み出しているかは、俺たちにも分からん。」

「そうなんですか？」

「うむ。どうやら、向こうにも知られたくない事情があるらしい。

だから、我々も深く追究しないようにしているんだ。」

「ふむふむ。」

むく……覚えることが多くて、大変です。

「さて、此処までで何か質問はあるかい？」

「えつと……雪風はこれからどうすればいいんでしょうか？」

「雪風くんの事情は把握している。記憶が戻るまで、GGGに在籍してもらおうと思っているのだが、どうかね？」

「はい、よろしくお願いします！！」

「うむ、元気が良くて結構。」

大鳳くん、このまま雪風くんの案内を任せて構わないか？」

「はい、お任せください！！ 雪風さん、ついて来て。」

「あつ、はい。失礼しました。」

A n o t h e r S i d e

「さて……猿頭寺くん。彼女が所属していた鎮守府に関する情報は？」

雪風と大鳳が退出した後、今まで笑顔だった大河長官の表情が真剣なモノに変わる。

実を言うと、彼らは雪風に対して1つ嘘を言っていた。

彼女の記憶に関する手がかりを1つ有しているのだが、とある事情からそのことを意図的に隠しているのだ。

「諜報部隊が調査した鎮守府の中に該当の鎮守府はありませんでした。

現在、諜報部隊を向かわせていますが、少し時間が掛るか……」

「鎮守府もそこそこの数があるからもう。仕方ないじゃろう。」

コーヒーを飲みながら、雷牙が言う。

鎮守府というのは、深海棲艦に対抗するために設立された組織であり、艦娘を統括・運用して、日夜深海棲艦と戦い続けている。その上には、大本営という統括組織がある。

しかし、GGGは他の鎮守府とは異なり、完全に独立している。さらに言えば、その存在を認知されていない秘密結社なのだ。そのため、自由な行動ができる反面、艦娘の運用に必要な資材や食料を自分たちで調達する必要がある。

なお、GGGは大本営や他の鎮守府の動向を探るために諜報員を派遣している。

閑話休題

「そーいや、アイツの記憶喪失の原因、心的要因なんだってな。」

「はい。メデイカルチェックの結果、頭部に外傷は見られませんでしたから、ほぼ間違いないかと。」

「ふむ。心的外傷による記憶喪失、か。」

そう言って、大河もコーヒが入った紙コップを口元に運ぶ。

「艦娘として顕現した後か、それとも船であった頃の記憶によるものか。」

「大鳳の報告通りなら前者だろうな。」

「やれやれ、アイツといい問題を抱えた奴がよく集まるな。」

火麻の言葉にその場に居た男2人は苦笑いを浮かべた。

序章 第3話

雪風 Side

「ここが貴女の部屋よ。これは、部屋のカギ。」

「ありがとうございます!!」

メインオーダールームを出た後、大鳳さんに基地の中を案内してもらいました。訓練所とか、研究所とか、艦娘の待機所とか。基地の内部はいろいろと設備が充実していました。広すぎて覚えるのが大変そうですけど……。

今、わたしが居るのはGGGに所属する艦娘が生活する艦娘寮です。

「それにしても、驚きました。この鎮守府、まさか海の下にあるなんて」

「大体の艦娘が同じ反応するわ。私も最初は驚いたもの。」

一番驚いたのはこの基地が建っている場所ですよ。

GGGの基地は、夢幻島と呼ばれる島の近くの海底80メートル地点に建設されています。

その上は、発電施設になっていて、基地の動力炉から出た余剰エネルギーを電気に変えて夢幻島に住んでる人たちに供給しているそうです。

「あつ、言い忘れてたけど、部屋は相部屋よ。今日着任した駆逐艦の子だから、仲良くしてあげてね？」

「はい!!」

「じゃあ、明日から早速訓練を始めるから、今日はゆっくり休みなさい。」

そう言って、大鳳さんは来た道は引き返して行きました。

「さて、どんな子が待ってるのでしょうか？」

大鳳さんから貰った部屋のカードキーを射し込んで、部屋に入ります。そういえば、寮の扉はオートロックらしいです。カギを忘れて、外に出たら一大事です。ね。

「お〜まるでホテルみたいです!!」

部屋には、ベッドが2つ。そこそこ大きなテレビが1つ。

他にもクローゼットや本棚などなど。生活に必要な家具は一通り揃ってます。

まあ、お風呂や洗濯は寮で共用することになってるので、ありませんが。

「ふう……今日はいろいろあつて疲れました。」

食糧を探して放浪していたら、駆逐イ級に襲われて、大鳳さんに出会って……。

この基地に連れて来られて、GGGに所属することになって。

本当に今日一日だけでいろいろありました。

「妖精さんもゆつくり休んでくださいね。」

わたしが呼びかけると、艦装妖精がひよっこり顔を出してきました。

この子にはとてもお世話になりました。妖精さんの助けがなかったら、今頃海の上で飢え死にしていたかもしれせん。

————ガチャツ————

「し、失礼します……」

あつ、相部屋になった子でしょうか？

「は、初春型四番艦、初霜です。」

「陽炎型駆逐艦八番艦、雪風です！　これからよろしくお願いします!!」

同居人は、黒い長髪に桃色の瞳を持つ大人しそうな子でした。

あれ？ 何でしょう、この胸の奥からこみ上げてくる懐かしさは。

私は……以前にも彼女——初霜さんに会ったことがあるのでしょうか？

「……………本当に、覚えてないんですね。」

「？ 何か言いましたか？」

「い、いえ!! 何でもないわ!!」

「そうですか？」

何か眩いてたような気がするのですが、気のせいでしょうか？

「あつ、私、教導担当から伝言を預かってるの。」

初霜さんから手渡されたのは、一枚のメモ用紙。

そこには、「明朝8時より、訓練を開始する。初霜、雪風の両名は艤装を着装し、訓練海域に集合せよ。なお、場所は隊員に聞けばよい。」と書いてありました。

「初霜さん、教導担当の人はどんな人でした？」

「うーん……少し、怖そうな人かしら？ でも、悪い人じゃなかったわ。」

「上手くやっていけるかどうか、少し不安です……」

「だ、大丈夫よ、きつと」

明日から始める訓練が不安です……。

■ ■ ■ ■ ■
Another Side

GGG 研究開発部。

GGG ベイタワー基地の下層ブロックに存在する部署であり、雷牙博士が顧問を務める。

そこでは、艦娘及び深海棲艦の研究が行われる他、艦娘の特性を活かした武装が妖精と共同で開発されている。

その機密性から、関係者以外の立ち入りを原則として禁止している。

そんな場所にGGG長官秘書を務める大鳳は居た。

「満潮、此処に居たのね。」

「ん？ ああ、大鳳か。何か用事？」

大鳳が探していたのは、淡い茶色の髪をお団子付きのツインテールにしている一人の

艦娘。

名前は、朝潮型駆逐艦の三番艦、満潮。GGGでは、古参に分類される艦娘である。着任したばかりの駆逐艦娘の教導を担当したり、時には研究開発部で開発された武装のテストを務めることもある。

「新しく着任した子のプロフィールを渡しに来たのよ。」

「ああ、ありがとう。」

そうお礼を言つて、満潮は大鳳が持つて来たプロフィールを受け取る。

「初霜に雪風……どっちも歴戦の艦娘ね。まあ、艦艇時代の話だけど。

というか、雪風は此処の所属にして良かったの？」

「ええ。艦装妖精がGGGで保護して欲しいって。」

「艦装妖精がそういうことは……きな臭い鎮守府に居たみたいね。」

「今、諜報部が動いて調査に乗り出してるとみたいよ。」

艦娘1人1人が従える艦装妖精は、仕える主が不必要に傷付くのを望まない。

雪風の場合、元の所属だった鎮守府に戻ると彼女が傷付いてしまうので、艦装妖精は主が席を外している間——メデイカルチェックを受けている時——に大鳳を通じて、大河長官に保護を懇願したのだ。

「まっ、アイツの過去なんてどうでも良いわ。何かあれば、長官が動くし。」

そう呟く満潮の言葉には、長官に対する厚い信頼が窺える。

一方、大鳳は少し心配そうな表情で満潮を見つめている。

「何よっ。」

「満潮、身体は大丈夫なの？ この前、〃アレ〃を使った反動が残ってるんじゃない……」

「凱や命にも聞かれたけど、大丈夫よ。私はそんな貧弱じゃないわ。こいつのおかげで、他の艦娘より何十倍も頑丈な身体になってるから」

そう言って、満潮は自分の左腕を撫でた。

満潮の左腕は、肘から先が金色の義手になっており、そこに正六角形の緑色の石が一つ嵌め込まれている。

その石の名前は『Gストーン』。

Gパワーというエネルギーを放つ無限情報サーキットであり、持ち主の勇氣に呼応して莫大なエネルギーを放つ性質を持つ。また、艦娘たちの霊水晶セフィラと共鳴現象を起こし、霊水晶セフィラの力を高める効果がある。

満潮はある一件で、艦娘として再起不能なほどの大けがを負った。

しかし、艦娘として戦うことを望んだ彼女のために雷牙博士と妖精たちが協力して手術を執行。それをきっかけにGストーンと霊水晶セフィラの共鳴現象が発現。

以来、満潮は駆逐艦らしからぬ性能を発揮できるようになったのだ。

閑話休題

「それは知ってるけど……やっぱり心配だわ。」

「大丈夫よ。駆逐艦の教導ぐらい、どうということはないわ。」

そう言つて、満潮は立ち上がり、研究者の輪に混ざる。

「本当に大丈夫かしら？」

そんな大鳳の不安を他所に、満潮は研究開発部の職員と楽しそうに話していた。

「これの問題が解消されれば、深海棲艦の^{セフィラ}霊水晶の回収も少しは楽になるのだけど……」

そう言つて、大鳳は開発途中のある武装を見上げた。

成人男性と同じか、それ以上の大きさの武装。

玩具のピコピコハンマーを巨大化したような外見だが、その見た目に反して、GGG鎮守府の最終兵器とも称されるほどの力を秘めている。

艦娘が使うことを前提に設計がなされたが、その反動の大きさから未だに陽の目を見

ることがないその武装の名は……。

第1話

Another Side

翌日。

朝食を終えた雪風と初霜は、教導を担当する艦娘に言われた通り、夢幻島近海に存在する訓練海域にやってきた。訓練海域は防潜網が張られており、敵潜水艦の侵入を防いでいる海域である。

「来たわね。」

すでに訓練海域では、2人の教導を担当する艦娘——満潮が待機していた。しかし、主砲や魚雷は身に付けておらず、背中の艤装を装着しているだけだ。

「GGG海上機動部隊隊長、満潮よ。アンタたちの教導を担当するわ。」

「よろしく願います!!」

「じゃあ、早速訓練を始めるわ。しつかり付いてきなさい。」

そう言つて、満潮は巡航速度（18ノット）で海上を航行。

雪風と初霜もその後を追いかけるように航行する。

そして、基地がある夢幻島から数海里程離れた所で満潮は足を止めて振り返る。

「多分、知らないと思うから説明するわ。規則で許可なく、此処から先に行くのは禁止されてるから、気をつけなさい。」

「あの……どうしてですか?」

「防潜網はこの辺りまでしか張られていないのよ。此処を越えると、潜水艦の奇襲も警戒しなくちゃいけないのよ。」

そうやって、満潮は再び海上を進み始める。

先ほどは夢幻島から遠ざかるように航行していたが、今度は夢幻島に近づくように航行する。しかし、ただ航行するだけではなく、満潮は32ノット（約65km/h）——朝潮型駆逐艦の最大戦速——で航行する上に左へ、右へと舵を切るのでそれについていく2人は堪ったものではない。

「へえ……振り切るつもりで航行したのによくついて来たわね。

さすがは歴戦の駆逐艦と言った所ね。」

「雪風は、何も覚えてないですけどね。」

「そっちの事情はちゃんと知ってるわよ。

記憶喪失だから、不安だったけど、問題ないみたいね。」

実は、全ての艦娘が生まれた時から自由自在に航行できる訳ではない。

統計的に艦艇時代が長い船になる程、適応が早く、それこそ訓練なしに艦娘の身体で自由自在に海洋を航行できる。

初霜もかなり長い艦艇時代の経験があるので、自由自在に海洋を航行できる。

「じゃあ、今度は砲撃の訓練よ。」

現在位置から少し離れた海上を指差す満潮。そこには、2つの的が用意されている。

「航行しながら砲撃して、的に命中させなさい。もちろん、最大戦速で。」

そう言つて、満潮は2人の邪魔にならない位置まで後退する。

初霜と雪風は主砲を手に持ち、言われた通りに最大戦速で航行しながら、的を狙う。

2人はほぼ同時にトリガーを引き、炸薬を抜いた訓練用の弾頭を放つ。

しかし、そう簡単には当たらず、弾頭は的に掠りもしなかった。

「まっ、最初だから仕方ないわね。ほら、もう一回よ。」

「はい !!」

満潮の指示に従い、同じような訓練をもう一度行う。

そして、2人の砲撃訓練は、正午の鐘が鳴り響くまで続けられた。

1回目、2回目と最初は楽だが、回数を重ねていくと疲労が溜まっていき、回数が5回を超えると疲労はピークに達した。

唯一の休憩時間は消費した模擬弾を補給する時間だけだ。

「お昼の時間ね。後片付けは私がやっておくから、艦装を外して、食べてきなさい。午後からは座学だから。」

「は、はい………」

午前の訓練が終わると、2人は疲労と空腹でヘロヘロだった。

そのまま海面に腰を下ろしたくなるが、一度腰を下ろしてしまうと、しばらく起き上がれなくなる可能性があるのです、ふらふらになりながら基地に向かう。

「ふう……途中で根を上げると思ったけど、意外と根性あるのね。」

2人が基地に戻るのを見送った満潮は海上で一人呟いた。

そして、使った的を回収しながら波止場に戻ると、一人の男性が待っていた。

明るい茶色の長い髪を持ち、黄色のチョッキを羽織った男性だ。

「初日の教導、お疲れさま。ほら、飲み物。」

「ありがと、凱。」

明るい茶色の長髪の男性——獅子王 凱から艦娘用の燃料が入ったドラム缶（500ml）を受け取り、口を付ける満潮。

「あの2人はどうだった？」

「予想以上に根性があったわ。それに、才能もあるわね。」

まあ、前世の経歴を考えたら、才能がない方がおかしいけど。」

「終戦間際まで生き残った船と終戦後も活躍した船だからな。」

「才能があるのが羨ましいわ。それで、凱は何しに来たのよ？」

「雷牙おじさんに満潮を連れてくるように頼まれたんだ。」

「アレ」を使ってからメンテナンス受けてないだろ？」

「あゝ……：…：…そういえばそうね。」

「仕方ない。座学の方は朝潮姉に任せましょうか。」

「そう言つて、満潮は波止場に登り、凱と一緒に基地へ戻るのがだった。」

雪風 Side

「もぐもぐ……午後の座学、何時からでしたっけ？」

「もぐもぐ……一四〇〇からよ。」

一四〇〇……午後2時からですか。

座学までに30分くらいは休憩できそうですね。

「ゴクゴク……ふう、ごちそうさまです。」

GGGの食事は、どれも美味しいです♪

本来、艦娘は普通の人と同じような食事は必要ないのですが、きちんと味覚は備わっています。なので、人間と同じ食事は嗜好品でしかありません。

ですが、長官の方針でGGGに所属する艦娘は人間と同じ食事をとることになってい

ます。

その代わり、出撃がない日は畑仕事の手伝いとかしなければなりません。

「ごちそうさまです。人間と同じ食事って、何だか新鮮ね。」

「艦娘と人の距離を広げないため、だそうですよ?」

このGGGでは、艦娘であるわたしたちは人と同じ扱いを受けています。

何故かは分かりませんが、ここの人たちは、私たちのことも人として見てくれています。

長官の影響……なんででしょうか?

「初霜さん。座学の時間まで余裕がありますが、どうしますか?」

「そうですね……教室に向かいながら基地の中を見て回りますか?」

大まかに案内されただけで、全部の施設までは回ってないから」

「おおく良い考えですね。」

さあ、食器を片づけて、早速探検といきましょう!!



お昼を食べた後、少し寄り道しながら教室に無事到着しました。

基地の中は近代的な内装なのに、座学に使う教室はなぜか木製の椅子と机に黒板と古めかしい内装になっています。誰かの趣味でしょうか？

「2人とも揃ってますね。」

時間になって、入ってきたのは満潮さんではなく、黒い長髪の女の子でした。

「今日の座学を担当することになりました、朝潮型1番艦 朝潮です。

本日はよろしくお願いします。」

「よろしくお願いします !!」

「それでは早速ですが、この基地……GGGベイタワー基地について教えてください。」

朝潮さんがリモコンを操作すると、基地のホログラムが浮かび上がりました。

古めかしい内装なのに、こういう所は近代的ですね。

「このGGGベイタワー基地は4層構造からなる基地本体と複数のデイビジョン艦から成り立っています。一番関わる人が多いのは、これですね。」

映し出されたのは、わたしが来る時に乗ってきた飛行船です。

「高速射出甲板空母タケミカズチ。艦娘の輸送を主な任務とするデイビジョン艦です。遠方へ出撃する際は、これを使います。」

「大きすぎませんか？ もう少し小さくても大丈夫だと思うのですが……」

初霜さんがそんな質問をしました。

タケミカズチの全長は約230m。確かに艦娘を輸送するだけなら、もつと小型化できる筈です。特殊な装置を積み込んでるようですが、それにしても大きすぎると思いません。

「タケミカズチは艦娘以外にも大型の荷物を輸送できるように設計されています。

その関係で船体が大型化していったそうです。」

「一体、どんな想定をしていたんでしょうか……」

「あとは全域装甲補修艦ウカノミタマ。艦娘の艤装の整備、補給を行うディビジョン艦でタケミカズチと共に運用されることが多いです。」

タケミカズチの代わりに映し出されたのは、中央の船体を取り巻くように4つのユニットが配置された変わった形状の飛行船です。

その全長はタケミカズチとそれほど変わりませんが、こちらはまるっこい形になります。

「他にもディビジョン艦は存在しますが、関わる人が多いのはこの2隻です。

招集場所が艦名で指示されることも多いので、この2隻の名前と場所は覚えてください。」

「はむ。」

「他にも基地内にはいろんな設備や施設がありますが、これは実際に自分の目で見て覚えて行くのが良いでしょう。但し、此処は立ち入り禁止です。」

そう言って、朝潮さんは基地全体図の最下層を指しました。

「この区画は基地の動力炉があるので絶対に入らないでください。

下手をすると、基地丸ごと吹き飛ぶ可能性も存在しますよ。」

「は、はむ！！」

冗談と思いたいですが、冗談に思えません !!

「では、次は……」

この後、朝潮さんの座学は夕方あたりまで続きました。

第2話

雪風 Side

わたしたちの訓練が始まってから、すでに2週間が経過しました。

最初は、午前は海上訓練を、午後は座学というスケジュールで進んでいたのですが、もう座学の方は終了し、午後も訓練に充てられるようになりました。

今日も初霜さんと一緒に、訓練なのですが……今日はいつもと違います。いつもは訓練海域で訓練を行うのですが、今日の訓練の部隊は夢幻島にある山です。

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

「ほら、休んでる暇はないわよ。」

「は、はい……」

わたしたちは、夢幻島で一番高い山を登っている最中です。

でも、ただ登るだけではなく、四方八方から来るトラップを潜り抜けなければなりません。満潮さんが言うには、危険感知能力と危険にすぐさま対応できる能力を鍛える特訓だそうです。

それで、だいたい山の中腹まで来たのですが、もうボロボロです。

制服もあちこち破けてしまつて、肌は土汚れが一杯です。

「ほらほら。ちゃんと付いてこないよ、迷子になるわよ。」

そう言つて、満潮さんは木の枝を足場の代わりにして、上へ上へ進んでいきます。

何でも、この山はきちんとしたルートを通らないと迷子になってしまう不思議な山だそうです。なので、満潮さんの姿を見失うと一大事です。

「初霜さん、急ぎましよう!!」

「えっ、ええ。」

初日から何となく分かっていましたが、満潮さん、結構スパルタです!!
しかも、できるギリギリのラインの訓練を課してくるので、できないと言い訳できません。本人曰く、これでも甘い方らしいですが、そんなのは絶対に嘘です!!

「わっ!!」

あ、危なかったです……。木の根っこに引つ掛かって転ぶところでした……。

「だ、大丈夫?」

「大丈夫です!! それよりも早く追い掛けましょう!!」

満潮さんの背中が随分、小さくなっています。

これ以上、遅れてしまうと、本当に見失っちゃいます!!

「脚部に靈力を集中……脚力最大強化!!」

2週間に渡る訓練の間に身に付けた霊力のコントロール。

霊水晶セファイラから生み出される霊力は、普通全身を巡っていますが、一点に集中させて身体能力を引き上げることができます。

GGGに所属する艦娘には必須の技能らしいのですが、わたしがこれを習得できたのは昨日です。初霜さんはもう少し早く習得できていました。

「よっ、はっ」

限界まで強化した脚力を活かして、山道を駆け上がります!!

「ちよっ、ちよつと待つてえ〜」

初霜さんも私と同じように身体能力にブーストして追い掛けてきます。

——つと、また弓矢が飛んできました。段々、トラップが多くなっていますね。

「雪風さん、後ろ!!」

「?……うえっ!?!」

目の前には、紐で吊り下げられた一本の丸太。

って!! 満潮さん!! これは流石に危ないと思いますよ!?!

「せりゃあ!!」

飛んで来た丸太は、初霜さんの回し蹴りで別の方向に飛んでいってしまいました。

一緒に訓練している間に気付きましたが、初霜さん、大人しそうな雰囲気とは裏腹に結構アグレッシブです。攻撃する時とか容赦がありません。

「すいません、初霜さん。」

「守るのが私の役目ですから。それよりも、急ぎましょう。」

「はい!!」

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

「ぜえ、はあ……ぜえ、はあ……」

「40分。まあ、初めてにしては、悪くないタイムね。
私の姿を見失うようなこともなかったし。」

「あ、ありがとうございます……」

し、死にそうです……誰か、水を……

「はい、どうぞ」

「うううありがとうございます……」

あゝ……冷たい水が五臓六腑に染み渡ります。

普通の水がこんなに美味しく感じたのは、初めてかもしれません。

「はい、満潮もどうぞ。」

「んっ。」

「相変わらず、厳しい訓練してるわね。そのうち、新人が付いてこなくなっても知らないよっ。」

「大丈夫よ。できるギリギリのラインをやらせてるだけだから。」

ふう……ようやく落ち着いてきました。

それにしても、山の頂上にこんな神社が建っているとは……。

満潮さんと話している薄い赤毛の女の子は、この神社の巫女さんでしょうか？

「アンタたちにも紹介しておくわ。ここ、龍神神社たつがみの巫女、イムヤよ」

「八雲 イムヤよ。あんまり会う機会はないかもしれないけど、よろしく。」

「よろしくお願いします。」

「イムヤは、籍は入れてないけど、GGGの協力者よ。」

占いで敵の侵攻を予測したり、敵の拠点を占ってくれたりしているわ。」

「まあ、百発百中じゃないから、よく当たる占い程度の信頼性だけだね。」

それよりも、満潮。ちよつと大事な話があるの。」

「ん。分かったわ。アンタたちは、少し休んでなさい。」

水が欲しいなら、あつちに水飲み場があるから。」

そう言つて、イムヤさんは満潮さんを連れて、神社の方に入って行きました。むく……話の内容はすつごく気になるのですが、動く元気がまだありません。ここは、大人しくしておきましょう。

あゝ水が美味しいです。



Another Side

一方、その頃。

日本本土に存在するとある鎮守府。

大本営には第4鎮守府として登録されているその鎮守府で怒号が響き渡る。

「雪風はまだ見つからんのか!!」

声の発信源は、白を基調にした軍服を身に纏ったまだ若い男性だ。

その眼前には奇抜な衣装を身に纏った少女が2人と黒を基調にした制服を身に纏った少女が1人。その背に背負う武装から彼女たちが艦娘であることが分かる。

「貴様ら!! まさか、わざと見逃してるんじゃないだろうな!？」

「[[[……]]」

男性の怒声を聞いても、三人は怯むこともなく、一言もしやべらない。

ただ、彼女たちが男性に向ける視線は敵意を孕んでいるのは明確だった。

「その気になれば、俺の一存で解体することもできるんだぞ !？」

「好きにすれば ? 姉妹を売るくらいなら、解体される方がマシよ。」

脅迫してきた男性に対し、水色の髪の少女が強気に言い返す。

その態度がさらに男性をイラつかせるのだが、次の言葉を遮るように部屋に備え付けられた黒電話が鳴り響く。

「ちっ……もう下がって良い。」

男性がそう言うと、少女たちは無言で部屋から出て行く。

そして、足音が聞こえなくなるほど離れた所で男性は受話器を取った。

「私だ。——ああ、お前か。残念だが、雪風の奴はまだ見つかっていない。

こちらも全力で探しているが、何処に消えたのか見当もつかん。

分かっている。あいつが持っている情報が外部に漏れるのは面倒だからな。

それで、そちらの首尾はどうなんだ？ —— ほう、そうか。」

受話器の向こう側からもたらされた情報に男性は口を歪める。

「ああ、分かった。そちらに視察に行かせてもらおう。」

そうやって、男性は電話を切った。

男性は白い提督服の上から茶色のコートを羽織ると、足早に部屋から出て行くのだった。

そして、照明も消え、薄暗く静かになった刹那、天井の板が外されて誰かが降りて来た。

短めの黒髪に橙と白を基調にした衣服を纏うその姿は忍者を彷彿とさせる。

そして、首に巻いたマフラーの端にはGGGのロゴが刺繍されていた。

「川内さん参上、てね。」

『バカなことやってないで、さっさと仕事しなさい』

「はいはい。分かってるよ。」

右の耳に装着したインカムから聞こえてくる声に忍者風の少女―川内は緊張感のない返答を返す。

「じゃあ、さっさと済ませようかな。」

そう呟いて、川内は男性が業務で使っている机の中を物色し始める。

几帳面な性格だったのか、書類はファイルに綴じられて引き出しに収納されていた。ファイルを一冊ずつ確認していく川内が、収められている書類は至って普通の物だ。

「うーん……ほとんど普通の書類かあ。分かりやすいように隠してて欲しいなあ」

そう呟きながら物色を続ける川内。

そして、ファイルを全て取り出した所で、彼女はあることに気付いた。

「ははくん、二重底になってたのか。その中身は……」

引き出しは二重底になっており、一番下には黒いノートパソコンが隠されていた。

川内はノートパソコンの電源を入れ、中身を確認するが、パスワードによるロックが掛けられていた。

「まあ、そう簡単に中身は見せてくれないか。」

そう呟き、川内はUSBメモリ型の端末を取り出し、ノートパソコンに接続する。

「夕張、ロックの解除とデータの抜き取り、任せたよ。」

『りょーかい。ちよつと待っててね。』

パソコンの方をインカムの向こうに居る相棒に任せて、川内は物色を続ける。

しかし、ノートパソコン以外に見つかったのは普通の書類ばかりで必要とする情報を見つけることはできなかった。

『データは全部コピーしたわ。撤退するわよ』

「オツケー。」

川内はパソコンに差したハッキング用の端末を回収し、物色した痕跡を消すと屋根裏

へと戻って行った。

さらに、侵入する時に使ったルートを遡って、鎮守府の外へと脱出する。

人目に付かないように行動し、川内が向かったのは第4鎮守府の近くにある森の中だ。

「ボルフオッグ」

刹那、何もなかった筈の森に一台のパトカーが姿を現す。

『ここに。潜入ご苦労様です、川内隊員』

「これくらい余裕よ、余裕。」

川内が助手席に乗り込むと同時にパトカーは出発し、鎮守府からどんどん離れる。

そして、その運転席——実際に運転している訳ではないが——では、川内の相棒が愛用のノートパソコンと睨めっこしていた。

「夕張、そつちはどう？」

「パツと見た感じはプライベート用の端末っていう感じね。

でも、不審はいくつもあるから、要調査ね。」

『一度、GGGに帰還しましょう。猿頭寺オペレーターの手を借りれば、何か分かるかもしれない。』

2人が乗車する。パトカーに備え付けられたスピーカーから男性の声が響く。

「そうだね。ついでに陽炎たちと合流しようか。」

「——という訳でボルフォッグ。一先ず、別働隊と合流しましょ。」

『了解しました。ウルテクエンジン、全開！！』

いつの間にか海岸線に出ていたパトカーは砂地を諸ともせず、海に飛び出した。

そのまま海の底に沈んでしまうかと思いきや、パトカーは海上を走り、やがて周囲の景色と溶け込むようにその姿を消すのだった。

第3話

雪風 Side

私がGGGに入ってから、1カ月の月日が経過しました。

1カ月の間、私と初霜さんは無理のない程度に訓練を積み重ねてきました。

そして、今日はその集大成を見せる日です!!

具体的には、教官である満潮さんとの演習です。

この演習を通じて、合格が出されれば、晴れてGGGの艦娘部隊に正式配属されることになります。

『全員、準備は良いか?』

「満潮、いつでも始められるわ。」

「雪風も大丈夫です。」

「私も大丈夫です。」

今回、審判役を担当してくれるのは、獅子王 凱さん。雷牙博士の甥っ子です。何でもGGGの機動部隊の隊長さんで、いろんな人から勇者と呼ばれているそうです。

——つと、それよりも今は集中しないと……。

『制限時間は無制限。満潮に直撃弾を当て、もしくは雪風、初霜両名の撃沈で終了。武器の使用は自由だが、弾薬の補給は無し。以上がルールだ。』

「あの……撃沈判定はどうなっているんでしょうか？」

『ボディに演習弾が5発命中、もしくは頭部に1発のどちらかで撃沈判定だ。それから、演習魚雷の直撃でもアウト。他に質問はないか？』

「はい！」

『じゃあ、演習開始だ!!』

凱さんの号令と同時に見極め試験を兼ねた演習が始まりました。

満潮さんの実力は未知数ですが、少なくとも強敵なのは間違いないです。

心して掛らないと……

「雪風さん、私が先制します!!」

「了解です!!」

12. 7cm連装砲と12cm単装砲を装備した初霜さんが砲撃を開始。

時間差を付けて、私も砲撃です。今日の演習のためにいろいろ作戦を練りましたからね。

真つ直ぐ突つ込むような愚策はしません!!

「撃ちます!!」

今撃ってるのは、全て牽制です。

そして、牽制に紛れ込ませるようにして、訓練で鍛えた精密射撃で狙い撃ちます!!
下手に動けば、牽制用の砲弾に当たる可能性が高くなります。これなら、満潮さんは下手に動けない筈です!!

「牽制に紛れての精密射撃……まあまあな戦法ね。でも、GGGの艦娘に」

——? 満潮さんが手に付けてるのは……ナツクルガード?

あんなモノを何に使うんでしょうか? 邪魔になるだけのような……

「そんな普通の戦法は無意味よ」

「えええつ!!!」

満潮さんが取った行動に驚愕しました。

満潮さん、手に付けたナツクルガードで身体を狙った砲弾を全部切り裂いたんです!!

確かに使用する武器は自由とは言ってましたが、それってアリなんですか!?

「別に艦船を生まれ変わりだからって、かつての戦い方に拘る必要なんてない。むしろ、人の姿になった利点を潰してるんだから、愚策と言っても良いわね。」

た、確かに、満潮さんの言う通りです。

艦娘は第2次世界大戦期に存在した艦船の生まれ変わりですが、行動に関して特に制限が設けられている訳ではありません。完全に失念しました……。

「それと、驚いて足を止めるのも愚策よ?」

「!?!」

視線を下に落とせば、海面には白い軌跡。

満潮さん、砲弾を切り裂くと同時に魚雷を……!!

「くう!!」

魚雷に向かって、12・7cm連装砲を撃って、破壊。

しかし、もう一本の魚雷まで対処することができませんでした。

こうなったら……仕方ありません!!

「えいつ!!」

——ドカーンッ!!——

「へえ……良い判断力ね。」

「ゆ、雪風さん!! 大丈夫ですか!？」

「だ、だいじょうぶ……」

直撃は免れたけど、痛かったです……。

何をしたかと言いますと、満潮さんの模擬魚雷が当たる寸前に背中の魚雷発射管から

魚雷を一本抜き取って、投擲したんです。おかげで轟沈判定は避けることができました。

「助言した直後で実行できるなんて、やっぱり才能かしらね。

これなら、少し本気になっても良いわね。」

「っ!!」

満潮さんが一直線にこちらに向かってきます。

しかも、我武者羅に突っ込んでくる訳ではなく、的確な砲撃でこちらの動きを妨害してきます。というか、軽く40ノットは出てますよね!?

「初霜さん!! 雪風が前に出ます!!」

貴重な魚雷を発射管から抜いて、満潮さんに向かって投擲します。

投げた魚雷は空中で爆発しますが、それがちょうど目晦ましになってくれました。

あつ、言い忘れてましたが、演習用の魚雷と砲弾には炸薬が入っています。実戦で使

う物に比べると、その量は少ないですが。

「撃ちます!!」

煙で視界を封じている間に、残った魚雷を発射。

雷跡が見えにくい酸素魚雷なら、気付かれない筈……と思つてた時期が私にもありました。ちょうど煙の向こうで大きな水柱が立ち昇りました。

どうやら、迎撃されてしまったみたいです。

「どうしましょう?」

「一先ずは時間稼ぎです!!」

初霜さんがボールのようなモノを投げて、12cm単装砲で撃ち抜きます。

すると、ボールから白い煙が撒き散らされて、視界が真っ白になります。

何時の間に煙幕なんて用意していたんでしょうか?

『雪風さん、聞こえますか？』

『はい、感度良好です!! それより、これからどうします？』

弾薬は残っていますが、私は魚雷が使いません。

次発装填システムを使えば、もう一回撃てますが、そんな暇を与えてくれるようには
思えません。

『不意を突いて、砲撃するしかないと思います。もしくは、雷撃ですね。』

『どちらも一筋縄ではいかないですね……』

凱さんから聞いた話によると、満潮さんはGGGに初めて着任した艦娘らしいです。

なので、戦闘経験も私たちとは比べ物になりません。近づくことも難しいでしょうし、不意を突くのも同様ですね。

あれ？ この状況、詰んでませんか？

『このままだと敗北確定ですね。』

『そうですねえ。さすがに経験の差が出ましたかねえ。』

『でも、負けるのは少し癪に触ります。』

『ですね。せめて一矢報いましょうか。』

『はい。——つと、そろそろ煙が晴れます。ご武運を』

『はい。』

さあ、この雪風、そう簡単にはやられはしませんよ
!!

．．．

．．．．．

.....

「2人とも轟沈判定で演習終了。まあ、初めての模擬戦なら、こんなモノね。」

結果、一矢報いることすらできずにやられました。

煙が晴れた後、初霜さんが集中攻撃を受けて脱落。1対1になって、10分も持たずにわたしも脱落してしまいました。

「さて、演習の結果だけど……」

ううう……演習には勝てなかったし、これと言って特に何か出来た訳でもない。不合格確定ですよ。初霜さんも俯いてますし……

「合格よ。」

「——えっ?」

き、聞き間違いでしょうか? 今、合格という言葉が聞こえたような……

「だから、2人とも合格よ。これで海上機動部隊の一員ね。」

「えっ? でも、私たち、演習に負けましたし……」

「誰が演習に勝てない! 不合格って言ったのよ。」

「この演習は、2人の心構えを見るための試験なんだ。」

だから、重要なのは強敵相手に諦めずに勝利を掴もうとする意志なんだ。」

「凱の言う通りよ。アンタたちは、ちゃんと基準を満たしたから、合格。」

実力は実戦を通じて磨いていけばいいわ。はい、配属通知。」

そう言われて、渡されたのは正真正銘の配属通知です。

しかも、長官さんの印鑑がちゃんと入っています。内容は、「駆逐艦 雪風、初霜兩名を「第77駆逐隊」へ配属する。」と簡素なモノでした。

「第77駆逐隊って言うところ……あの2人が居る部隊か。」

「ええ。ちょうど人数も足りなかったし、この2人には良い経験になるでしょ。」

「そうだな。」

2人は何やら笑っていますが、こっちはとても不安ですよ。

あつ、海上機動部隊って言うのは、満潮さんを隊長とするGGGの機動部隊です。艦娘のみで構成されていて、さらに6人1組の部隊に分けられています。

メンバーは固定されている訳ではなく、時と場合によって入れ替えるそうです。

「じゃあ、部屋まで案内するわ。」

「俺はメインオーダールームに戻るよ。演習で消費した資材は俺から報告しておく。」

「悪いわね、凱。」

「気にするな。」

そう言い残して凱さんは一足先に基地の方へ戻って行きました。

「じゃあ、改め部屋まで案内するわ。」

「お願いします。」



「ここが第77駆逐隊の部屋よ。これからはこつちで生活することになるから、今週中に荷物を移しときなさいよ。」

「わかりました。」

——つと言つても、わたしも初霜さんも荷物はほとんどありませんけど。

「それじゃあ、私は失礼するわ。同じ駆逐隊の子と仲良くね。」

そう言つて、満潮さんはさつさと立ち去つて行きました。
さて、この部屋ではどんな人が待っているのでしょうか？

コンコンコンコンッ

「どうぞぞ〜」

「失礼します。」

入室の許可を貰い、引き戸を開けるとそこには……………

「喰らえ、ムクホークの命がけ !!」

「あああつ !! 私のメガサーナイトちゃんが !!

——というか、初手から自爆技なんて奇抜すぎです !!」

「定石は常にぶち壊すためにあるのさ !!」

広い部屋の中にはコタツが1つ、大きな画面のテレビが1台。他にも、本棚やガスコンロなどの生活家具が色々。

そして、その大画面のテレビを使って、遊んでいる女の子が2人居ました。

「おっと。満潮から話は聞いてるよ。

第77駆逐隊所属、暁型駆逐艦 響だよ。その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるよ。」

「同じく第77駆逐隊所属、綾波型駆逐艦 潮です。

これからよろしくね、初霜ちゃんに雪風ちゃん。」

「は、はあ……」

テレビの方に集中しながら自己紹介されても……

いや、すごく厳しい人と一緒にやないだけ良いんですが、流石に緩み過ぎじゃないでしょうか？

「立ってないで座ったらどうだい？ 此処はもう君たちの部屋なんだから。」

「あ、はい。」

「お、お邪魔します……」

「ちよつと待っててね。2タテしてすぐに終わらせるから。」

「それからゆつくり話しましょう。」

そう言って、集中する響さんと潮さん。

……この駆逐隊、こんなに自由で大丈夫なんですか？

第4話（前編）

雪風 Side

「さて、待たせたね。」

「うう……負けちゃった……」

ひと段落したのか、響さんと潮さんがようやくくつちを向いてくれました。

「歓迎するよ、雪風に初霜。第77駆逐隊へようこそ。」

「今日からよろしくね。」

「よろしくお願いします！！」

「さてと、取り合えず色々決めないとね。」

2人は畳かベッド、どっちが良い？ 私たちは畳みで寝てるけど。」

「雪風は畳の方が良いです。初霜さんは？」

「私はどちらでも構いませんよ。」

「じゃあ、全員畳だね。模様替えする必要がなくて助かるよ。」

布団はあそこの中に人数分入ってるから。」

そうやって、響さんは扉のすぐ横にある押入れを指差しました。

「それから、私物も押入れの中に入れるように。」

空きが足りなくなったら買い足すけど、今は押入れで。」

「2人の荷物ってどれくらいあるの？ 引っ越しとか手伝うけど……」

「ほとんどありませんよ？ 座学で使った教本ぐらいです。」

潮さんの質問にそう返事をする、響さんも潮さんもビックリした表情を浮かべました。

わたし、何か変なことを言ったのでしょうか？

「えっと……初霜ちゃんも？」

「はい。」

「……2人とも空き時間とかどうしてたの？ 丸一日訓練って訳じゃないよね？」

「」

「部屋で座学の復習とか予習とか」

「あとは靈力のコントロールの練習ですね。」

「——ということ、町に出ることもなく、給料は手つかずの訳か。」

「そうですね。着任してからは訓練以外で外に出たことはないです。」

別に基地から出てはいけないという規則はありません。

夢幻島にある町に行けば、いろいろなモノが買えるのですが、わたしも初霜さんも特に欲しい物がある訳ではなかったので外に出なかつただけです。

あつ、補足しておきますと、わたしたちはきちんとお給料貰ってますよ？
補給とか艀装の整備はタダでできるので、今まで使ったことはありませんが。

「……潮、明日の予定は？」

「午前の訓練だけです。受注してるクエストもありませんし。」

「じゃあ、午後からの予定に外出って付け加えておいて。」

「分かりました。」

「雪風と初霜も明日の午後は空けておくように。これは旗艦命令だよ。」

響さんが有無を言わせないような雰囲気ですんな命令をしてみました。

そして、その直後。パイタワ―基地全体に緊急事態を報せるアラートが鳴り響きました。

『緊急事態発生 !! 海上機動部隊隊員は至急ビツクオーダールームに集合してください !! 』

「やれやれ。今日はゆつくりできると思っただけだな。」

「仕方ないよ、響ちゃん。雪風ちゃん、初霜ちゃんも行くよ。」

「はい !! 」



Another Side

——GGGベータタワー基地　ビックオーダーーム——

「長官。一体、何があつたんですか？」

「うむ。つい先ほど、輸送船の護衛に出ている部隊から緊急連絡が入った。姫級の深海棲艦をリーダーとする敵の艦隊が久野島へ向かっている。」

長官の報告に緊張が奔る。

何故なら、久野島はGGGにとって重要な拠点の1つであるからだ。

久野島は夢幻島から数海里離れた場所に存在する無人島であり、その島では潤沢な資源を手に入れることができる。その島から得られる資源はGGG海上機動部隊の運用に使われる他、民間企業を介して本土へ輸出される。

なので、そこを奪われると、いろいろな問題が発生してしまう。

「長官、追加の連絡です !! 護衛対象の輸送船が逃げ遅れているみたいです !!」

「ふむ……猿頭寺くん。護衛艦隊から敵の編成に関する情報は？」

「現時点で駆逐級が3隻、重巡級が2隻、戦艦級が2隻。

それ以外にも、3隻の空母級と姫級の深海棲艦が確認できるそうです。」

「elite個体やflagship個体は？」

「戦艦級及び空母級はflagship個体、重巡級及び駆逐級はelite個体とのことです。」

「向こうも本気ね。それだけ、あの島の資材が欲しい訳か……」

猿頭寺の報告に満潮は眩く。

深海棲艦には、通常個体の他に赤いオーラを纏った個体——elite個体、黄色いオーラを纏った個体——flagship個体つといった上位の個体が確認されてい

る。

上位個体は、通常個体に比べると全体的に能力が向上しており、戦艦級のflagship個体にもなると、かの有名な大和型戦艦でも一発で大破させる可能性がある。

そんな個体が徒党を組んで、1つの島に向かっていているのだ。

深海棲艦が、久野島の存在をかなり重要視しているのが分かる。

「第1艦隊は第3艦隊と共に輸送船の防衛、深海棲艦の撃滅に当たれ！！

大鳳くん、君も出て貰えるか？」

「はい。」

長官の秘書を務めている大鳳に出撃命令が下る。

ちなみに、彼女はGGGの艦娘の中で唯一、海上機動部隊に所属していない。

普段は秘書をしており、戦力が必要な時にピンチヒッターとして、参戦する。

大鳳も古参に分類される艦娘な上、GGG海上機動部隊唯一の空母娘なので、居る居ないの差は大きい。

「長官、第77駆逐隊も第2艦隊として出撃させても構わない？
護衛に出てる艦隊と一緒になら、素人が入っても大丈夫な筈だし。」

「うむ、許可しよう。」

「ありがと。さあ、全員さつさとタケミカズチに乗りなさい！！」

——了解!!——

満潮の言葉を皮切りに命令を受けた面々は行動を開始する。

素人の雪風と初霜は響と潮が先導してタケミカズチへ乗り込み、他の面々もタケミカズチへ乗り込む。

そして、ビックオーダーームにGGGオペレーターの面々と陸上機動部隊の隊長である凱だけが残された。

「卯都木くん、満潮くんに通信を繋いでくれ。」

「はこ。」

機動部隊のオペレーターを務める女性、卯都木 命は満潮に秘匿通信を繋げる。すると、スピーカーから不機嫌そうな声が発せられる。

『何か用？ こっちは出撃準備で忙しいんだけど。』

「すまないな。雷牙博士からの伝言を伝えておくのを忘れていたんだ。霊水晶セフィラの回収よりも自分の命を優先して欲しい、だそうだ。」

『まったく……あの爺さんも心配性ね。』

スピーカー越しに呆れの感情が交じった声が聞こえる。

『大丈夫よ。私の身体の話は、私が一番分かってるわ。』

前に使ってから十分休憩も摂ったし、何の問題もないわよ。

じゃあ、そろそろ出撃だから。』

そう言い残して、満潮は通信を強制的に切断する。

「スワンくん。『Gアーマー』の開発状況はどうなってる。」

「難航してマース。少なくとも、あと2カ月は掛るそうデース。」

「そうか……」

「大丈夫ですよ、長官!! 本当に危なかったら、私と凱が止めますから!!」

「ああ、頼んだぞ。」



——高速射出甲板空母タケミカズチ内部——

雪風 Side

「今回の作戦を説明するぞ。」

タケミカズチがベイタワー基地を出ると同時に作戦会議が開かれました。

艦橋には、満潮さんが旗艦を務める第1艦隊、私と初霜さんが所属することになる第77駆逐隊。そして、ピンチヒッターの大鳳さんが集まっています。

「久野島周辺の海域では、すでに戦闘が始まっている。」

今は、護衛部隊が島と輸送船の防衛に当たっているが、そう長くは持たないだろう。」

メインモニターには、目的海域の情勢が映し出されています。

敵の艦隊は駆逐級と重巡級を先頭に出して、防衛部隊と戦闘と繰り広げていますが、制空権を取られている上に物量的にこちら側が不利です。

「そこで第1艦隊は敵背後に展開、第2艦隊は護衛艦隊と合流。敵艦隊を挟撃する。

重要なのは第1艦隊が迅速に敵艦隊を撃滅することだ。満潮、できるか？」

「誰に言ってるのよ。30分以内に終わらせるわ。」

「火麻参謀、私はどうすればいいでしょうか？」

「大鳳は第1艦隊の援護に入ってくれ。」

「了解しました。」

「よし!! 全員、気を抜くんじゃねえぞ!!」

——はい!!——

・・・

・・・

.....

.....

「ううっ……緊張します。」

「そういえば、2人は今日が初出撃だったね。」

「はい。今までは演習ばかりだったので……」

「——ってことは、あんまり艦娘の戦闘に慣れてない訳か。」

響さんの言葉に頷きます。

「どうしますっ？」

「まあ、大丈夫かな。私たちは今回、護衛艦隊の手伝いだし。」

そう言いながら、響さんはリフトに乗りこみました。

私たちも続いてリフトに乗ると、4人を乗せたりフト上へ上へと昇って行きます。そして、到着したのは広い円形の通路。

「第77駆逐隊、出撃するよ。」

響さんの声に反応して、天井からわたしたちの艦装が降りてきました。艦装を装着し、準備完了です !! —— つと言いたい所ですが……

「あの……響さん、潮さん。その手に持つてる武器はなんですか？」

響さんと潮さんはわたしたちとは少し違う武装を持っていました。

響さんは赤色の宝石がはめ込まれた白い籠手に錨のような武装。

潮さんは金色のドリルが付いた黒い槍のような武装をそれぞれ持っています。

「ん？ Gウエポンのことは習ってないのかい？」

「ああ、それがGウエポンなんですね。初めて見たので分かりませんでした。」

G G Gの艦娘の切り札、Gウエポン。

詳しいことはわたしも知りませんが、特殊な宝石を動力源とする武装の総称だそうです。

中には戦艦級深海棲艦の装甲を容易く貫けるような武器も存在するらしいです。

『おい、準備はできたか？』

「——つと、火麻参謀がお待ちだ。準備完了だよ。」

『よし。今から射出するが、すぐに戦闘になるからな。気をつけろよ。』

「了解だよ。」

刹那、銀色の粒子がまるでボールのように私たちを包み込みます。

「第77駆逐隊、出るよ。」

物凄い加速度を感じた刹那、銀色の粒子がはじけ飛んで、外の様子が確認できるようになりました。視界に飛び込んできたのは、蒼い海と砲撃によって次々に水柱が立ち昇る光景。どうやら、もう戦闘が始まっているみたいです。

「——つて、此処空中じゃないですか!!」

「そっだよ。」

「私たち、落下傘なんて持ってきてませんよ!?!」

いきなり空中に放り出されたことに慌てる私と初霜さん。

一方で響さんと潮さんは、こんな状況に慣れているかのように落ち着いています。

「うん。上手く着地しないと、結構痛いから気を付けてね。」

「これに関しては私たちも補助できませんからね。」

「へっ?」

次の瞬間、私たちは海面に墜落し、特大の水しぶきを上げることになったのは言うまでもありません。

第4話（中編）

Another Side

——久野島周辺海域——

久野島周辺海域では、輸送船の護衛を頼まれていたGGGの艦娘たちが深海棲艦の艦隊と戦闘を繰り広げていた。そして、彼女たちの背後には輸送船が撤退の準備を急いでいた。

上空には敵の艦載機がハエのように飛びまわり、すぐ近くまで駆逐級の深海棲艦と重巡級の深海棲艦が迫っている。

対して、護衛の艦隊は軽巡洋艦娘を旗艦とする水雷戦隊。

制空権を確保されている上に敵は駆逐艦や軽巡洋艦よりも堅い装甲と高い火力を保有する重巡洋艦で構成されているため、苦戦を強いられるのは自明の理。

しかしながら、防衛戦が展開されている久野島周辺海域では、その予想を裏切るような光景が広がっていた。

「フリージングガン !!」

青い銃から放たれる冷線が海面を氷結させ、敵の身動きを止める。

Gウエポンの1つーフリージングガンを携えるのは、薄い茶色の髪をツインテールにした少女。その名は、白露型駆逐艦三番艦 村雨。

「切り込み隊長、白露!! 一番に突っ込むよ!!」

村雨が作り上げた氷の床を1人の艦娘ー白露型駆逐艦一番艦、白露が駆ける。

その手に握られているのは、クレーン車のクレーンをそのまま小さくしたような武装だ。

「ウルテクライフル !!」

身動きが取れなくなった重巡り級eliteに向かつて、至近距離からエネルギー弾を連射する白露。

「これでトドメだよ!!」

トドメに虎の子の九三式酸素魚雷を投擲。

戦艦級の主砲に匹敵する炸薬量を誇る魚雷の爆発は、身動きを封じる氷ごと敵艦を沈める。

「白露、いっちばーん!!」

「白露姉さん、前に出過ぎです。今回の戦いは防衛戦なんですよ?」

敵艦を沈めて、テンションが上がっている白露を諫めるのは、ピンク色の髪をポニーテールにした艦娘——白露型駆逐艦五番艦の春雨。

彼女の言う通り、敵を撃滅しても輸送船の方に被害が出てしまうと、この戦いの意味がなくなってしまう。だからこそ、後ろを省みずに前進する姉を諫めたのだが、本人はさほど気にしていない。

「大丈夫だよー。だって……」

白露が何か言おうとした時、2人の上空を敵艦載機が通りすぎる。

敵の艦載機は腹の下に抱えた爆弾を撤退中の輸送船に向かって投下する。

しかし、それは船体を貫く前に不可視の力を受けて弾かれてしまった。

『輸送船の守りは那珂ちゃんにお任せ〜♪』

装着したインカムから聞こえてくるのは、軽快な音楽と陽気な声。

爆弾を弾いた不可視の力の正体は、護衛艦隊の旗艦を務める軽巡洋艦、那珂のGウエポン——ギラギラーンVVVの力である。

（——とは言っても、あんまり一度に来られると厳しいんだよね〜）

那珂は口に出さずに心の中で呟いた。

先ほどはギラギラーンVVVから放たれる衝撃波によって、爆弾を弾き飛ばすことで輸送船を守った。しかし、衝撃波はそれほど広範囲に放つことはできないので、敵の攻撃

を的確に見抜く必要がある。

(できれば、早く援軍が来て欲しいな)

心の中で呟いた瞬間、村雨が声を上げた。

「2人とも!! 敵機直上!!」

村雨の声に反応して、空を見上げると同時に敵空母の艦載機が爆弾を投下。投下された爆弾は一直線に2人へ向かっていくが、その前に熱線が爆弾を破壊する。

「ふうく……危ない所でした。」

「あ、危なかったあー。ありがと、春雨」

「油断しないでください。こっちに空母は居ないんですから。」

そう言いながら春雨は、赤い熱線銃―メルティングガンで次々に敵の艦載機を落とすていく。

「空母が居ないと、ちよつとキツイわね」

そう呟きながら駆逐イ級後期型を倒す村雨。

現在、彼女たちが対処しているのはあくまで先遣隊であり、その奥には空母級や戦艦級、さらには姫級の深海棲艦が控えている。敵の旗艦にたどり着くには、敵の艦載機による攻撃を避けつつ、射程範囲内まで近づく必要がある。また、近付けても早急に旗艦を倒さなければ、集中攻撃を浴びることになる。

「こういう時、私たちだと辛いわね……」

「でも、やるしかないです!!」

「だね!!」

3人は、Gウエポンを握りしめ、敵艦隊に突貫しようとする。だが、その時。インカムから「その必要はないよ。」という通信が届けられる。援軍が到着したのはその直後だった。

「ごめん、遅れた。」

「遅いわよ、響ちゃん。主力の方は？」

「敵艦隊の背後だよ。ほら、一瞬で戦艦が沈んだよ。」

そうやって、敵本隊を指差す響。

戦艦級、空母級、姫級の深海棲艦から構成される敵艦隊では、早速火の手が上がっていった。

「雪風ちゃんと初霜ちゃんは……大丈夫？」

「だ、大丈夫です……」

盛大に海面に叩きつけられた2人は、顔が叩かれたように赤くなっていた。

「2人は対空戦闘を。1機も輸送船に近づけたらダメだよ。」

「はい!!」

「さて、やりますか。」「うん。」

響と潮は、Gウエポンを構える。

「潮、行きます!!」

真っ先に前に出たのは、潮だった。

春雨たちを追い抜いて、重巡ネ級eliteに肉薄する。

そのアルビノのように白い身体にランスを突き刺そうとするが、障壁のようなモノによって防がれてしまう。

障壁の正体は艦娘と深海棲艦が持つ靈力フィールド、通称“装甲”。

艦船で言う装甲の役割を果たすそのフィールドは、艦種によって強度が異なる。

重巡ネ級、それもelite个体となれば、その堅さは戦艦級に匹敵する。

駆逐艦娘がその装甲を抜くのは簡単ではないが、それは一般論にすぎない。

「ストレイトドリル!!」

潮のGウエポン―ストレイトドリルが回転し、重巡ネ級eliteの装甲を突き破る。

そして、金色の穂先が白い肢体に突き刺さる。

「――ツ!!!」

「(い)めんなさい。」

心臓を貫かれた深海棲艦は膝から崩れ落ち、そのまま海中へと沈んでいく。

「さっすがー♪ でも、一番は譲らないよ!!」

「もう……夕立姉さんと一緒に言う事聞かないんだから」

潮に続くように白露、春雨が残った駆逐級や重巡級と戦闘を始める。

久野島近海の戦いはそろそろ終焉を迎えようとしていた。



「す、すげえ……」

自分たちの先輩に当たる艦娘の戦いぶりに初霜と雪風は驚嘆した。

彼女たちの人の姿を活用した戦闘法は、荒々しくも合理的だった。

遠距離からの攻撃で装甲を抜けないなら、至近距離まで近づいて強引に火力を上げる。

もしくは、近接格闘戦用の装備を用いて、強引に装甲を切り裂く。

そんな方法で敵と戦いながら、敵を駆逐して行く。

「凄いでしょ？　これが那珂ちゃんたち、GGG海上機動部隊の実力だよ。」

「えつと……どなたですか？」

「川内型軽巡洋艦3番艦の那珂ちゃんだよー♪　よろしくね♪」

茫然としている2人に話しかけてきたのは、お団子頭の少女―那珂だ。

そのオレンジと白を基調にした衣服の裾には、GGGの紋章が刺繍されている他、首からはギターのような武器―ギラギラ―ンVVを掛けている。

「いやゝ援軍が間に合ってくれてよかったよ。」

あのままだと絶対に押し切られたし。――つと、また来たよ！！

「撃ちます！！」

大鳳が撃ち漏らした敵の爆撃機に向かって、対空戦闘用の砲弾を撃ち出す初霜と雪風。

撃ち出された砲弾―駆逐艦用の零式通常弾が破裂し、飛び散った破片が爆撃機の身体に穴を開ける。しかし、撃ち漏らしが存在した。

「弾種、対空用気化弾。撃てえ！！」

2人が撃ち漏らした爆撃に向かって、那珂が装備した20・3cm連装砲から対空砲弾が放たれる。

放たれた対空砲弾は炸裂と同時に強い爆風を巻き起こし、撃ち漏らした敵の爆撃を薙ぎ払った。

「危ない危ない。でも、敵の航空攻撃ももう終わりかなあ？」

「どうしてわかるんですか？」

「那珂ちゃんの偵察機からの情報だよ。」

第1艦隊が空母をサクツとやっつけてくれたみたい。」

「こんな短時間でですか !? 」

援軍が到着したのは数分前。つまり、第1艦隊の面々はこの数分間の間に敵の空母を無力化、もしくは撃沈してみせたのだ。

「まあ、第1艦隊はそれができくらゐの実力者しか居ないからね。おっと。いつの間にかこっちの方も終わってるね。」

少し話している間に敵の先遣隊は全滅しており、残されたのは敵の本隊から派遣された戦艦級の深海棲艦だけだった。



「さて、あの大物を頂こうかな。」

響は、Gウエポンを装備した右腕を上げる。

その先に居るのは、間に合わなかった敵本隊からの援軍——戦艦夕級flagshipだ。

そして、白い籠手のような装備にはめ込まれた宝石に「J」の文字が浮かび上がる。

「ジェイクオース!!」

錨状のGウエポーンが赤い光と纏うと同時に、射出。

それは、まるで不死鳥のような炎の鳥となり、戦艦夕級flagshipへ向かっていく。

籠められた膨大なエネルギーの恐れをなしたのか、敵は射線上から退避する。

「無駄だよ。」

——が、響が放ったジェイクオースは敵を追尾するように軌道を変える。

「——ッ!!!」

追い付いた炎の鳥は、敵の装甲を容易く貫き、心臓をも貫く。

心臓を貫かれた戦艦タ級 flagship は断末魔の悲鳴を残して、海に沈んでいった。

「……やっぱり姫級じゃないと、核が耐えられないか。」

ジェイクオースが戻ってくると、響の手には黒い結晶が握られていた。

しかし、その結晶はすぐに粉々に砕け散ってしまい、破片は持ち主を追い掛けるように海に沈んでいった。

「状況終了。先遣隊の方は倒したよ。」

『こつちも終わったわ。旗艦の装甲空母姫は撃破、私たちは先に帰還するわよ。』

「了解。ジェイクオースを使ったから、少し疲れたよ。」

響の必殺技―ジエイクオースは、膨大なエネルギーを消費する。

霊力を使い過ぎた場合は空腹という形で現れるが、ジエイクオースの場合は強い疲労となつて現れるのだ。

『なら、後処理は副艦に任せておきなさい。そのための役職でしょ』

「そうさせてもらうよ。じゃあ、通信切るよ。」

満潮からの通信を切り、響は一息入れる。

そして、右腕にある紫色の宝石―Jジュエルをそつ、と撫でる。

「あの人たちは、今頃何処に居るのかな……」

響の眩きは、降下してきたタケミカズチのエンジン音でかき消されてしまった。

第4話（後編）

Another Side

駆逐艦、響が率いる第77戦隊が軽巡洋艦、那珂率いる護衛艦隊の援護に入る少し前。高速射出甲板空母タケミカズチから出撃した第1艦隊は、久野島から10海里程度離れた海域で敵の侵略部隊の主力と戦闘していた。

「チヨコマカト……」

侵略部隊のリーダー、装甲空母姫は目の前の光景を忌々しそうに見つめる。

敵は駆逐艦のみ。対して、自分たちは、深海棲艦の上位個体である姫級の装甲空母姫に加え、戦艦級と空母級——しかも、その flagship 個体。

普通なら容易く勝てるような相手だが、戦闘はかなり長引いていた。

海上を縦横無尽に駆け回る駆逐艦に至近弾すら与えられない戦艦。

空を舞う艦上戦闘機と強力なビームによって、艦載機を大幅に減らされた正規空母。

圧倒的な戦力を誇る深海棲艦は、格下の相手に手玉に取られていた。

「忌々しい艦娘共メ……！！」

そう毒づきながら、装甲空母姫は艦載機を発艦させるのだった。

一方、回避行動に専念していた満潮を率いる第1艦隊に動きがあった。

戦闘海域から離れた地点で偵察機の制御に専念していた大鳳から通信が入ったのだ。

『こちら大鳳。近海の偵察が完了したわ。敵の増援は発見できず。』

「そう。なら、大丈夫ね。」

回避に専念していた満潮が足を止めて、第1艦隊全員に告げる。

「全員、全力を以って敵艦隊を撃滅しなさい。」

満潮の命令は通信で第1艦隊全員に伝えられる。

その命令を聞いた艦娘たちは、逃げ回っていたのが嘘のように敵艦隊へと突撃。

同時に全員が、大河長官より授かったGウエポンを展開する。

「朝潮、突撃します !!」

黒い長髪を靡かせながら、幼い艦娘が先陣を切る。

彼女の名前は、朝潮。朝潮型駆逐艦の1番艦であり、満潮の姉である。

「ウイルナイフ !!」

右手に装着していた竜の頭部を模したパーツが変形し、緑色のナイフが展開される。

「肉薄する !!」

ウイルナイフの刃が届く距離まで接近した朝潮は、敵に向かって真っ直ぐ振り下ろす。

何の変哲もないナイフなら戦艦の装甲に弾かれて終わるのだが、彼女の持つウィルナイフは戦艦の装甲を易々と切り裂いた。

G ウェポンの中でも切断力に優れるのが朝潮のウィルナイフであり、使う者（この場合は朝潮）の意志によって、切断力が変わる。

その切断力は、戦艦クラスの装甲を容易く切り裂くことができる程。

「はっ !!」

そして、そのままナイフを突き刺す朝潮。

貫かれた身体からはどす黒い体液が流れ落ち、やがて戦艦ル級flagshipは膝を付く。

やがて力尽きた戦艦は海の底へと沈んでいった。

「まずは1隻。まだまだ敵は一杯居るわね。」

「朝潮姉、前に出すぎよ〜。」

「荒潮……満潮の護衛はどうしたの？」

「大丈夫よ。ちゃんと満潮姉から許可は貰ってるから。」

それに……満潮姉には、ちゃんと別の護衛も付いてるから大丈夫よ。」

妹にそう言われ、旗艦の方に目を向けると、真つ赤な瞳の艦娘と大鳳、そして、翼竜を模したメカが護衛に付いていた。

「護衛にしては、とんでもないくらいの過剰戦力ね。」

「でしょ？ だから、満潮姉のことは心配しなくても大丈夫よ。——おっと」

姉妹の会話を遮るように降って来た砲弾を避ける荒潮。

その後もflagship個体の戦艦夕級から高火力の砲弾があられのように降り注ぐ。

「邪魔ね。ボルテイングドライバー。」

荒潮は、左腕に装着したGウエポンの先端を降り注ぐ砲弾に向ける。
すると、2人に直撃、良くても至近弾になる筈だった砲弾が空中で静止し、次々と海の中へと沈んでいく。

「ふふふ♪ そう簡単にやらせはしないわよ〜？」

荒潮のGウエポンは、ボルテイングドライバー。

弾丸のような形状のアタツチメントを付け替えることによって、様々な状況に対応することができる万能ツールであるが、その反面、火力が低い。

敵の砲弾が失速したのは、ボルテイングドライバーの機能の1つ——空間湾曲を利用して、数cmの距離を何十倍にも広げ、運動エネルギーを消耗させたからだ。

『2人とも、その場から動かないでください！！』

大鳳からの通信が入った刹那、朝潮と荒潮の間をピンク色のレーザーが通りすぎる。

遠方から放たれたレーザーは的確に戦艦夕級flagshipを撃ち抜いた。

「大鳳さんのGウエポン、反中間子砲ですね。」

「相変わらず反則級の威力ね。あの距離から一撃なんて。」

「その代わりに、かなり細かい計算が必要になるそうよ。それに、威力だけなら満潮のレ//の方が高いわよ。」

「反動が大きいのが欠点だけどね。」

『その2人、まだ敵は残ってるわよ。ボサツとしない !! 』

旗艦に怒られ、2人は会話を止め、残りの深海棲艦を駆逐に動きだすのだった。



（残りは空母が2隻と戦艦が1隻……これなら大丈夫そうね。）

戦況を見守っていた満潮は、心の中で呟いた。

残りの深海棲艦は、満潮の姉妹や僚艦が抑え込んでおり、自由に動けるのは敵旗艦の装甲空母姫だけだ。

「大潮、頼める？」

「はいはい。」

機械仕掛けの翼竜―ガジェットフエザーに跨る艦娘に声を掛ける満潮。

薄い青色の髪をツーサイドアップにした彼女は、朝潮型駆逐艦の2番艦であり、満潮の姉に当たる。名前は大潮。

また、彼女が駆る翼竜も歴としたGウエポンである。

高速・高機動力を誇るガジェットフエザーは、戦場で素早く人員や物資を輸送するのに最適な兵器である。また、複数の武装を保有しており、戦闘もこなせる。

「満潮、しっかり掴まってね。」

「ええ。」

満潮はガジェットフエザーに飛び乗り、大潮の肩をしつかり掴む。

2人の姉妹を乗せた機械仕掛けの翼竜は、敵の艦載機が飛び交う空へと飛翔する。

「第六〇一航空隊、発艦始め !!」

飛翔したガジェットフエザーを援護するため、大鳳も艦載機を放つ。

「この調子だと、夕立の出番はないっぽい？」

護衛艦隊の白露や春雨たちと同じ黒を基調にした制服を身に纏い、白いマフラーを巻いた赤目の艦娘——夕立は暢気にそう呟いた。

戦況は圧倒的にGGG側の方が優勢で、この状況を逆転させるのは難しいだろう。

「そうですね。参加してきても構いませんよ？」

「うーん……今日は止めとくっぽい。」

「そうですか。そういうえば、夕立ちちゃんの相方はどうしたんですか？」

「春雨は護衛艦隊の方。人手が足りないから招集されたっぽい。」

「ああ、それで姿が見えなかったんですね。」

大鳳は夕立とそんな他愛のない会話を交わしながら、戦況を見守るのだった。



「大潮！！来たわよ！！」

「一杯ですね。でも、それくらいの戦力じゃあ落とさせませんよ！！」

装甲空母姫と敵空母の艦載機群が大潮と満潮を待ちうける。

大鳳航空隊が航空戦を開始し、敵の艦上戦闘機を次々と撃ち落とすとしていく。

「連装メーザー砲、発射 !!」

ガジェットフエザーの両翼に取り付けられたメーザー砲が火を噴き、敵艦載機を撃ち落とす。しかし、それでも空母3隻分の艦載機を落とすことはできない。

「ジェネシックアーマー全開 !! 突撃しますよ !!」

ガジェットフエザー全体を特殊なエネルギーが覆い、機体と搭乗者を保護する。攻勢防御バリアを張り巡らせた機体は突進するだけで近づいた敵にダメージを与える。

長時間維持することはできないが、敵艦載機の網を抜けて満潮を装甲空母姫の許に届けるには十分な時間だ。

「あんまり無理しないでよ !!」

「分かってるわよ !!」

満潮は翼竜から飛び降りて、装甲空母姫と相對する。

装甲空母姫も戦艦と同程度の装甲を保有しており、駆逐艦の砲撃で装甲を撃ち抜くのは難しい。が、満潮はそれが些細な問題であるかのように立っている。

「駆逐艦風情ガ……タツタ一隻テ敵ウトデモ思ツテイルノカ。」

「ええ、思ってるわ。」

「ソノ驕り、スグニ後悔サセテヤロウ。」

「それは無理よ。だって、アンタは此処で沈む運命にあるんだから。」

「ホザケ !!」

満潮の態度に激昂した装甲空母姫が砲撃を放つ。が、それを満潮は容易く避ける。

「ガジェットツール !!」

満潮の二の腕と首元に装着された合計3つのパーツが分離、再構成される。
再構成されたパーツは、爪のようなナックルガードとなつて満潮に装着される。

「ヘル ! アンド ! ヘブン !」

満潮の持つ一霊水晶へセフィラとGストーンの働きが極限まで高められ、放出されたGパワーと霊子力が両手に集まる。

「ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……はあッ !!」

両手を組み合わせると、霊子力とGパワーの共鳴現象によつて、膨大なエネルギーが生み出される。さらに、EMトルネード（電磁竜巻）が装甲空母姫を拘束する。

「おおおおおつ
!!!」

海面を走り、一直線に装甲空母姫へ突進する。
そして、その拳はちように胸の辺りに突き刺さる。

「ガハツ !!」

「はああああつ !! ふんつ !!」

装甲空母姫の体内から黒い球体が抉りだされる。

それを抉り取られた敵の旗艦は、全身から力が抜けて、海底へと沈んでいった。

「はあ……はあ……はあ……うっ!!」

満潮の身体が浮力を失ってしまい、沈んでいく。

だが、間一髪、ガジェットフエザーに跨った大潮が満潮を引き上げる。

「ふう……危ない所でした。」

「ありがとう、助かったわ。」

「間に合ってよかったよ。あつ、敵は撃滅したから安心していいよ。」

「そう……じゃあ、こっちの戦闘は終了ね。」

「向こうは大丈夫かな？」

「大丈夫の筈よ。確かに新入りは居るけど、熟練の艦娘が大勢居るんだから。」

『状況終了。久野島防衛に成功したよ。』

大潮が心配していると、ちょうど戦闘を終えた響から通信が入る。

「こっちも終わったわ。首謀者の装甲空母姫は撃破、私たちは帰還するわよ。」

『了解。ジエイクオースを使ったから、少し疲れたよ。』

「なら、後処理は他の奴に任せて、ウカノミタマに回収してもらいなさい。」

高速射出甲板空母タケミカズチと一緒に運用されることが多い全域装甲補修艦ウカノミタマは戦闘を終えた艦娘への補給、艦装の整備を担当する。

ウカノミタマで整備を終えた艦装は、タケミカズチに移送されて、次の出撃に備えるのだ。

『そうさせてもらうよ。じゃあ、通信切るよ。』

「さすがに疲れたわ。ごめん、大潮。後始末は任せるわ。」

「オツケー。後のことはお姉ちゃんに任せて、満潮はゆっくり休んでてよ。」

満潮は大潮に笑みを浮かべた後、黒い球体を渡して、眠りに付いた。

——GGGベイタワー基地——

「大潮ちゃんから通信です !! 久野島防衛に成功、輸送船への被害もないそうです。」

防衛作戦成功の報告は、すぐにメインオーダールームに伝えられた。

「満潮くんのバイタルは？」

「ヘル・アンド・ヘブンの影響で昏睡状態です。命に別状はありませんが……」

「そうか……卯都木くん、メンテナンスルームに連絡を。」

「はい！！」

「何事もなく終わってよかった。」

「長官。ボルフオッグたちが持ち帰ったデータの中に気になる物を見つけました。」

メインスクリーンに映します。」

そうやって、手元の端末を操作する猿頭寺オペレーター。

メインオーダールームのメインスクリーンに電子化された計画書が大きく映し出される。

その計画書の題名にその場に居る面々が息を呑んだ。

そこには、大きな字で『人造艦娘製造計画及びハイブリット個体製造計画の詳細報告書』と書かれていた

第5話

Another Side

——メインオーダールーム——

「ふむ……人造艦娘製造計画か。良くない計画のように感じるな。」

「そのようですね。少し目を通しましたが、人道的とは言えません。」

「本当に、正気の沙汰とは思えない計画よ。」

刹那、メインオーダールームの扉が開いて、1人の少女が入って来た。

ピンク色の長い髪を膝の辺りまで伸ばし、黄土色のコートを身に纏った少女。露出している肌は、アルビノのように真っ白でその瞳は金色に輝いている。

一見、部外者に思えるが、誰もその少女の立ち入りを注意しない。

「ソールくん。どういうことか説明して貰えるか？」

「ええ、分かってるわ。」

そうやって、ソールと呼ばれた少女はメインスクリーンを操作する。すると、計画を分かりやすく纏めたスライドが映し出される。

「人造艦娘製造計画は、普通の人間に艦娘の中枢、セフィラ霊水晶を埋め込むことで艦娘を人工的に作り出す計画よ。」

「そんなこと、可能なの？」

命の率直な質問に対して、ソールは首を横に振る。

「艦娘と人間の違いは、霊力を通す回路があるかどうか。」

それは後天的に作り上げることができないモノ。無理に作れば……」

「肉体に影響が出る、ということか……」

大河長官の言葉にソールは首を縦に振る。

「無い物を無理矢理作ってる訳だから、成功率はかなり低いでしょうね。」

シミュレーションしてみたけど、成功率は10%以下と言ったところ。」

「そんなことが裏で行われてるなんて……」

「しかも、対象は戦災孤児。深海棲艦の襲撃によって、孤児の数は鰻登り。」

この馬鹿げた計画を考え付いた奴から見れば、大層都合な状況だろうね。」

ソールは怒りを孕んだ口調で呟く。

現在、日本本土には離島に暮らしていた住民や他の国から合法非合法な手段で入って来た人々が集まってきている。

その中には、深海棲艦の襲撃によって親を失った孤児が大勢含まれている。

大量に流入した孤児を攫っても、よほどのことがない限り、表沙汰になることはないだろう。

「だが、成功率の低い計画を実行して、何のメリットがあるんだ？」

「おそらくは未完成艦の艦娘、もしくは護衛艦の艦娘を生み出そうしているんでしょ。」

「聞きたかったんじやが、どうして艦娘は第2次世界大戦期の艦船に限定されるんじや？」

艦娘について、右に出る者は居ない程の知識を有するソールに雷牙博士が尋ねる。

現在、出現が確認されている艦娘は全て第2次世界大戦期の艦船を前世に持つ。

日本以外にもいくつかの国で艦娘が出現しているが、やはり第2次世界大戦期のモノのみ。

各地で完成に至らなかった艦船を前世に持つ艦娘やハーブーンなどの近代兵器を操ることが出来る護衛艦の艦娘を生み出すための研究が続けられているが、成果はまったく挙がっていないのが現状である。

「艦娘に付き従う艤装妖精が生まれないから。艤装妖精が居なければ、艤装の操作がとんでもなく大変になる。」

「あれはオートでやってる訳じゃないのか？」

「そうよ。艤装妖精が艦娘の意志をくみ取って、弾薬を装填したり、射角を合わせたりしてくれてるから、艦娘は特に何もしなくてもいい。」

「じゃが、逆にいえば、マニュアル操縦ができれば……」

「現実的じゃない。駆逐艦ですら、数百人という人数でやっと運用できるのに、その仕事を人間1人の頭で出来る訳がない。——というか、人を守るために生まれた艦娘を人を犠牲に生み出すなんて間違ってる。」

「ふむ……そう言われてみればそうじゃのう。」

「ううんっ !! そろそろ話しを戻そうか。GGGとしては、このような非人道的な計画は認められない。よって、GGGの目的は、計画に参与する施設の破壊、被検体の救助。」

異議がある者は ? 」

方針の述べ、周囲の反応をうかがう大河長官。

しかし、この場にはその方針に異議を唱えるような人物は居なかった。

その反応をある程度予想していたのか、大河長官は誇らしげに小さく笑った

「猿頭寺くん、研究所の場所は ? 」

「さすがにそこまでの情報は掴めませんでした。」

「そうか。すまないが、諜報部隊を動かして研究所の座標を特定してくれ。」

「了解しました。」

「残る問題は研究所の場所だな。山間部にあると、タケミカズチは不向きだ。」

凱の指摘は尤もだった。

GGGは、保有している技術力が争いの火種になることを恐れて、密かに行動している。

高速射出甲板空母タケミカズチや全域装甲補修艦ウカノミタマには、隠密行動用の熱光学迷彩が搭載されているが、その巨体のため、着陸する場所を選ぶ。そのため、着陸スペースが少ない場所に研究所があると、被験者の回収が困難なのだ。

「それなら問題 nothing !! もうすぐ、"Gライナー" が完成するからのう。

——という訳で、夕張を借りたいんじやが……」

「構いませんよ。長月も居ますから。」

猿頭寺の管轄である諜報部は諜報ロボット、ボルフオッグと複数名の艦娘が在籍している。

潜入が得意な川内、コンピューターに強い夕張の2名もその一員であり、先ほど猿頭

寺から名前が出た長月という艦娘も諜報部の一員であり、夕張に次いでコンピューターに強い。

「じゃあ、こつちも受け入れの準備しておくわ。」

それだけ言い残して、ソールはメインオーダールームから出て行った。

「こちらもすぐに行動ができるように準備しておこう。」

雷牙博士。 “Gライナー” の完成を急いでくれ。」

「任せんしやい。バッチリ仕上げておくからのう。」

「長官、タケミカズチ及びウカノミタマが帰還しました。」

「満潮くんの容態は？」

「命に別条はありませんが、意識は戻っていないそうです。」

今はメンテナンスルームで治療中です。」

「そうか……艦隊の被害は？」

「全員、無傷です。護衛に出ていた艦隊にも特に負傷した艦娘は居ないそうです。」

「うむ。帰還した艦娘たちには、休むように伝えておいてくれ。」

「了解しました。」

満潮 Side

「んっ、ここは……ああ、メンテナンスルームか。」

目が覚めると、よく知っている光景が広がっていた。

ここは、純粹な艦娘でなくなった私専用に拵えられたメンテナンスルームだ。

艦娘とGストーンサイボーグの融合体とも言える私は、此処でないと治療ができない。

「おっ、気が付いたかい？」

「私、どれくらい眠ってた？」

「基地に戻って、おおよそ5時間ぐらいじゃな。」

「相変わらず、馬鹿にならない反動ね。もう少し短くならないものかしら。」

「無茶を言うでない。あのソルダートJですら、戦闘後は丸一日眠っていたんじや。5時間で済むなら、十分短い方じや。」

「言ってみただけよ。」

私や凱が持つGストーンと響が持つJジュエルは、一定条件で共鳴現象を引き起セフイラす。霊水晶とGストーンの共鳴現象も同じ現象と考えられているけど、この2つの共鳴現象は、強大なパワーと引き替えに使用者に大きな負荷を掛ける。

私が意識を失ったのも、この共鳴現象の反動が原因。普通の戦闘なら問題ないくらいの反動だけど、ヘル・アンド・ヘブンを使うと必ず意識を失ってしまう。

「そういえば、敵のコアは？」

「大潮からきちんと受け取ったわい。これで深海棲艦の研究が進むよ。」

「そつ。なら、私も頑張った甲斐があるわ。その代わり、私はしばらく出撃できないけど。」

ヘル・アンド・ヘブンの代償は、肉体的・精神的な疲労だけでは留まらない。

私の身体にも大きな負担を掛ける。普通なら、高速修復材っていう特殊な液体であったという間に治るけど、生憎と私の身体は一部がサイボーグ化されてるせいでそれができない。

だから、ヘル・アンド・ヘブンを使った後は出撃をしばらく禁止される。

「変わったのう。以前は、無断出撃の常習犯だった癖に。」

「もう昔の話よ。」

私がGGGに拾われたのは、今から2年前。

初めの頃は、長官の命令を無視して、死に場所を求めるように四六時中、深海棲艦と戦ってた。だけど、ある時、敵に囲まれた上にもう戦えないくらいの大けがを負った。

その時は凱のおかげで助かったけど、その後、凱と命に思いつき怒られた。

「本当に変わったのう。此処に来た時は、そんな風に笑うこともなかったぞ。」

「私が変われたのは、凱と命のおかげよ。2人が居なかつたら、私は今頃……」

「おいおい、僕ちゃんへのお礼は無いのかい？」

「もちろん、博士にも感謝してるわよ？　博士のおかげで私はもう一度戦えるようになったんだから。」

「ホントかのう？」

「本当よ。」

「まっ、そういうことにしておこうかのう。」

僕ちゃんは、仕事があるからこれで失礼するでしょう。」

博士がメンテナンスルームから出て行くのを見送って、私はもう一度眠りについた。

第6話

雪風Side

↳ 艦娘寮 第77駆逐隊の部屋

久野島防衛戦の翌日。今日は第77駆逐隊全員揃って非番です。

出撃前に話していた通り、今日は第77駆逐隊全員で町に出ることになりました。

「よし、準備完了。潮、そっちは？」

「こつちも終わったよ。雪風ちゃんと初霜ちゃんは……やっぱりその服なんだね。」

潮さんがわたしたちの格好を見て、そう言いました。

響さんと潮さんは出撃時に着ていた戦闘着ではなく、普通の洋服です。

一方、わたしと初霜さんは戦闘着のまま。これ以外持っていないので着替えようがな

いんですよね。

「雪風、初霜。お金は持った？」

「持ちました!!」

「袋に入れてるだけなので、ちょっと不安ですけど……」

「まあ、町に着くまでの辛抱だよ。良いお店を知ってるから。」

「じゃあ、出発しましょうか。」

「はい。」

出発しようと、取っ手に手を掛けた瞬間、扉が勝手に開きました。

扉を開けたのは、満潮さんと同じ制服を着たこげ茶色の髪の女の子でした。

「あら、お出かけかしら〜」

「荒潮？　どうかしたのかい？　」

「満潮姉からGウエポンを渡すように言われたんだけど……後にした方がいいかしら〜
？」

「大丈夫だと思うよ？　そんなに時間も掛らないだろうし。」

——という訳で1番ゲートで待ってるから、早く来てね。」

そう言うと、響さんと潮さんは先に行ってしまった。

「じゃあ、ついて来てくれるかしら？　雪風に初霜。」

あつ、自己紹介が遅れたけど、私、荒潮よ〜。満潮の妹よ〜」

そう言う訳で町に出かける前にGウエポンを受け取るようになりました。

・
・

・
・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

「此処よ」

荒潮さんに案内されたのは、基地内にある倉庫の1つでした。

G G G 技術開発部が管理する倉庫で、中にはG ウエポンの他にも試作段階の装備や使わなくなった装備がしまい込まれているそうです。

ただ、危険物もしまい込まれているので、関係者以外からは危険区画扱いされていると聞いたことがあります。

「ピツ、ポツ、パツ、と——開いたわよ」

「これが全部Gウエポンなんですか？」

扉の先にはいくつものロッカーが並んでいて、その中には大きな盾や砲身が複数ある銃などいろいろんな武器が1つ1つ収められています。

「そうよ。じゃあ、この中から1つ選んでちょうだいね。」

そうやって、荒潮さんは手近にあった椅子に座ると読書を始めました。

さて、響さんと潮さんをそんなに待たせる訳にもいきませんし、さつさと選んでしましましょう。良いのがあればいいんですが……

「私はあっちの方を見てくるわ。」

「じゃあ、雪風はあっちの方を見てください。」

初霜さんは第1世代、わたしは第3世代と書かれた方に進みます。

Gウエポンと言っても、その成り立ちによって3種類に分類されます。

GGGのデータバンクにあった装備を艦娘用に調整した第1世代型。

第1世代型を複数組み合わせる1つのGウエポンにした第2世代型。

そして、第1世代型に用いられる技術を参考に作られた第3世代型。

まあ、分かりやすいように分類しているだけで性能差はないのですが。

「それにしても、いろいろありますね。」

所属している艦娘の数に対してGウエポンの数が多いですね。

その分、選択肢が増えてわたし的にはうれいのですが、ちよつと勿体ないような気もします。

「うーん……おっ」

第3世代型Gウエポンを見て回っていたわたしの目に留まったのは、銀色。

斧と槍が一体化したような外形——確か、ハルバートでしたか？——と穂先にはめ込まれた緑色の石。その全長はわたしの身長よりも長いです。

それが収められているロッカーには、こう書かれていました。

第3世代型Gウエポン　ガジェットシザーズ、と。

「そんなに重くないですね。」

実際に手に取ってみますが、それほど重くはないです。

説明書によれば、戦況に応じて形態を変えることができる武装で、ハルバートに見える今の形態が標準形態のプラズマシザーズ形態らしいです。

「うん。これにしましょう！！」

何となくですが、わたしにピッタリなような気がします。

「雪風さん、決まりましたか？」

「決まりました！！　初霜さんは……決まったみたいですね。」

合流した初霜さんは、大きな盾を持っていました。
赤で縁取りされた黒い盾で、その中心にはGウエポンの象徴であるGストーンがはめ込まれています。

「第1世代型Gウエポン、プロテクトシールドです。
これで雪風さんを今度こそ守りきって見せます。」

「初霜さんらしい武装ですね。」

さて、早く響さんと潮さんに合流しないと……

・
・
・

・
・
・
・

.....

——という訳で、後の手続きを荒潮さんに任せて、やってきましたアルトマーレ
!!

アルトマーレは夢幻島沿岸部に存在する唯一の商業区画で工業区画で生産された商品が売られています。ここで売られている商品が島の生活水準の低下を食い止めているそうです。

民間用の港もこの町の近くにあるので、ここで売られている商品が本土へ向けて輸出されることもあるそうです。残念ながら、変えるのは富裕層ぐらいだそうです。

「最初は財布だね。いくら治安が良いって言っても、危ないからね。」
「偶によそ者が混じってたりしますからね。」

響さんが案内してくれたのは、海沿いに出ている露店街でした。

「おじさん、久しぶり。」

「ん？ おお、響嬢ちゃんじゃねえか！！ 俺の商品を買いに来たのか？」

「用があるのはこっちだよ。昨日配属された新人なんだ。」

「ふむ。相変わらず、艦娘は可愛い子ばかりだな。」

「まったく、GGGで働いてる男が羨ましいぜ。俺も出会いが欲しいもんだ。」

「奥さんに言い付けるよ？」

「それだけは本当に勘弁してくれ。この前、半殺しにされたばかりなんだ。」

「——つと、漫才はこれぐらいにしようか。」

初霜、雪風。このおじさんの商品は、品質が良いからどれを選んででも損はないよ。」

「お値段も一律だ。手を抜いた商品は一つもないから、安心してくれや。」

うーん……いろんなサイフがありますね。

持ち運びしやすく、使いやすいモノが良いんですが……あつ、これにしましょう。

「おつ、お目が高いね。それは今日、完成したばかりの物なんだ。大切に扱ってくれよ？」

「わかりました。大切にします。」

「じゃあ、わたしはこれにします。」

初霜さんが選んだのは、黒くて薄い長財布です。

真ん中に白い錨のマークが刺繍されているのが特徴的です。

「ありがとよ。この後はどうするんだ？」

「アルトマーレの町を案内しながら買い物。いろいろ買う物があるからね。」

「無駄遣いして泣き付いてくるんじゃないやねえぞ？」

「昔の話を蒸し返さないでくれるかな！？」

「あはは……」

陽気なおじさんの冗談に響さんは顔を真っ赤にしながら叫びました。

潮さんは思い当たりがあるのか、苦笑いを浮かべてます。

「ほら、行くよ。」

響さんは顔を赤らめたまま、足早に露店を後にしました。

・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

サイフを買った後、響さんたちに案内されていていろんな物を買いました。

さすがにいろんな場所を連れ回されたせいで疲れました。

まあ、一番の原因は呉服店での一件のせいですが……

「なんだい？ こつちを睨んで。」

「心当たりはあるでしょう？」

「着せ替え人形にただけじゃないか。」

そうです。わたしが疲れている理由は、呉服店で着せ替え人形にされたことです。

正確な回数は数えていませんが、少なくとも10回は衣装チェンジしました。

「でも、可愛かったですよ？」

「初霜さんも潮さんも途中からノリノリでしたよね？」

目を逸らさないください。最初は止めようとしてくれてたのに……

まあ、選んでくれた服はどれも可愛かったのでいくつか購入しましたが。

「そういえば、響さん。ずっと気になってたんですが、あの像は？」

話題を切り替えるように初霜さんが公園に置いてある像を指差しました。

その見た目はとぐろを巻いた龍で、コウモリのような翼が付いているのが特徴です。

これと同じ像は商店街にもありましたが、何の意味があるんでしょうか？

「あれはこの島で信仰されてる龍神の像だよ。」

GGGが本格的に稼働する以前、深海棲艦から島を守り続けたらしいよ。」

「噂によれば、その体躯は宇宙に届くほどで国一つを侵略できる規模の深海棲艦を薙ぎ払ったとか。」

「まあ、要するに昔から島を守ってくれた神様を祀ってるだけだよ。」

「へえ〜」

「さて、そろそろ帰ろうか。」

「そうですね。」

こうして、わたしたちは買い物を終えて、基地に戻るのでした。

第7話

雪風 Side

初出撃から数日が経過しました。

久野島の防衛戦以降、夢幻諸島に深海棲艦が大規模侵攻してくることはなく、穏やかな日々が続いてしました。

あつ。でも、小規模な編隊と出くわすことはありましたよ？

おかげで、哨戒任務に手が抜けません。今も哨戒任務の真つ最中です……

「雪風さん !! ボーとしないでください !!」

「あつ、ごめんなさい !!」

危ない危ない……いくら、敵が駆逐級だけとはいえ、油断するのは良くないです。

駆逐艦の砲撃でも、直撃すれば大破しかねませんからね。

「てーっ !!」

「撃ちます !!」

12.7cm砲弾は、敵にヒットしましたが、直撃にはなりません。でも、それでいいのです。私たちの目的は、敵の注意を引くことなんですから。

「もう一回。てーっ !!」

今度は掠ることもなく避けられましたが、深海棲艦は突如爆発。

そのまま沈んでいってしまいました。1隻だけで来るからそうなるんです。

「ふう………戦闘終了ですね。」

「ええ。それにしても、その魚雷、便利ですね。」

「無理を言って、回して貰った甲斐がありましたよ。」

背中に背負った四連装魚雷に装填されているのは、61cm酸素魚雷ではありません。先日、開発された61cm零式自動追尾酸素魚雷。半径100m内の敵の靈力を探知して、自動的に追尾してくれる画期的な魚雷です。

ついさつき、深海棲艦を倒したのもこの魚雷による雷撃です。

「それよりも初霜さん。電探の方はどうですか？」

「周囲に感なし。警戒線に入ってきたのは、あの1隻だけみたいね。」

初出撃からわたしたちの装備もいくつか更新されました。わたしの場合は、搭載している魚雷が強化されましたが、初霜さんは索敵方面が強化されました。

22号水上電探G型。22号電探をGGGの技術者と妖精さんが改造したレーダーで、初霜さんに支給された新しい装備になります。

外見は同じですが、その性能は比べ物になりません。それに、使いやすいです。

「あつ、ちよつと待つて。10時の方向に感あり、数は1つ。」

「距離は？」

「えつと……ここから25kmね。ゆっくり近づいてきてるけど、敵かしら？」

「うーん……何とも言えないですね。確認しに行きましょうか。」

「そうですね。一応、響さんに連絡をいれておきますね。」

「お願いします。」

響さんと潮さんは、基地を挟んだ島の反対側を哨戒しています。

ベイタワー基地がある夢幻島は、深海棲艦の勢力圏のすぐ近くにあるので、響さんと潮さんが哨戒している場所の方が深海棲艦の侵入が多いです。

私たちでは、まだ練度不足なので敵の侵入が少ない方の哨戒を任されています。

「雪風さん。響さんが確認してきて欲しいって。」

「分かりました。先導、お願いします。」

22号水上電探G型は高性能なのですが、まだ量産が進んでいません。そのため、第77駆逐隊でこの電探を持つるのは初霜さんだけ。だから、索敵は初霜さん任せになっています。

「方位、速度変わらず。もうすぐ接触するわ。」

「うーん、それっぽいのは見えませんが……」

双眼鏡で覗いてみても見えるのは穏やかな海だけ。

木片とかは漂っていますが、電探に引っ掛かるようなモノは見受けられません。木片に何か引っ掛かってるような……

「—— つ!! 初霜さん、電探に引っ掛かったのは遭難者です!!」

「分かったわ !! 第5戦速 !!」

航行速度を巡航速度から30ノットに引き上げます。

それに伴って燃料の消費も増えますが、救助のための必要経費として大目に見て貰いましょう。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

「初霜さん !! 見つけました !!」

「艦娘……どうして、こんなにボロボロの状態で……」

丸太に掴まっていたのは、なんと艦娘さんでした。

ですが、身に纏っている艦装はボロボロで衣服もかなり焼けてしまっています。飛行甲板らしき艦装の残骸が見えるので空母の方だと思えますが……

「この様子だと、主機もやられてるみたいね。」

「急いで基地まで運びましょう !!」

「ええ。——つ!! 電探に感あり !! 数は5 !! 距離は10000 !!」

——つ!! なんてタイミングの悪い時に……。

今まで22号水上電探G型に反応がありませんでした。つまり、敵は自然発生した深海棲艦。艦種は分かりませんが、駆逐級5隻でも曳航しながら逃げるのは難しいし、動けない艦娘を守りながら戦うのも難しいです。

「初霜さん !! そつちから支えてください !!」

「分かったわ !!」

1人が曳航して、もう1人が敵に対処するのが理想なのですが、この体格差で1人で曳航するのは無理があります。かと言って、この傷付いた艦娘さんを置いていくことはできません !!

「きやつ !?」

「初霜さん !!」

敵の攻撃が早すぎます !! それに、あの水柱……もしかして、戦艦級が ? 私の子想が当たっているなら、本当に運がないです !!

「っ !! また……」

戦艦の砲撃がまるで雨のように降ってきます。

その内の一発が真っ直ぐわたしたちの方へと向かってきました。

「プロテクトシールド !!」

砲弾が炸裂する寸前、初霜さんが張ってくれた防御膜が守ってくれました。

防御に特化したGウエボン——へプロテクトシールド。

原理は知りませんが、戦艦級の砲撃も無力化する防御壁を作り出すそうです。但し、張れる範囲が狭いのと移動しながら使えないのが欠点です。

「助かりました、初霜さん。」

「守護が私の役目ですから。それより、どうします？」

初霜さんは防御膜を張りながら、尋ねてきました。

「プロテクトシールド」の防御膜はそう簡単に破れることはありませんが、このままだとわたしたちも動くことができません。

その間に周囲を囲まれたら、一環の終わりですし……賭けに出ますか。

「初霜さん、守りは任せます。雪風は敵の相手をしてきます。」

戦艦級深海棲艦が居る以上、至近弾一発で大破。

砲弾の雨を無傷でぐり抜ける自信はあんまりありませんが、何とかしましょう。

「刀身展開。」

わたしの音声に従って、Gウエポン<ガジェットシザーズ>が形を変えます。

プラズマと呼ばれる物質によって、刀身が形作られて、まるで死神が持っているような大鎌のような形状になりました。

元のハルバート形態よりも堅い装甲を切り裂くことができる形態です。

「気を付けてくださいいね。」

「了解です !!」

足に靈力を集中して……一気に駆け抜けます !!
攻撃がまだ初霜さんに集中してる間に近づきますよ !!

(見えた !!)

敵は、戦艦ル級1隻に重巡り級1隻、軽巡ホ級1隻、駆逐イ級の後期型が2隻。
ル級はelite个体ですが、他は通常の个体のようですね。
これならわたし1人でも何とかできそうです。

「狙いは、戦艦ル級 !!」 いっけえ !!」

背中の魚雷発射管を戦艦ル級に向けて、先制雷撃です !!
残つてた魚雷を全部使い切ったことになりましたが、これで少なくとも戦艦ル級は倒せるはず。初霜さんに向けて砲撃を行っていた戦艦ル級の足元に魚雷がたどり着くと同時に大爆発を引き起こしました。

「仕留められませんでしたか……」

煙が張れると、戦艦ル級は健在でした。ですが、両手の砲はボロボロで使えそうにありません。

「てえいつ !!」

一番近くに居た駆逐イ級に向かって、大鎌を振り下ろします。

黒い装甲をバターののように切り裂いた後、そのまま軽巡ホ級の方へ向かいます。

「これで2隻目 !!」

駆逐イ級と同じ要領で軽巡ホ級を撃沈。

残るは、重巡り級だけ。ちよつと離れた位置に居ますが、その距離はへガジェットシザーズの射程範囲の中ですよ !!

「それえ !!」

〈ガジェットシザーズ〉の刃はブーメランみたいに飛ばせるんです。

さすがに12.7cm連装砲より射程は短いですが、その反面、威力は戦艦級の火力にも匹敵します。まあ、当てるのが難しいのが一番の欠点ですが。

「あとは、大破したル級ですね。」

主砲を損傷した戦艦ル級は戦闘海域から離れようとしていました。

ですが、最初の雷撃の影響か、航行速度はかなり落ち込んでいるみたいです。

「形態変化、火砲。」

わたしの命令に従って、〈ガジェットシザーズ〉が大きく姿を変えます。

ハルバート、斧槍と呼ばれる形態から大きい口径を携えた一本の火砲へ。

「えっと……マガジンをセットして、ここをこうして……」

実を言うと、この形態を使うのは今日が初めてなんですよね。

一応、説明書には目を通しましたが、実際に使ってみると、すんなりセットできないんですね。——つと、これで準備OKです。

「当たってください !!」

引き金を引いて、戦艦ル級に向けて発砲します。

結果として戦艦ル級は撃沈できましたが、専用の砲弾を10発も使ってしまった。た。

うう……やっぱり狙撃の練習が必要です。



——GGGベータタワー基地——食堂——

「——つていうことがあったんですよ」

「それは災難だったね。」

自然発生した深海棲艦を撃滅した後、さしたる問題もなく、基地に帰投することができました。無駄撃ちしたせいで報告書の枚数が増えましたが……。

救助した艦娘は雷牙博士に預けて、今はお昼の時間です。

「それにしても、どうして空母の方があんなボロボロの状態で……」

「不思議ですよね。大きな海戦でもあったんでしょうか？」

「それなら良いんだけどね……」

「何か、含みのある言い方ですね。」

私がそう言うと、響さんがフォークを置きました。

「雪風や初霜は知らないかもしれないけど、GGGには3種類の艦娘が居る。

GGGの工廠で建造された艦娘、傷付いた所を救助された艦娘。

そして……人によって心に傷を負った艦娘。」

「心に傷を負った……？ どういうことですか？」

「そのままの意味だよ。そして、GGGには、そんな艦娘が何人も居る。私のように、ね。」

「響さん……こんなことを聞くのも失礼かもしれませんが、響さんはどうしてGGGに？」

「………あれは、今から10カ月程前のことだ。」

番外編 駆逐艦 響の過去

——私は元々GGGに所属していた訳じゃない。本土のとある鎮守府に所属していた。

——その鎮守府では、私以外にも姉妹艦の暁、雷、電も在籍していた。

——それから私は第6駆逐隊として、戦うことになったんだ。

——まあ、主な仕事は戦艦や空母を運用するための資材集めだったけどね。

——それでも、第6駆逐隊の4人で活動できるだけで私は嬉しかった。

——前世だと、4人一緒に居られた時間はとても短かったからね。

——まあ、その話は置いておこう。私の転換点は、今から数カ月前。

——いつものように資材を集めるため、司令官に言われた航路を航行してる時だった。

「今日は大量ね。司令官の言ってた通り、早く到着できたわ ♪」

燃料が大量に詰まったドラム缶を牽引する少女——暁型ネームシップ、暁は上機嫌だった。

彼女らの司令官に指定された航路を使うと、目的地に早く到着できた上、敵の襲撃に遭遇することもなかったからだ。

「でも、大丈夫なのかしら。この辺りって、敵の制海権でしょ？」

「司令官の話だと、航路そのものの安全は確保したみたいだよ。」

「きつと大丈夫なのです !! 危なくなったら、すぐに援軍を出すって言つてたのです !!」

わいわいと話しながら資源の調達を終えた第6駆逐隊は、それを送り届けるため、自分たちの鎮守府を目指して航行していた。

完全に制海権を奪い返していない海域なので、普通は警戒を強めるものだ。しかし、行き道で敵の艦隊と遭遇しなかったこと、彼女たちが敬愛している司令官の命令に一抔の疑いを持たなかったことが災いして、彼女たちは警戒を緩めていた。

さらに言えば、彼女らは電探を装備していなかったために気付かなかつた。

戦艦ル級を旗艦とする敵の編隊が近づいてきていることに……。

様々な不幸が重なりあつた結果、ある悲劇を引き起こした。

「きゃあつ !!」

「ば、爆撃つ !! 一体、何処から……」

「——っ !! みんな、敵の艦載機だ !!」

気が付いた時には遅かった。

4人の上空には、敵の艦載機が40機以上。それらがすでに爆弾を投下していた。すぐさま、ドラム缶を切り離して、回避運動に専念する第6駆逐隊。

そして、回避しながら響は鎮守府へ通信を繋げる。

「司令官 !! 緊急事態だっ !! 敵の艦隊と遭遇した。向こうには、空母が居る !!」

すぐに援軍を寄越してくれ !! そんなに長くは持ちこたえられない」

『ああ、おかげで助かったよ。』

「えっ……?」

通信の向こうから発せられた司令官の言葉に、救援を要請した響は言葉を失った。

『第6駆逐隊の諸君、感謝するよ。敵の主力を誘い出してくれたおかげで、難儀していた海域は容易く攻略することができた。替えの利く駆逐艦4隻で高難度海域を解放。これで私の昇進も一歩近づいた。君たちのことは忘れないよ、今日だけだがね。』

続けて伝えられた言葉は暁たち全員に伝わっていた。

それ以降、通信は繋がらなくなり、通信機からはノイズが聞こえるだけだった。

——そう。私たちは敵の主力をおびき寄せる囿されたんだ。

——航路をわざわざ変えたのも、敵の主力に気付かれやすくなるため。

——優しかった司令官は幻想で、アイツも私のことを道具のように思ってたんだ。

「は、はは……そつかあ、捨てられたんだ……」

「そんな……そんなの嘘よッ !!」

「司令官……」

信じていた司令官に裏切られた響たちは、絶望に打ちひしがれる。

「しつかりしなさい、3人とも !!」

しかし、暁だけは絶望に打ちひしがれることはなく、敵を見据えていた。さらには失意のどん底に居る姉妹を叱咤し、正氣に戻す。

「絶望するのは後にしなさい !! こんな所で沈んで良いって言うの !?」

「姉さん……あんなことを言われて、どうして平然としていられるんだい !?」

「じゃあ、聞いわ。絶望したら、この状況を打破できるのかしら ?」

敵の艦載機を1機ずつ撃ち落としながら、暁は語る。

響たちには、普段は子供っぽく見える姉の姿が今回ばかりは一人前のレディのように見えた。

「今は生き延びることを考えなさい。沈んだら、何もできないんだから。」

そう言いながら、暁は対空射撃を続ける。

たった一人、それも水上戦闘重視の思想から設計された駆逐艦では、雀の涙に等しい。やがて、暁の目が敵の艦隊を捕捉した。

「戦艦に正規空母……これは逃げ切るのは無理ね。」

響、雷、電。私が囿になって、敵艦隊を引っかけ回すから、その間に逃げなさい。」

「なっ !? 正気なのですか !? 」

「そうよ !! あつという間にやられちゃうのがオチよ !! 」

「何もしなかったら、このまま全滅よ。アンタたちだけでも、生き残りなさい !! 」

一方的に告げると、暁は敵艦隊の中央へ突進する。

敵陣のど真ん中に突入した暁に敵の注意は集中し、響たちへの攻撃が途絶える。

「……響、電。行くわよ。」

「……」

雷に促されて、響と電は立ち上がる。

そして、敵の輪を乱している暁に一瞬だけ視線を向けた後、急いで戦闘海域を離れる。その胸に姉を置いて逃げる、という罪悪感を抱きながら……

——それから私たち3人は、宛てもない海をさまよい続けた。

——最初に別れたのは雷だった。艦装に異常が出て、速度が落ちてきたんだ。

——次は電。まだ、この世界に生まれた間もない私を生かすための囿になった。

——1人になった私は、たださ迷った。そして、生きるのを諦めた時、私は出会った。

——白亜の戦艦とそれを駆る2人の戦士に……。

「こんな海域を誰がウロウロしてるのかと思えば……」

「艦娘……いや、もはや抜け殻か。」

失意のどん底に居た響の前に現れたのは、全長100mを越える白い戦艦。

その巨体の上には、奇妙な格好の女性と男性が立っていた。

モデル体型の女性は「ルネ・カーティフ・獅子王」と言い、雷牙博士の实の娘である。

一方、男性の方は「ソルダートJ」と言い、異世界で生み出されたサイボーグだ。

「まるで人形だな。」

生氣のない瞳をしている響に向かって、ソルダートJは率直な感想を述べる。

しかし、姉妹を失い、信頼していた指導者に裏切られ、失意のどん底に沈んでいた彼女に反論するだけの気力は残っていなかった。

「言い返すことすらしないか。いや、もはや、意志すらない抜け殻か。」

「生き残ったのがコイツじゃあ、死んでいった姉妹も無駄死ね。」

ルネの言葉に虚ろな瞳の響が反応する。

「……取り消せ。」

響の脳裏に蘇るのは、暁たちと過ごした日々。

それは彼女にとって一番大切なモノであり、苦楽を共にした姉妹は宝物だ。宝物を穢されたという事実が響の心にもう一度、火を灯す。

「取り消せえ !!」

響は怒りのままに12.7cm連装砲の砲口をルネとJに向ける。

補給も受けていないため、燃料も弾薬も枯渇しようとしても関わらず、響は戦意を燃え上がらせる。

「暁たちの死は絶対に無駄死なんかじゃない !! 私に命をくれたんだ !!」

「ふう〜ん……じゃあ、何で貰った命を放棄しようとしてるわけ？」

「アンタの姉妹を殺したのは、深海棲艦。追いやったのはアンタの司令官。復讐してやろうとは思わないわけ？」

「そうしたいけど、それはできない。私は艦娘、深海棲艦と戦うのが役目だ。激情に駆られて人を襲えば、それは深海棲艦と同じになってしまう。」

響の解答にソルダートJ、ルネは小さく笑う。

「ついてこい。戦士として生き、戦士として死にたいのなら。」

「アンタを案内してあげるよ。戦士の戦場へ。」



「そして、私はGGGに案内されて、今に至る訳だよ。」

「あ、あの……響さん。その、姉妹たちは……」

「沈んだ、だろうね。あの後、別れた地点の周辺海域を探しても見つからなかったし。」

「……………」

「ああ、もう乗り越えてるから大丈夫だよ。うじうじしてるのは、姉妹が望んでないだろうからね。」

そう言って、昔話を切りあげる響。

その白いに近い銀色の髪の毛の隙間からは白いイヤークラスが顔を覗かせていた。第6駆逐隊の象徴であるローマ数字の「Ⅲ」を象ったアクセサリーは今もなお、彼女と一緒にあった。



——旧三重連太陽系宙域——

かつて、三重連太陽系と呼ばれる太陽系が存在していた宙域。

今となつては暗い宇宙が広がっているだけだが、その真つ暗な宇宙を一隻の宇宙船が航行していた。そして、その宙域には、クリアグリーンの結晶体がいくつも漂っていた。

「やっぱり、もう何も残ってないね。」

「ソールー遊星主が消滅し、パスキューマシンによつて復元された地球もない。残つてるのは、機械昇華を免れたGクリスタルだけだ。」

「まあ、そのGクリスタルもバラバラだけどな。」

宇宙空間に漂うクリアグリーンの結晶体は、Gクリスタルの破片である。

満潮の強大な力を与えているGストーンの原石であり、*“ジェネシックオーラ”*と呼ばれる特殊なエネルギーを内包しているのが特徴だ。

元々はもつと大きな塊だったのだが、とある戦いの最中、破壊されてしまい、今となつてはその破片が漂っているだけ。もつとも、その破片でも十分な力を持っているのだが。

『ルネ、J。こつちは準備できたわよ。』

「OK。じゃあ、さっさと回収してベイタワー基地に帰投するわよ。」

「アンタも久しぶりに姉妹に会いたいでしょ？」

『……そうね。』

通信が切れると、白亜の戦艦から戦闘機のようなモノが飛び立ち、Gクリスタルの破

片が漂っている宙域に向かう。

「それにしても、妖精って奴は凄いな。まさか、ファントムガオーを複製するなんて。」

そう言いながら、桃色の髪を持つ女性―ルネ・カーデイフ・獅子王は肩に腰掛ける妖精の頭を突く。

「白の星は、あのパスキューマシンを作り上げた星だ。その末裔となれば、複製など容易いことだろう。」

「かつてアタシたちを苦しめたモノを作り出した奴に助けられるなんて、奇妙なモノだね。」

「ふっ、そうだな。」

そんな会話を交わしていると、Gクリスタルの破片の回収を終えた戦闘機――ファントムガオーが戦艦の甲板部分に着陸する。

「E S ミサイル発射 !!」

白亜の戦艦から数本のミサイルが放たれ、宇宙空間にE S ウィンドウと呼ばれるエスケープ空間への入り口が出現する。

そして、白い戦艦がその入り口を潜ると、旧三重連太陽系宙域は元の真つ暗な宇宙空間へと戻った。

第9話

—鎮守府。

それは深海棲艦に対抗するため、各地に建てられた軍事施設である。

そこを拠点として、艦娘は提督の指揮の下、深海棲艦と戦っている。

鎮守府の上には、大本営という組織が存在しており、その機関が鎮守府を取りまとめているのだ。

本土にある鎮守府の1つ、第5鎮守府。

そこは四方の内、三方向を山に囲まれている天然の要塞とも言える場所に建設された鎮守府であり、人格者として知られる提督が担当している。

また、民間人と艦娘の関係を重視する傾向にあるせいも、民間人との衝突もなく、平和なのが特徴と言える。

そんな第5鎮守府の一角では……

「ああもう !! アンタたちはどうしてこんな無茶な使い方するのよ !!」

紫っぽい髪を一本に纏めた少女が怒声を浴びせていた。

怒声を浴びせる対象は、目の前で正座している活発そうな少女と無表情な少女。

「不知火が悪いのよ !! 私が大事に取っておいたシュークリームを……」

「いえ、悪いのは陽炎です。大事なモノなら、さっさと食べてしまえばいいです。」

「だからって、人の物を食べるのは常識外れでしょうが !!」

「あれは陽炎に落ち度があります。名前を明記しておかなかったのですから。」

「ふんっ !!」

言い争う2人——陽炎と不知火——に向かって振り下ろされる拳骨。

鐘を突くような音が聞こえてきそうな一撃を受けた2人は、その痛みにも悶える。

「たくっ……怒ってるのもバカらしくなったわ。

長官に配置替えしてもらおうか……」

「それは止めて欲しいわね。この2人を私1人で面倒見ないといけないじゃない。」

第5鎮守府の一角に集まっていた3人組に新しく2人の少女が合流する。

1人は灰色の髪を片側で一本に結った勝気な目つきの少女。もう1人は黒いセミロングの髪で物静か印象を抱かせる少女だ。

「ああ、帰ってきてたのね。霞、霞」

「ええ。お説教はもう終わり？」

「怒る気も失せたわ。」

そう言って、ポニーテールの少女はため息を吐く。

「曙……疲れてる……？」

「そこに居るバカ2人のせいで仕事が増えたからね。」

テントの中から道具箱を引っ張り出して、陽炎と不知火の艀装を開ける曙。

本来なら、艀装の整備は専門の妖精や整備員が行うのだが、彼女ら——GGG諜報部隊には艀装のメンテナンス程度で夢幻島にあるベイタワー基地に戻っている余裕はない。

そこでGGG諜報部隊員の艀装メンテナンスを担当するのが綾波型駆逐艦の3番艦、曙である。彼女は、GGGの整備員や妖精から手解きを受けて、艀装のメンテナンスからGウエポンの整備までこなすことができる。

「ボルフオッグも悪いわね。ちょっと後回しにさせてもらおうよ。」

『構いません。今回の案件、主だって動くのは貴方たちですから。』

「それなのに、今回みたいな騒動を起こしたバカ2人がそこに居るのよね……」

「手伝う。」

「ありがと、霞。そつちのスパナ取って。」

「ん。」

「それにしても、何も情報が入ってこないわね。」

霞は鎮守府近くの街で買って来た飲み物に口を付けながら、そう言った。

鎮守府統括組織——大本営が秘密裏に行っている非人道的プロジェクト。

その情報を掴んでから2週間程度経っているが、一向に研究所の所在を突き止めることが出来ず、困り果てていた。ベイタワー基地の方でも突入準備は整いつつあるのだが、研究所の所在が分からない限り、どうすることもできない。

「川内さんと長月の2人から報告もないから、あっちも上手くいってないみたいね。」

「研究所と、鎮守府の間に……連絡があれば一発。」

「その機会が中々巡ってこないから困ってるのよ。」

「まあ、待つしかないわね。——という訳で、ちよつと街に降りてくるわ。」

痛みから復活した陽炎が言う。

「行くならついでに長月も探してきなさい。」

「はいはい。不知火も行く？」

「いえ、不知火は夕食の準備に取り掛かります。」

「そっか。今日は不知火が当番だったわね。」

本来、艦娘にとって人間と同じ食事は嗜好品になる。基本的には燃料があれば、空腹は解消でき、弾薬があれば深海棲艦と戦うことができる。

しかし、人間と艦娘の格差を広げることが良しとしない長官の方針でGGGでは艦娘も人間と同じように食事を摂る。その習慣は、基地の外に出ても変わらず、GGG諜報部隊では食事当番を決めて毎日、食べているのだ。

閑話休題

「じゃあ、行ってくる——つて、あら？」

街へ降りようとした陽炎の視界に複数の人影が映る。

1人は、緑色の長髪に黒い制服を着た少女——GGG諜報部隊の一員、睦月型駆逐艦長月。もう1人は白い装束に身を包み、腰に軍刀を携えた長身の男性だ。

その背後には、黒いフードで口元以外を隠した2人組が居る。

「住吉提督じゃない。どうしたの？」

「君の所の迷子を連れて来たのと……」

「ちよつと待て !! わたしは別に迷ってなどいない !!」

「ああ、帰りが遅いと思つたら迷子になつてたのね。」

「待て、陽炎 !! わたしは本当に迷子になつてなどつ !!」

「はいはい。それでもう1つの要件つて ?」

同僚の言い訳を無視して、陽炎が提督に話の続きを促す。

彼、住吉 神功は第5鎮守府の提督を務めている。そして、彼は満潮の前提督だ。

その繋がりを利用して、GGGと第5鎮守府は裏で同盟を締結し、諜報部隊の活動拠点として場所を提供してもらう代わりに、新米艦娘の教導を引き受けたりしている。

しかし、表向きには部外者を装う必要があるため、接触する機会は最低限に抑えてい

る。この場所にこうやって提督が訪れるのは、珍しいことなのだが……

「実はこの2人を預けたい。2人とも、フードを取れ。」

「……はい。」

抑揚のない声で返事をする2人は、提督の指示に従ってフードを取り去る。

フードの下から出てきたのは、陽炎や不知火よりも幼い顔立ち。そして、栗色の髪と灰色の髪が露わになる。

「朝雲、姉さん……？？」

「それに、山雲じゃない。でも……」

2人に反応したのは、姉妹艦である霞と霰だった。

しかし、霞と霰の2人は姉の2人の様子に戸惑っていた。いや、彼女らの様子には諜報部隊の面々も同じような反応を示していた。

「……………」

無言で突っ立っている朝雲と山雲。

その瞳にはハイライトはなく、一切の活力が宿っていない人形のような瞳だった。明らかに異常な状態の2人を見て、陽炎は視線で続きを促す。

「この2人は、うちの子が街中の路地で見つけて保護したんだ。

所属を聞いても答えてくれないけど、僕の指示には従ってくれる。」

「……………それで？」

「これは僕の推測…………いや、限りなく正解に近い推測なんだけど、2人は所属していた鎮守府で提督の命令に従う人形に調整されたんだと思う。2人とも身体に夥しい数の傷痕があったからね。」

「その鎮守府の場所は？」

陽炎の短い質問には、明確な怒りの感情が籠められていた。

いや、彼女だけではなく、この場に居る艦娘たち全員が強い怒りを抱いている
冷静なのは、ボルフォッグぐらいだろう。

「分からない。この手の輩は巧妙に悪事を隠すからね。」

「……………分かった。引き受けるわ。GGGには、姉妹艦も大勢いるしね。」

「頼んだ。2人が所属していた鎮守府についてはこつちでも探ってみる。」

「くれぐれも無茶はしないように。満潮が悲しむよ？」

「ああ、分かった。」

そう言つて、住吉提督は自分の鎮守府へと戻つて行つた。

「さて、と。こうなると一度、ベイタワー基地に戻るしかないかな？」

『いえ。どうやら、その余裕はないようです。』

「どうということよ？」

『先ほど川内隊員から連絡がありました。研究所の座標の特定に成功した、と。』

ゴルフオッグを通じてもたらされた報告に全員が反応する。

「曙！！ 私と不知火の艦装は！？」

「戦闘なら問題ないわよ。」

「私と霰は此処で待機しているわ。姉2人を放置しておく訳にはいかないし。」

「OK！！ 不知火、先行するわよ！！」

「はい。」

陽炎と不知火は、曙が簡易メンテを行った艦装を背負い、黒と白のヘリコプターとバイクにそれぞれ乗る。

『川内隊員からの追加報告です。研究所から脱走した被験体が居るそうです。』

「じゃあ、取り合えずその子を保護するのが先ね。」

黒と白の大型バイク型マシン——ガンドールベルに跨った陽炎は、転送された座標を頼りにマシンを発進させる。そして、それに続くようにヘリコプター型のマシン——ガンブルーに乗り込んだ不知火も飛び立った。

『私たちも急ぎましょう。長月隊員、乗ってください。』

「ああ。」

同じように艤装を身に付けた長月が乗り込むと、ボルフオツグも2人を追い掛けるの
だった。

第10話

Another Side

——日本本土 某所——

「はあつ、はあつ、はあつ !!」

広葉樹林が生い茂る森の中。

人の手で整理されることもなく、草木が自由に茂る獣道を駆け抜ける1つの影があった。

もうすぐ日が暮れそうな時間帯に森の中を走るのは、十代前半の幼い少女だ。

そのくすんだ銀色の髪は汗で肌に張り付き、むき出しの足にはいくつもの切り傷ができています。

「きやつ……」

可愛らしい悲鳴と共に転んでしまう少女。

足元を見ると、地面から露出していた樹の根っこがあった。

「はあっ……はあっ……いたっ !!」

立ち上がろうとすると、少女の左足に痛みが奔る。

転んだ時に堅い地面に擦れてしまい、傷口から出血してしまっていた。

応急処置をしようと衣服の裾に手を掛けた時、後方から犬の鳴き声が微かに聞こえてきた。

「まだ、追ってくるのね……」

少女は小さく舌打ちすると、応急処置を中止。すぐに立ちあがって、再度走り始める。

「絶対に……逃げ切ってやるんだから !!」

そう呟きながら、少女は逃亡を続けるのだった。



「とんでもない山奥に研究所を作ってるわね……」

整備されていない山道を走りながら陽炎は呟いた。

周囲には、背の高い木々が鬱蒼と生い茂っており、人の手が入り込んでいないため、まともに走行できるのは獣たちが作った獣道ぐらいだ。

「不知火 !! そっちはどう !? 」

『見つけました。座標から考えて間違いないでしょう。』

「研究所の様子は ? 」

『慌てているようですね。こちらの存在にも気付かないくらいに。』

「——つて、ことは脱走者はまだ捕まっていないわね。」

そう呟いて、陽炎は一度バイクを止める。

太陽はすでに沈み始めており、東の空には月が昇っているのはつきり分かる。

鬱蒼と生い茂る木々のせいで、照明が無いと周囲の様子がはつきりと分からない。

「先に保護するのが先決ね。」

懐中電灯を取り出し、周囲を照らす陽炎。

(何かしらの手がかりとか無いかしらね……およ？)

陽炎が見つけたのは、一頭のドーベルマンの死体だった。

脳天から血を流していることから、頭に何かしらの攻撃を受けてやられてしまったのだろう。そして、その死体の近くには硬そうな木の枝が転がっていた。

「野生のドーベルマン……じゃないわね。首輪も付いてるし。」

———ということは、少なくともこの先に行ってる訳か。」

陽炎は、このドーベルマンが脱走者を追い掛けていたと決め付け、再びバイクを走らせる。

「不知火。研究所の方に変化は？」

『特にありません。陽炎の方は何か見つけましたか？』

「ええ。アンタはそのまま研究所を見張ってて。」

『了解しました。』

「さてと。ここは、これの出番かな？」

そう呟いて、陽炎が装着したのは大型のヘッドマウントディスプレイ。

「おっ、見える見える。あっちの方向に行ったのは間違いなさそうね。」

陽炎が使っている装置は、『霊力センサー』という物だ。

霊力を使用すると、残り香のようにその場に独特の波長が残される特徴がある。

『霊力センサー』はその波長を読みとることができる装置であり、GGG 諜報部しか保有していない。

「私が到着するまで捕まらないでよね？」

そう呟き、陽炎はバイクを発進させるのだった。

そして、陽炎が脱走した被験者を確保するために動いている頃。

ポルフオッグから研究所発見の報告を受けたGGGも行動を開始していた。

GGGベータワー基地メインオーダールームには、第8駆逐隊の面々が集められ、長官が現状の説明と今後の方針について話していた。

「君たち第8駆逐隊は諜報部隊と協力して、被験者の救助及び研究所の破壊を任せたい。」

「研究所の破壊、ね。だけど、人的被害はゼロに。難しい任務だわ。」

「でも、できなくはないわね。」

「長官の命令とあれば、この朝潮、全力で取り組みます。」

「うーん……今回は大潮の出番はなさそうでしょうね。」

「それから建物内の戦闘もあるから、皐月も連れて行くべきね。」

そう言って、満潮は右耳に装着したインカムを操作。

数回のコールの後、呼び出した人物が通信に応じる。

『ふわあ……なんだよ、満潮。』

「ちよつと緊急の任務が入ったの。協力しなさい。」

『ええー。僕、今日は非番なのに』

「……そう。手伝ってくれたら、何か奢ってあげようと思ったけど仕方な『3分で用意するから待ってて !!』……チヨロイわね。」

「長官、俺も同行します。」

同行者に凱が立候補する。

長官も特に拒否する理由がなかったので、彼の同行を承認した。

「では、全員装備を整えて第2格納庫へ集合するように !!」

それから、満潮くん。残念ながら、特別艤装はまだ修理中なんだ。」

「深海棲艦を相手にする訳じゃないし、大丈夫よ。」

そう言つて、満潮は第8駆逐隊の面々と凱を連れて、第2格納庫へ向かった。

〈 G G G 第2格納庫 〉

一方、第2格納庫の方では着々と出発準備が整えられていた。

第2格納庫は海を埋め立てた建設された施設であり、外部からは島の一部に見えるようにカモフラージュされているのが特徴である。

その内部にあつたのは、黒いSL機関車とその列車と思われる乗り物だ。その機体の周りでは、整備員がチェックを行つていたり、G G G 隊員が荷物を運びこんでいる。

そして、機関車の操縦席には夕張が座り、発進の時を静かに待っていた。

「GSライド、正常稼働。ウルテクエンジン、問題なし。」

モニターに表示される情報に目を通し、各部分の異常の有無を確認する夕張。

整備部の面々や研究開発部の面々がこの日のために入念なメンテナンスを行っていたので、目立った異常は報告されない。

「よし、異常なし。ティエラ、そつちも問題なし？」

夕張の言葉に反応して、モニターが展開される。

その中には、黒い髪の少女が映し出されていた。

『はい。各列車とのリンクも問題ありません。』

「1号車は私が操縦するけど、それ以外はティエラ任せだからね。ハマしないですよ？」

『分かっています。あの人の顔に泥を塗る訳にはいきませんから。』

「なら、良し。乗組員の方々、全員揃ってますか？」

『全員乗り込んだわよ。いつ出発しても大丈夫よ。』

インカムから艦娘たちのリーダー、満潮からの返答が聞こえてくる。

さらに、ティエラと呼ばれた少女の隣に大河長官の姿が映し出される。

『夕張くん。聞こえるか？』

「はい。」

『作戦の確認をしておこう。今回の作戦は、人造艦娘製造計画の研究所の破壊、及び被験者の救助が目標だ。先行している諜報部と協力して、作戦にあたってくれ。』

「分かりました。」

『うむ !! Gライナー、出撃承認 !! 作戦行動を開始せよ !! 』

「了解 !! Gライナー、発進します !! 」

Gライナー専用の出撃ゲートが開き、固定具が解除される。

同時にウルテクエンジンが稼働し、黒い機体がレールに沿って進み始める。

夕張が操縦する1号車を先頭に全部で5台の列車が連結し、目的地に向かって発進した。

Gライナー。正式名称は、多目的多機能輸送列車ガジェット・ライナー。

外見はSL機関車を模しており、動力源にはGSライドを用いている他、推進機関としてウルテクエンジンを採用することで水上航行、飛行を可能にしている。

列車を入れ替えることで様々な目的に対応することができるのが最大の特徴であり、どんな場所でも着陸することができる。また、特殊な金属を使う事でレーダーに感知されない。

閑話休題

「熱光学迷彩、展開。」

夕焼けの空を飛行するGライナーの姿が周囲の風景と一体化するように消える。

機動部隊を乗せた列車は諜報部隊が待つ研究所へと向かって、車輪を回すのだった。



Gライナーが目的地へ向かっている頃、人造艦娘製造計画の研究所から逃走した少女は、未だに追手を振り切れず、森の中を駆けていた。

「しっしっ……！！」

少女を追い掛けるのは、ドーベルマン5頭。

研究所で施された処置のせいで身体能力は同等ぐらいになっているが、体力の方はそうはいかない。現に少女の呼吸が乱れている。

「これでもくっえ！！」

少女は、道端に落ちていた小石を拾って投擲。

ちよど真ん中を走っていたドベールマンの額にヒットするが、残りの4頭が追跡を続ける。

そして、鬼ごっこを続けている間に少女は森を抜けることに成功するが、森を抜けた先は逃げ場のない断崖絶壁になっていた。

高さは目測で10m以上あり、崖の下は木々が密集している。一方、森の出口はドベールマンによって塞がれており、少女に逃げ場はない。

「……………」

チラツ、と崖の下を見る少女。

いくら肉体が強化されていても、清水の舞台と同じか、それ以上の高さから飛び降りれば、無傷では済まないだろう。しかし、追手から逃げ切ることはできる。

「……で捕まったら、申し訳ないよね。」

少女の頭に浮かんだのは、脱走に協力してくれた2人の姿。

失敗すれば酷い目に合うことは間違いないのに、少女を信頼して手助けしてくれた。ここで捕まってしまうのは、覚悟を決めた2人に顔向けできない、と少女は思った。

「ア—イ……キャン……フライー!!」

覚悟を決めて、崖から勢いよく飛び降りる。

重力に引き寄せられて、速度を加速させながら地面に向かっていく少女の身体。

襲いかかってくるであろう激痛に備えて、目を瞑る——が、その時はいつまで経ってもやってこなかった。

「……………？」

瞼を開けると、少女の身体は木々の数m上で静止していた。

「追手から逃げ切るためとはいえ、思い切ったことするわねえ。」

少女の手を掴んでいたのは、ガンダーベルを操る陽炎だった。見事に飛び降りた少女をキャッチした陽炎は、ゆっくりと高度を下げて着陸する。

「うわあ、傷だらけね。ちよつと待ってなさい。」

そう言って、陽炎はガングルーから救急箱を取り出して、少女の応急手当てに取り掛かる。

「あ、あのっ !! 貴女は……」

「GGG 諜報部の陽炎よ。安心して、研究所の関係者とかじゃないから。」

「GGG……?」

「簡単に言えば、正義の秘密結社よ。もちろん、『軍』とも無関係だから。」

「そんな組織がどうして此処に……」

「確か、人造艦娘製造計画だっけ？ それをぶち壊すためにね。」

「ほい、これで手当て終わり。消毒は済ませたから化膿することはないわ。」

「あ、ありがとうございます。」

「どういたしまして♪ —— つて、ヤバツ!! もうすぐ作戦開始じゃない!!」

現在時刻を確認した陽炎は、慌てて少女をバイクの後部座席に乗せ、ガンドーベルを
発進させる。

「運転しながらで悪いわね。私は陽炎、アンタの名前は？」

「あつ……と、土佐です。加賀戦艦2番艦、土佐の転生体です。」

「……………はい？」

第11話

——研究所周辺——

「警備に2人、武装は軽装備。制圧は容易そうね。」

研究所を取り囲むように広がる森の中。

先行した不知火は、周辺をパトロールする警備隊に気付かれないように姿を隠しながら研究所の様子を監視していた。

「警戒が続いてる所を見ると、脱走した子は捕まってないみたいね。」

「そっちは陽炎が無事に確保したみたいだよ。」

まるで初めからそこに居たかのように川内とボルフォッグ、そして長月が姿を見せる。

川内はすでに短刀を両手に握っており、ボルフォッグもビークルマシン形態からビークルロボ形態に変形しており、突入準備は万全だ。

「ベイタワー基地からの援軍ももうすぐ到着するとのことですよ。」

「よし。予定通りに開始できそうだね。」

「陽炎がまだ合流してませんが？」

「作戦手順は知ってるだろうし、後から参加でも大丈夫ですよ。」

「……どうやら来たようですね。」

「予定時刻も早いご到着だねえ。」

雲の隙間から顔を覗かせる星空を見上げれば、ひと際明るく輝く1つ星。その星は徐々に大きくなっていき、その正体が鮮明になっていく。星の正体は、黒光りするボディに取り付けられた照明だ。

「作戦、開始!!」

真つ先に川内が飛び出し、入り口を守る警備員に襲いかかる。

「な、何者だ!?!」

川内に気付いた警備員はすぐに武器を構えるが、遅かった。

霊力によって強化された身体能力に普通の人間が叶う訳がなく、警備員は意識を刈り取られる。

「第1段階完了、と。」

「お見事です、川内隊員。」

「まあ、普通の人間2人だけだしね。警備も薄くなってるし。」

警備員を手際よく拘束しながら答える川内。

そして、警備が無力化された所で、GGGの援軍を乗せた輸送列車が研究所近くに着陸する。

「ちよつと、夕張。急に作戦時間早くするのは、やめてよね。」

「ごめんごめん。時間計算、間違えちゃってね。」

ガジェット・ライナー1号車の運転席から顔を出す夕張。

それに釣られるように2号車、3号車に乗っていた本部からの援軍も外に出る。

全員がすでに艤装の装着を済ませており、凱も“IDアーマー”という戦闘用の甲冑を身に纏っている。

「お久しぶりです、凱機動隊長。」

「ああ。諜報活動ご苦労だったな、ボルフォッグ。」

「この程度、くぐつて来た激戦に比べれば、どうということはありません。」

「頼もしい限りだ。此処からは俺たちの仕事だ。」

「ボルフォッグは研究所周辺の警戒とガジェット・ライナーの警備を。」

「了解しました。」

「じゃあ、こつちも取り掛かるわよ。朝潮」

「は。い。」

G ウェポン—ウイルナイフを装着した朝潮が前に出る。

そして、緑色の刀身を展開すると、研究所の扉を十字に切り裂いた。

「さあ、第2段階開始よ!!」

研究所の警報が鳴り響くのと、GGGが研究所に乗り込むのはほぼ同時だった。

GGG部隊が突入を開始した頃。

「土佐」と名乗る少女を救助した陽炎は、森の中をガンダーベルで疾走していた。

「あっちゃあ……間に合わなかったか。」

『はい。陽炎隊員もお急ぎを。』

「わかってるって。」

ボルフォッグの通信を切り、さらに速度を上げる陽炎。

その背後では、土佐が腰に手をまわして、振り落とされないようにしがみ付いている。

「それにしても、転生体ねえ。まさか、本当に居るとは思わなかったわ。」

「転生体は前世の記憶を明確に覚えていません。」

「日常生活で自分が転生体であると気付く人は居ないと思います。」

「だけど、霊結晶《セフィラ》を取り込むと、前世を明確に思い出す。」

「はい。私や他の人もそうでした。後、あの『始原の艦娘』も転生体だったみたいで
す。」

「始原の艦娘……敗戦寸前の国を守り抜いた英雄、ね。」

「転生体というのは、かつての戦舟の魂——船魂が人に転生した存在のこと。」

「その最大の特徴は人の身でありながら、霊結晶《セフィラ》に適合できることだ。」

「また、転生体が霊結晶《セフィラ》を取り込むと、特殊な能力を発現すると言われて

いる。

この世界に最初に現れた5人の艦娘——通称、始原の艦娘もこの特殊な能力を使って、深海棲艦の手から国を守護したのではないかと言われている。

「ねえ、転生体って研究所に何人ぐらい居るの？」

「詳しい人数は分かりません。私も同室の子以外と会う機会は皆無でしたから……」

「——ってことは、手当たり次第か。」

「お役に立てなくて、すいません。」

「気にしなくていいわよ。——つと、見えて来たわね。」

突入開始からおおよそ3分の遅刻で、陽炎も作戦現場に到着した。

「みんなはもう中に？」

「盛大に暴れてるみたいよ。陽炎も混じってきたら？」

「そうさせてもらいます。土佐、アンタはどうする？」

「私も連れて行ってください。少しぐらいなら施設の中を案内できます。」

「じゃあ、お願いするわね。」

「はい!!」

「あつ、そうそう。陽炎に渡すモノがあつたのよ。」

そう言つて、夕張は陽炎に向かってメタルケースを放り投げる。

受け取つたケースの中身を確認すると、1丁の銃とマガジンのセットが収められていた。

銃には金色の装飾が施されており、グリップの部分にはGGGの紋章が刻まれている。

る。

「技術開発部最新作スタンバレット専用銃とマガジンよ。

大人の象でも1時間ぐらいは気を失うような代物だから、扱いには注意してね。」

「ん。ありがたく使わせてもらおうわ。」

ケースから銃本体とマガジンを取り出し、マガジンをセットする。

片手でしか運転できなくなるが、ガンドローベルにはAIが搭載されているので、勝手に運転を補助してくれるため、安全だ。

「それじゃあ、陽炎。遅ればせながら作戦に参加します。」

再びバイクを発進させ、研究所内に突入する陽炎。

先行隊が破壊したのか、侵入者迎撃用のトラップらしきモノは全て無力化されている。

「派手に暴れてるわねえ。楽が出来ていいわ〜」

「これ、全部陽炎さんの仲間が？」

「そうよ。」

巧みな運転技術で直角に曲がっている通路を曲がる陽炎。

その先にも先行部隊の戦跡が残されており、機械の残骸が広がっていた。

『こちら満潮。陽炎、聞こえる？』

「聞こえるよ。どつたの？」

『被験者が集められてる区画は占領したんだけど、問題が発生したのよ。』

「問題？」

『ちよつと2人だけ別の所に捕まえられてるみたい。そつちで確保してもらえる?』

「りよーかい。場所は分かつてるの?」

『研究所内を動き回つてるでしょ。この状況だし。』

「それもそうか。——ん、どうかしたの?」

満潮と話をしていると、後部座席の土佐が服の裾を引つ張つた。

ガンドーベルを止め、どうしたのか尋ねると、彼女はある方向を指差した。

その方向に居たのは、鎖で両手足を拘束された2人の少女とそれを引きずって歩いている研究者の集団。さらに、その周りを武装した警備兵が守っている。

「わお、すつこい偶然。」

陽炎はバイクから降りて、艤装を装着する。

「ガンダーベル、土佐を少し離れた場所に。」

陽炎の命令を受け、土佐を乗せたバイクは危険が及ばない距離まで離れる。十分に離れたことを確認した後、陽炎は被害者を確保するために走り出す。

「し、侵入者だ!!」

「遅い!!」

死角から現れた陽炎に応戦するため、警備兵が武器を構える。

しかし、霊水晶《セフィラ》から供給される霊力によって強化された身体能力を持つ陽炎は、それよりも早く引き金を引く。

「ぐわあ!!」

放たれたスタンバレットは警備兵の肉体の自由を奪う。

「もう一発!! ついでに、これもオマケよ!!」

素早く弾丸をリロードし、もう一度を引き金を引く。

そして、ポシエットから手榴弾のような物を取り出して、放り投げる。

「その女の子2人!! 目を閉じなさい!!」

「っ!!」

GGG技術開発部謹製のスタンバレットが着弾し、警備兵がまた1人倒れる。

その直後、眩い閃光がその場に居る者たちの視覚を一時的に奪い去る。

視覚麻痺を免れたのは、目を閉じていた陽炎と2人の少女だけ。

「ぐわああ、な、何も見えない!!」

「ふ、フラッシュグレネードか!!」

「はあっ!!」

フラッシュグレネードが効いている間に距離を詰め、掌打を放つ。

「人を殺してはいけない」というオーダーがあるため、もちろん手加減しているが、急所を突かれた警備兵はしばらく動けないだろう。

(残り2人!!)

「くそお!! 何処に居やがる!?!」

「そんなモノ、振り回すんじゃないわよ!!」

無闇矢鱈にナイフを振り回す警備兵の足を払い、転ばせる。

さらに、リロードしておいた銃の引き金を引き、また1人の警備兵を痺れさせる。

「暴れないでね。」

警備兵を無力化した陽炎は捕まっていた少女2人を抱えて、地面を蹴る。

抱える時に投下した煙玉が破裂し、真っ白な煙が通路を埋め尽くす。

だが、この行動を陽炎はすぐに後悔することになった。

(やばっ!! 電探の修理が終わってないの、忘れてた!!)

煙幕の中でも周囲の状況が大まかに分かる高性能電探が陽炎には支給されている。

しかし、作戦開始前の不知火とのいざこざ——という名の全力戦闘の際に電探が破損してしまい、一度基地で修理してもらった必要があつたのを彼女はすっかり忘れていた。

(えっと……少しなら覚えてるけど……)

「そのまま前に走りなさい。そうすれば、研究所の外に出られるわ。」

「この声……満潮?」

「いいから、さっさと真っ直ぐ全力疾走!!」

「わ、分かった!!」

陽炎は言われた通り、全力で走る。

やがて煙幕が晴れ、視界が回復すると、そこには薄暗くなった世界が広がっていた。

「みつともないわね。自分の罠に自分で引っ掛かるなんて」

「ぐっ、何も言い返せない……」

脱出した陽炎を待っていたのは、《ボルディングドライバー》を装着した荒潮。

そして、同じような方法で一足先に脱出していたであろう土佐とガンドーベルだ。

「霞から聞いたわよ。アンタ、作戦開始前に電探、壊したんだって?」

「そ、その通りです……」

「まったく……諜報部隊の自覚あるの!？」

「アンタたちは、いわば先遣隊!! そんな部隊が備えてないとか、何考えてるの!？」

「か、返す言葉もございません……」

「満潮姉くお説教は後にしましよ? 怖い人たちが追いかけてくるわよ」

「……そうね。一応、通つて来た道は潰したけど、あんまり長居する訳にはいかないわ。」

振り返ってみると、研究所の壁には穴が開いているが、それは瓦礫で塞がっている。

満潮が通り過ぎる直前に天井の一部を破壊して、通り穴を潰したのだろう。

「満潮機動隊長、被験者の収容完了しました。」

「ん、了解。突入した他のメンバーも帰つて来た?」

「いえ。朝潮隊員と凱機動隊長がまだ戻っておりません。」

「2人が？ まあ、あの2人なら大丈夫でしょ。」

私たちは先にガジェット・ライナーで待ってましょう。」

「ああ、分かった。俺もすぐに戻る。」

研究所内に侵入している凱は、そう返事をするとう通信を切った。

「どうかされましたか？」

「被験者全員の収容が完了したらしい。残ってるのは俺たちだけだ。」

「そうですか。流石、満潮ですね。」

「この部屋を確認したら、俺たちも脱出するぞ。」

「はっ!!」

凱と朝潮は最初満潮たちと行動していたが、研究所に囚われていた子供を一足先に収容するために別行動することになった。

経験の豊富さと閉所における武器の相性のため、凱と朝潮が選抜され、研究所内の怪しい場所を徹底的に調べている最中なのだ。そして、目の前にある部屋が調査していない最後の部屋になる。

「はあっ!!」

《ウィルナイフ》で扉を切断し、破壊する朝潮。

「なっ!!」

破壊した扉の先に広がる衝撃的な光景に絶句するしかなかった。

なぜなら、そこに広がっていたのは大勢の艦娘の死体だったからだ。

第12話

——GGGベータタワー基地 秘匿区画——

GGGベータタワー基地には、GGG隊員のみが立ち入ることを許される秘匿区画が存在する。

特殊な方法でのアクセスしかないので、艦娘も秘匿区画のことは知らず、知っているのは、長官の秘書艦である大鳳と海上機動部隊の隊長である満潮だけだ。

その秘匿区画をリフトで下っていくのは、GGGを纏める大河 幸太郎長官である。長官を乗せたリフトは、秘匿区画最奥へと導く。

秘匿区画の最奥は、巨大な工場のようになっており、大きなハンガーでは赤、青、緑、黄色、ピンク、黒のロボットやモグラ、イルカ、翼竜を模したロボットが整備を受けている。

そして、その中央では、GGGの協力者である科学者—ソールがコンピューターと睨めっこしていた。

「ソールくん。人造艦娘製造計画の被験者は無事に救助したよ。」

「そうか、良かった——つていう訳ではなさそうだな。何があった？」

「……………研究所で艦娘の遺体が確認された。しかも、かなり大勢の。」

発見したのは、凱と朝潮。

そこに廃棄されていた艦娘の遺体に共通していたのは——

「そして、その遺体は全て^{セフィラ}霊水晶を抜かれていた。違う？」

「知っていたのかい？」

「^{セフィラ}霊水晶の製造と管理は妖精たちが行っている。

だから、人間たちが自由に使える物は存在しない。なら、艦娘から調達しかない。」

そう言いながら、ソールは机を思いつき叩いた。

「同胞が裏切っていた方が、どれだけ気が楽だったことか……!!」

艦娘を艦娘たらしめる霊水晶セファイラは、ソールの同胞である妖精しか作れない。

また、艦娘から霊水晶セファイラを取り出すと、艦娘は普通の少女に戻ることができる。

大本営では、それを“解体”とよび、“建造”と同じように妖精にしかできない。

では、妖精の手を借りずに艦娘から霊水晶セファイラを取り出すとどうなるのか？

艦娘から無理にそれを取り出した場合、取り出された艦娘は死んでしまうのだ。

ポルフオッグが発見した艦娘の遺体は、無理に霊水晶セファイラを取り出された結果なのだ。

「ああ、すまない。取り乱してしまった。」

被験者の受け入れ準備は整っているから安心して欲しい。」

「……ソールくん。1つ聞いてもいいかな？」

「なんだい？」

「数年間、君に接してよく分かったことだが、君は犠牲の上に何かを得ることを嫌う。

だからこそ、私は不思議なのだ。何故、君があゝの再生計画に賛成したのか？」

「……まあ、そう捉えるのも仕方ないか。何せ、ソール11遊星主の中核とも言える物質復元装置を作ったのは、他でもない私なんだから。」

ソールは苦笑いを浮かべながら呟いた。

ソール11遊星主というのは、かつてGGGと敵対した組織である。

組織と言っても厳密に言えばプログラムであり、今は滅びてしまった。『三重連太陽系』という太陽系の再生と守護を目的としていた。

しかし、その目的を達成するためには、GGGの母星が存在する宇宙が犠牲になってしまったため、GGGと敵対することになった。

その中核は、『パスキューマシン』と呼ばれる物質復元装置であり、それを作り上げたのが目の前に居るソールなのだ。

「長官。そもそもパスキューマシンを作った目的は太陽系の再生なんかじゃない。パスキューマシンの役目は本来、重要な文化財のバックアップ。」

「バックアップ？」

「白の星にもロストテクノロジーと呼ばれる産物は存在した。」

パスキューマシンはそういう物が失われないようにするための物。

現物が無くなれば、ロストテクノロジーを解明することもできなくなるから。」

「それがなぜ三重連太陽系の復元に……」

「すべては赤の星の指導者、アベルとそれに賛同する奴らのせい。」

「？」

三重連太陽系の事情にそれほど詳しくない大河長官は疑問符を浮かべた。

「当時、三重連太陽系は寿命を迎えつつあった。

そこで緑の星の指導者カインと赤の星の指導者アベルの意見が対立した。

カインは新しい太陽系の移住を提案し、アベルはソール11遊星主を提案した。」

ソールの昔話は続く。

カインとアベルの主張が食い違い、11の遊星はカインの派閥とアベルの派閥に分けられた。

しかし、時が経つにつれてアベルが提唱した三重連太陽系再生計画は無理が生じた。

計画の要になる物質復元装置を作成することができなかつたからだ。

だがしかし、アベルがその程度で諦める筈がなく、アベルはソールが作り上げたパスキューマシンに目を付けた。

一方で、ソールも悪用されることも考え、セキュリティとしてパスキューマシンの管制人格を取り付けた。ソールの思考パターンを模して作り上げたその人格は、ピサ・ソールと名付けられた。

「それで安心していた部分もあつたんだろうね。

ある日。パスキューマシンが何者かによつて盗み出されたのさ。」

「まさか……………」

「十中八九、アベルとそれに賛同する奴の仕業だろうね。」

アベルは目的のためなら、手段を選ばないような奴だったし。」

「その後はどうしたんだい？」

「もちろん、カインと一緒に抗議したよ。でも、アイツは知らぬ存ぜぬの一点張り。」

そして、ソール11遊星主の計画を止めることができないと悟った私とカインは……………」

「ソール11遊星主に対抗するためのアンチプログラムを作った。」

「そう、それこそがジエネシックガオガイガー。」

だけど、ソール11遊星主が本格稼働する前に紫の星でZマスタープログラムが暴

走。

その混乱に乗じてパスキューマシンを回収するつもりだったんだけど、ね。」

「何かあったのかい？」

「機械昇華の速度が予想より早くて、回収する余裕がなかったのよ。」

「これでも私は白の星の指導者で住人を守る義務があったからね。」

「そして、この星にやって来たのか……」

「そういうこと。さて、長官の疑問は晴れた？」

「ああ。すまないね、こんなタイミングに。」

「別に構わないよ。Gライナーの帰還予定時間まで十分時間があるから。」

「では、私はこれで失礼するよ。」

そう言つて、大河長官はソールの城から退室しようとする。その直前、ソールは思い出したかのように彼を引きとめた。

「ずっとお礼を言つてなかつたけど、娘を止めてくれてありがとう。

多分、あの子もアベルの道具にされて悲しんでいた筈だから。」

パスキューマシンの管制人格のピサ・ソール。

ソールの人格を模しているため、普通はソールと同じようにソールー遊星主に賛成する筈がないのだが、アベルによってプログラムが書き換えられ、彼女に従順な存在に作り変えられてしまったのだ。

「ソールくん。お礼は、彼らに言つてあげてくれ。

君の娘を止めたのは、我らが勇者たちだからな。」

大河長官は大きなハンガーで眠っているロボット群を見詰めながら呟いた。

「……………ああ、そうだったね。早く目覚めて欲しいものだ。」



その頃、雷牙博士の研究室にて。

「どうじゃ？ その左目には慣れたかの？」

「は。い。」

雷牙博士と面会しているのは、緑色の着物を身に纏った少女。

髪は紺のセミロングで日の丸を意識した鉢巻を巻いており、瞳は赤く垂れ目。

どことなくおっとりした雰囲気纏っているが、その瞳は確固たる意志が感じられる。

「ほれ、これが改修した艤装じゃ。」

飛行甲板には開放型ミラーカタパルト、主機も改良して29ノットは出せるぞ。」

「ありがとうございます、雷牙博士。」

お礼を言つて、少女は改修された艤装を受け取り、装着する。

外見上は大した変化はなく、変化した所と言えば、飛行甲板に開放型ミラーカタパルトが搭載されたことと矢筒が1つから2つに増えたことぐらいだ。

「なに、これが僕ちゃんの仕事だかね。」

「それでも、です。雷牙博士のおかげで私はもう一度戦場に立てますからか。」

「君も物好きじやのう。あれだけボロボロにされてまだ戦うのか。」

「はい。私は、艦娘ですから。」



???

「ククク……ハハハハツ !! ついに、ついに完成したぞ !!」

薄暗い空間で白衣を着た男性は、歓喜に震えていた。

「随分ト楽シソウネ。」

「ヘンダーか。」

男性の背後に、真っ白なボディスーツを着用した女性が現れる。

アルビノのように純白の肌と長い白髪に真っ赤な瞳を持ち、右手は機械の義手のようになっている。そして、何よりも目を惹くのが滑走路を携えた巨大な艦装である。

「ああ、楽しいよ。苦節10年、ついに完成したよ。」

「これさえあれば、艦娘も人も滅ぼすことなど容易い。」

「ヘエ……ソレガ例ノ物ナノネ。」

「ああ。それと、ヘンダー。その面倒な喋り方はしなくてもいいぞ。」

「あらそう？　じゃあ、そうさせてもらうわ。」

それよりも、それが完成したということは、ついに始まるのね。」

「その通りだよ、ヘンダー。差し当たっては、海域に展開している深海棲艦を集めてくれ。」

「人間共が調子づいて攻めてくるわよ。」

「それが目的なのさ。」

「ふーん……まあいいわ。貴方が何の考えもなく、そんなことをするとは思わないし。」

「ああ。その代わりと言ってはなんだが、君に渡しておこう。」

そう言って、白衣の男性は立ち去ろうとする女性に紫の石を渡した。それは女性の体内に吸い込まれて行き、完全に一体化してしまった。

「——ッ !! へえ、確かにこの力があれば、なんでもできるわね。」

「気に入ってくれてうれしいよ。艦隊の件、任せたぞ。」

「ええ。」

短く返事すると、ヘンダーと呼ばれた女性は姿を消した。

「さあ、始めよう。この青き星の機界昇華を !!」

薄暗い空間の中で宣言する男性。

その下には、紫色に光り輝く石が無数に存在していた。

G G Gの隊員が見れば、すぐにその正体を看過しただろう。

なぜならば、その石はもう1つの地球において、G G Gが設立する切っ掛けになったモノであり、遠い宇宙から飛来したオーバーテクノロジーの産物。

その名は……ゾンダーメタル。

第2章 動き出す黒幕

雷牙とソールの設定紹介 世界観編

雷牙「僕ちゃんと……」

ソール「ソールの……」

雷ソ「世界観解説コーナー！！」

雷牙「さて、今回はこの物語の舞台になっている世界について説明するぞ。」

ソール「私たちが現在住んでる世界は、雷牙たちの故郷とは別の宇宙に存在する地球。あまり大きな違いはないけど、一番違うのは人類に敵対してる存在かな？」

「

雷牙「僕ちゃんの地球ではゾンダーと機界31原種。こつちの世界は深海棲艦じゃな。」

ついでに深海棲艦が現れて、艦娘が現れるまでの経緯も説明しておこうか。」

ソール「年表にするとこんな感じ。」

10年前：船舶の失踪が相次ぐ。2カ月後、駆逐級の深海棲艦が発見。

その3カ月後：深海棲艦による被害が相次ぎ、討伐隊が編成↓敗北

更に3カ月後：軽巡級の深海棲艦が確認。深海棲艦の勢力圏が拡大。

同時に勢力圏内の国が深海棲艦からの侵略行為を受ける。↓国連が動く。

その1カ月後：国連軍が編成され、深海棲艦との全面戦争が勃発。

↓大きな被害を受けるものの勝利。しかし、撃滅には至らず。

その数日後：重巡級・戦艦級の深海棲艦が出現し、各国の軍が甚大な被害を負う。

↓シーレーンが破壊され、日本が海上で孤立する事態に。

更に数日後：深海棲艦が日本本土へ侵攻。

↓ “始原の艦娘” の出現によって、間一髪阻止。

その直後　　：妖精が表舞台に現れ、協力関係を築く。また、艦娘の建造が可能に。
9年前：空母級の深海棲艦の出現により、空路にも被害が及ぶ。

その1カ月後：深海棲艦が戦略を学習し始め、艦娘の連戦連勝がストップする。

その数週間後：各地に鎮守府が設立され、国に代わって提督が艦娘の指揮を執る。

8年前：本土近海の安全を確保。各鎮守府が海域解放へと乗り出す。

7年前：姫級深海棲艦の存在が初めて確認されるも死闘の末に撃沈。

5年前：GGGが夢幻島に漂着。

その数日後　：ソールがGGGと協力関係を結び、GGGベータワー基地の建設が開始。

2年前：GGGベータワー基地が完成。数日後、満潮がGGGに保護される。

その少し後　：とある事件で満潮が片腕を失い、手術を受ける。

2年前より数カ月前：ボルフォツグ覚醒。川内らと共に本土の諜報活動へ。

数ヶ月前：ルネ、Jが響を拾う。

約2カ月前：哨戒任務中に雪風を保護。

そして、現在に至る。

ソール「他にもいろいろあったけど、それは省略するよ。」

雷牙「全部纏めると長くなってしまいうからのう。さて、次は艦娘の説明に移ろうかのう。」

ソール「ん。この作品の艦娘は霊水晶セフィラをその身に宿した少女よ。

但し、妖精による建造でしか生まれ来ないから、妖精の機嫌を損ねたらアウト。

例外は、艦娘の原典になった吹雪、叢雲、漣、電、五月雨の5人だけ。もちろん大戦時の記憶も持つてる。」

雷牙「そういえば、同型艦は存在するのかのう？」

ソール「居るよ。でも、同じ鎮守府では同型艦は建造されないようになってる。

保護された場合とかは別だけど。あと、同型艦でも趣味嗜好とか性格は違うよ。」

各鎮守府では艦娘に見分けがつくようにアクセサリーを支給することもあ
る。」

雷牙「ふむ。艦娘について分かっているのはこれくらいかろう。」

ソール「じゃあ、ついでに艦娘が使う霊子力についても説明するよ。

艦娘のコア、霊水晶セフィラから生み出されるエネルギーが霊子力。

このエネルギーを運用して、肉体を強化したり、浮力を発生させてる。」

雷牙「他には装甲にも使われるのう。この装甲は要するにバリアじゃ。

それを抜かれると肉体にダメージが負う。

そうじゃのう……性質的にゾンダーバリアが近いかもしれん。」

ソール「一番重要なのは、物体が持つあらゆる機能、性能を強化できること。

艦娘の艦装が小型なのに艦船の時代と同じ威力を出せるのは、このおかげ。」

雷牙「さて、この霊子力。まだ未知の部分があるが、GGGではある推測を立てている。

僕ちゃんたちの宇宙に存在する木星が持つ超エネルギー、ザ・パワーが変異した

モノがこの霊子力ではないか。まだ確証はないがのう。」

ソール「じゃあ、次は深海棲艦の解説……と行きたいところだが」

雷牙「残念ながら深海棲艦については未解明な部分がほとんどじゃ。

分かっているのは、あらゆる海に自然発生すること、霊子力とよく似たエネルギーを使用していることぐらいじゃな。」

ソール「——ということで深海棲艦の解説は終了。

あと説明したおいた方が良い事って、他にある？」

雷牙「あとは妖精のことぐらいじゃな。人によって設定が違うからのう。」

ソール「ん、分かった。本編でも触れたけど、妖精は白の星の住人の末裔。

三重連太陽系11の遊星の1つだった白の星は早い段階で移民計画を立てていた。

だから、機界昇華が始まった時も多くの住人が生き残ることができた。」

雷牙「元はソールのように人間と同じ大きさだったと聞いておるが、何があつたんじゃ？」

ソール「この星に着いた時、まだ平安時代辺りだったから身を隠す必要があつた。

突出した技術は争いの原因になる可能性が高いから。

その中で唯一交流を持ったのが同じように隠れて住んでいた小人族。」

雷牙「小人っていうと……一寸法師とかスクナヒコのことか？」

ソール「その通り。それで小人族の子は必ず小人になるから、時代が進むにつれて

私以外が全員小人になった。もちろん、持ち込んだ技術は継承してるよ。」

雷牙「……その割には若く見えるが、何か理由があるのか？」

ソール「内緒。」

雷牙（相変わらず、口の堅い奴じゃわい。）

ソール「そうそう、艦娘には必ず艦装妖精が着いてるけど、あつちは白の星とは無関係。」

——というより、正体は私たちも良く分かってない。」

雷牙「ある程度仮説は立っておるが、立証する術がない状態じゃ。

基本的に艦装妖精は無口じゃからのう。」

ソール「艦娘は言ってることを理解できるらしいけど、ね。」

雷牙「さて、現時点で公開できるのはこれくらいかのう。」

ソール「作者が思い出したら加筆修正するかもしれないけど。」

雷牙「まあ、その時はその時じゃろう。」

取り合えず、世界観解説コーナーはこれにて終了じゃ。」

ソール「ご精読ありがとうございました。」

第1話

雪風Side

「——という訳で、今日から第7戦隊に配属された龍鳳だよ。」

「初めまして……っっていうのも変ですね、軽空母の龍鳳です。よろしくお願いします。」

秋が深まるある日。急に呼び出されたと思ったら、新しい艦娘を紹介されました。

深緑色の着物に独特な迷彩が施された飛行甲板を身に付けている空母さんです。

……どこかで見たような覚えがあるんですが、気のせいでしょうか？

「それから、雪風さんと初霜さんありがとうございます。ごさいました。」

「……………??」

「えつと……覚えていませんか？ 私、海を漂っていた所を助けてもらった艦娘です。」

「……………ああ！！」

思い出しました！！ どこかで見たと思ったら、あの時助けた艦娘です！！
助けた時と身に付けているモノがまったく違うので、分かりませんでした。
妖精さんと雷牙博士に任せた後、会う機会がなくて忘れていました。

「すみません、すっかり忘れていました。」

「いえ、思い出していただけて何よりです。」

本来なら、もっと早くお会いする予定だったんですが、治療が長引いてしまつて……
「それつてつまり……高速修復材で治せない怪我を？」

初霜さんの言葉に龍鳳さんが頷いて、今まで閉じていた左目を開きました。

瞼の下に隠されていたのは、黒い瞳ではなく、真っ赤な瞳。さらに言えば、その瞳はどこことなく無機質な感じがしました。

「私は敵の攻撃で左目の視力を失ったんです。

今の左目は雷牙博士特製の義眼です。その調整のために、着任が遅れたんです。」

「どうしてそこまで……」

「果たしたい目的が、守りたい者が居るから。それだけですよ。」

艦娘の怪我は高速修復材と呼ばれる特殊な薬品で治せます。

ですが、満潮さんみたいに左腕を失ったり、龍鳳さんみたいに視力を失くした場合はどうやっても治すことはできません。

そういった重度の怪我が原因で引退する艦娘も多いそうです。それでも、艦娘であることを望んだということは、龍鳳さんには、それだけの目標があるみたいです。

「あの、響ちゃん。龍鳳さんが着任したのは分かったけど、どうして第7戦隊に？」

「ああ、最初は主力艦隊の第1戦隊に配属される筈だったんだけど……」

「「「」だけど？」「」」

「第1艦隊の旗艦がね、断ったんだよ。別に新しい空母は要らないって。」

「「「あゝ……」」」

満潮さん率いる第1戦隊は駆逐艦のみで構成されていますが、あの艦隊には荒潮さんが居ます。そして、荒潮さんのGウエポン―ボルティングドライバーは“空母殺し”という異名を持つほど防空能力が高いのです。

それに、どうしても空母が必要な場合は大鳳さんが第1艦隊に編入されるので、龍鳳さんの出番がほとんどありません。満潮さんが断るのも納得です。

「ああ、それと龍鳳の件とは別に重要な報告があるんだ。

この後、簡単な任務を受けようと思ったら、今日は任務が入ってきてないんだ。」

「珍しいですね。依頼が1つも入ってこないなんて」

「じゃあ、今日はお休みですか？」

「そうなるね。だから、この時間を利用して、龍鳳に町を案内しようと思う。
反対の人は挙手。」

響さんが採決を取りますが、誰も手を挙げません。

「はい、決定。じゃあ、30分後に町の入り口で集合ね。」

...

.....

.....

.....

そして、60分後。

私服に着替えた私たちは、町を散策していました。

もっとも着任したばかりで私服を持っていない龍鳳さんは、戦闘用の着物ですが。

「この町が活気がありますね。本土とは大違いです。」

「本土は違うんですか？」

「場所によりけり、かな。でも、ここまで賑わっていないね。」

「響ちゃんの言う通りです。何せ、本土は慢性的な物資不足ですから。」

本土を知る響さんと龍鳳さんが言うには、物資は国防の要である鎮守府に優先的に回されるため、民間の方はかなり物資が不足しているそうです。

夢幻島はどうなのか、ですか？

この島は特にそんなことはありませんね。人口がそんなに多くないのも理由の一つですが、それを賄えるだけの生産力もあります。

だから、人々の心に余裕があり、こうして活気のある町が作り上げられている訳です。イムヤさんの受け売りですが。

「もぐもぐ……：そういうえば、もうすぐお祭りの季節だね。」

「お祭り、ですか？」

「うん。島民、艦娘全員参加可能の大規模なお祭りが来週あるんだ。」

「夏と秋の年2回行われるんだよ。島民だけじゃなくて、艦娘がお店を出したりするんだ。」

「そういうえば町の至る所にチラシが張ってありますね。」

「えっと……：場所は龍神社境内。日時はちょうど一週間後ですか。」

緊急出動がなければ、行けると思いますが、こればかりは当日にならないと分からないのですね。

「確か、G G Gからも夜店を出す人が居るはずだよ。」

「第5戦隊と第3戦隊の人たちですね。何でも準備のために一週間の休暇を申請したそうですよ。」

「そして、そんな要望を通した我らが長官。」

響さんの言葉に全員が揃って苦笑いを浮かべました。

大河長官に申請すれば、結構な確率で休暇申請が通ります。当然ながら正当な理由が必要なのですが、G G Gではお祭りの準備ですら正当な理由になります。

「楽しみですね、お祭り。」

「警備任務に割り当てられたら、あんまり楽しめないけどね。」

「GGGって、基本的に立候補制ですよね？」

「誰も立候補しなかった場合はどうなるんですか？」

「手が空いてる艦隊の各旗艦が話し合って決めるよ。」

「まあ、話し合いで決まることなんてないから、ジャンケンで決めることが多いよ。」

「何というか……自由ですね。」

「やりたい人にやらせるのが基本方針だからね。」

「まあ、私もGGGに着任した時は龍鳳と同じような反応したよ。」

「あの……皆さん？ 龍鳳さんに町を案内するという話はどうなったのでしょうか？」

「今まで会話に入ってこなかった初霜さんがそんなことを言いました。」

「さつきから食べ歩きしてるだけのよ様な気がするんですが……」

「失敬な。これから案内しようと思つてたところだよ。」

——というわけでまずはあそこに行こうか。服は絶対必要だからね。」

そう言つて、響さんが指さしたのはこの町で一番規模が大きい呉服店です。

昔ながらの衣服から古今東西の洋服などなど幅広い品ぞろえが魅力的なお店です。

そのうえ、品質も良いので私服をここで買う艦娘も多いです。

その代わりにお値段も少し張つてしまうのが玉に瑕ですが。

「ほら、行くよ。」

響さんは龍鳳さんを引つ張つて、さつきと中に入つて行つてしまいました。

「追いかけてみましょうか。」

「そうですね。」

「えつと……雪風は遠慮します。あのお店には、ちよつと嫌な思いがあるので」
「あれは災難でしたね……」

あれは初めて町に来た時のことです。

まだ私服がなかったので、このお店で私服を買うことになったのですが……店員さんに着せ替え人形にされたんですよ。ゴスロリ服とかミリタリードレスとか色々。

イムヤさんが助けてくれるまでそれが続きました。

ちなみに、見繕ってくれた衣服はいくつか購入しました。

「——という訳で雪風はこの辺りをうろついてきます。」

「分かりました。潮さん、行きましょう。」

初霜さんは潮さんを連れて、お店の中へと入って行きました。

さて、何処で時間を潰しましょうか……。

第2話

雪風Side

私が所属する第7戦隊に龍鳳さんという新しい仲間が加わって、2日後。

私を含めた第7戦隊の皆は夢幻島近海に設置された演習海域で待機していました。響さんが艦隊間演習の申請をしたので、その相手を待ってるんですが……………

「遅いですね。もうすぐ演習の開始時間ですよ？」

「そうですね。もしかすると、誰も受理してないなんてことは……………」

「それはないよ。ちゃんと、命さんから何処かの艦隊が受けたって連絡が来たから。」

「演習も自主性なんて、本当に自由な鎮守府ですよね。」

まだ演習相手も来てないので、ここでGGGの演習形式を説明しましょう。

基本的には任務と同じで、任務関連を管理して命さんに申請。

あとは何処かの艦隊がそれを受理するのを待つだけです。

非効率かもしれませんが、やる気がある艦隊が受けるので充実な演習になります。

「待たせたわね。5人編成だから、メンバーの選抜に手間取ったわ。」

「あつ、来たみたい……です……ね。」

「[[[……]]」

「?」

振り向けば、そこに居たの満潮さん率いる第1戦隊の4人。

GGGに存在する七つの艦隊の中でもトップクラスの実力を誇り、さらにはGGGの艦娘の中で最強と謳われる満潮さんが籍を置く艦隊でもあります。

来る可能性はありましたけど、できれば遠慮したかった艦隊です。

「えつと……本当に第1艦隊が今回の演習相手なのかな？」

「ええ。」

「最近、出撃がなくて暇を持て余していたので受けさせて頂きました。」

「言っておくけど、手心なんて加えないわよ♪」

「作戦会議は10分。近接武器持ちは、寸止めを心がけてね。」

「勝敗条件は相手の艦隊の降参、もしくは全員の戦闘不能判定だよ。」

「戦闘不能判定は、火麻参謀が行うわ。じゃ、よろしくね。」

ルールを確認にすると、作戦会議のために第1戦隊は離れて行きました。

龍鳳さんは暢気によりしくお願いします、と挨拶してましたが、私たちにそれだけの余裕はありません。

「ど、どうするんですか　!?　第1戦隊が相手なんて聞いてないですよ　!?」

「こつちも予想外だよ　!!」

「フルボッコにされて終わりそうですね」

「う、潮さん　!!　しっかりしてください　!!」

「え、えっと……相手は駆逐艦のみですよね　?」

それに、向こうは1人少ないのにどうして……」

まあ、第1戦隊の……それも第8駆逐隊のことを知らないなら、そうなりますよね。

第8駆逐隊の4人は駆逐艦ではありません。駆逐艦の皮を被ったナニカです。

空を飛び、上空から攻撃を仕掛けてくる大潮さん。

装甲も砲弾も切り裂きながら敵に切り込む朝潮さん。

あらゆる攻撃から仲間を守護する荒潮さん。

そして、いかなる状況にも対応し、勝利をもぎ取る満潮さん。そんな規格外の駆逐艦で構成されたのが第8駆逐隊なのです。

私は直接見てはいませんが、響さんや潮さんが言うにはかなりの武勇伝を残しているそうです。

「それからもう一つ悪いお知らせ。満潮、Gウエポンを持ってた。」

「勝機が少数点ぐらいからゼロになりましたね。」

「あの……満潮さんのGウエポンって、黒い爪なんじゃあ」

「あれは衝撃から身を守るための防具に過ぎないよ。」

彼女が持つGウエポンは、巨大な戦斧。使ってるのを見たのはほんの数回だけだね。」

「まだ艦娘が少なかった時はそれを携えた満潮ちゃんが深海棲艦の大艦隊を1人で殲滅したなんて武勇伝も残ってるぐらいだよ。」

そんな相手と今から戦うんですよね……今すぐ逃げたいです。

「とにかく、作戦を考えよう。せめて一矢報いたい。」

響さんの言葉に全員が頷きます。

しかし、10分後。私たちは第8駆逐隊の実力を思い知らされることになるのでした。

A n o t h e r
S i d e

10分後。火麻の号令と共に第8駆逐隊と第7戦隊の演習が開始された。先手を取ったのは、航空戦力を有する第7戦隊。

龍鳳から飛び立った艦載機が第8駆逐隊を発見し、先制攻撃を仕掛けようとした。

「無駄よ。」

荒潮のボルテイングドライバーからオレンジ色の波動が発せられると、龍鳳航空隊の機体が内部分解を引き起こし、艦載機は全滅。先制攻撃は失敗に終わった。

そして、第7戦隊の先制攻撃を防いだ第8駆逐隊は速度を上げ、突進していく。

「大潮、アンタは艦載機の迎撃と援護に専念しなさい。」

「りょーかい。」

「朝潮姉、私で前衛。荒潮はバックアップ。」

「はーい♪」

「——というわけで朝潮姉。突撃するわよ。」

「わかったわ。」

朝潮は第1世代型Gウエポン、ウィルナイフを展開し、満潮は巨大な黒い斧を展開する。

黒の中に明るい黄色の紋様が施され、中心部分にGストーンを嵌めた戦斧こそ、満潮のGウエポンである。

「……………っ！！」

突然、足を止めて戦斧を振り抜く満潮。

Gストーンから放たれるエネルギーは電気へと変換され、遠方から飛来した何かを破壊する。

「満潮！！ 今のは……………」

「雪風のGウエポンね。迎撃しなかったら、至近弾か直撃ね。」

雪風たちが居る方向を見詰めながら満潮が口を歪めて、笑みを浮かべた。

「ちゃんと成長してるみたいじゃない。」

「あうく……防がれました。」

砲弾が飛んで来た方向には、腰を落として重砲形態のG―サイズを構えて雪風の姿があった。

重砲形態は彼女たち駆逐艦娘が持つ主砲よりも射程距離が長く、火力が高い砲弾を撃ち出すことができる。

「でも、狙いは良かったですよ。初弾で当てるなんて、そうそうできる芸当じゃありません。」

龍鳳のほめ言葉を聞きながら、雪風は砲弾をリロード。

トリガーを引き、第8駆逐隊に向かって再び砲弾を発射する。

「じゃあ、私もそろそろ……………」

そう呟いて龍鳳は和弓に矢をつがえ、力一杯引き絞る。

同時に矢がミラー粒子によってコーティングされ、放たれる。

放たれた矢は艦上爆撃機となって第8駆逐隊の許へと向かっていくのだった。

「響さんと潮さんは大丈夫でしょうか？」

「どうでしょうか。第8駆逐隊は、1人1人が強いですから……………」

「そろそろ接敵する頃ですよ。こっちもそろそろ……………っ！！」

スコープで敵を探していた雪風は、浅い部分を進む黒い物体を見つけた。その正体なんなのかすぐに察した彼女は、でんぐり返しのように海上を転がり、ソレを避ける。

大きな爆発が起こったのは、雪風が避けた直後だった。

(時限信管式の魚雷…… !! 発見が遅れていたら当たってました。)

「雪風さん !! 1発だけじゃないです !!」

「っ !!」

時間差で襲いかかって来た魚雷は、すでに目と鼻の先にまで迫っていた。

「プロテクトシールド !!」

雪風の危機を救ったのは、龍鳳の守りに付いていた初霜だった。

盾形のGウエポン、プロテクトシールドが空間湾曲によって海面を荒らし、魚雷の方向を狂わせる。

「へえ……良い判断ね。魚雷の弱点を的確に突いたわね。」

「満潮、私は空母の方をやるわ。」

一息ついたと思いきや、ウィルナイフと黒い戦斧を展開した2人が迫る。

朝潮は龍鳳を狙い、満潮は雪風を狙う。初霜はすぐさま龍鳳の護衛に戻らざると得なくなつた。

「せええいつ !!」

「くう !!」

振り下ろされる戦斧を大鎌形態に戻ったG―サイズの柄で受け止める雪風。そして、脇がガラ空きになった雪風に満潮の蹴りが叩きこまれる。

その反動で雪風は吹き飛ばされ、海の上で2回ほどバウンドする。

「いったあゝ……っつ !!」

起き上がろうとした所に戦斧が振り下ろされる。

雪風はそれを間一髪回避するが、今回はそれで終わらなかった。

「ああああつ !!」

回避した雪風に襲いかかるのは、電撃。

スタンガン並みの威力がある雷撃は雪風の動きを止めるのに十分だった。

そして、その首筋に戦斧の刃が当てられる。

「まだ接近戦に不慣れみたいね。対処の仕方がまだ甘いわ。

それにせっかくのGウエポンもきちんと使いこなせてない。」

戦斧を肩に担ぎ、満潮は雪風の問題点を列挙していく。

「いずれは戦艦クラスの深海棲艦とやり合う機会も出てくるわ。

そういう奴に対処できるようにしておきなさい。練習相手が欲しいなら、凱にでも頼むと良いわ。」

「わ、わか、りました、た。」

「痺れが取れたら、安全な場所で待っておきなさい。」

そう言っつて、満潮は演習に戻っていくのだった。

演習結果

駆逐艦 響：荒潮により、撃沈判定。

駆逐艦 潮：荒潮・大潮のコンビネーションにより、撃沈判定。

駆逐艦 初霜：朝潮・満潮のコンビネーションにより、撃沈判定。

驅逐艦 雪風：満潮により、撃沈判定。

軽空母 龍鳳：初霜撃沈後、降参。

第7戦隊 D敗北。

第3話

雪風Side

「いや〜……フルボッコでしたね。」

「ある意味わかりきってた結果だね。」

第8駆逐隊との演習が終わった後、私たちは第7戦隊詰所で反省会をしていました。演習の結果は惨敗。かすり傷一つ負わせることもできませんでした。

「彼女たち、本当に駆逐艦なんですか……？」

項垂れた龍鳳さんがそんなことを呟きました。

そんな彼女の言葉に私たちは苦笑いを浮かべることしかできませんでした。それは私たちも常々疑問に思っていることですから。

「分類上は駆逐艦だよ。その範疇から逸脱してるように見えるけど」

「その証拠に霊子力は私たち同じぐらいしか使えませんから。」

一般には認知されていませんが、艦娘の艦種は霊水晶セファイラが生み出す霊子力の量によって決まります。

私たちのような駆逐艦はそれほど多くの霊子力を生み出せませんが、戦艦とかになると倍以上の霊子力を生み出すことができます。その分、武装に回せる霊子力が増えるので、主砲の威力も増します。

ちなみに、GGGに所属する艦娘以外は霊水晶セファイラのことはおろか、霊子力のことも知りません。当然ながら霊子力のコントロールもできません。

「それにしても、どうやって彼女たちはあれだけの力を出してるのでしょうか。」

「こつちが知りたいよ。」

そうやって、響さんはグラスに入ったお酒をぐいぐいと飲んでしまいます。えっ？ お酒なんて飲んでいいのか、ですか？ 別に問題ないですよ。艦娘は基本的に成人と同じ扱いを受けるので、お酒もタバコも大丈夫です。まあ、タバコを吸う艦娘はそうそう居ませんが。それよりも、です。

響さんが飲んでるお酒のラベルに「VODKA」って書いてあったような気がするのですが、気のせいですよね？

「あつ、そういうえば火麻参謀からこんな物を貰ったんです。」

初霜さんが取り出したのは……DVD？

「今回の演習の一部始終を記録した物だそうです。」

これを見て、自分に何が足りないのかじっくり考えろ、とのことですよ。

そういうわけで、演習の記録を全員で鑑賞することになりました。

「改めて見ると、見事に慢心してるね。」

「うん。あんな使い方をしてくるなんて思いもしなかった。」

ちょうど映像には、響さんと潮さんが荒潮さんに向かっていく姿が映し出されていきます。

対する荒潮さんは、ボルテイングドライバーをまるで突撃槍のように扱って、大立ち回り。

大潮さんが潮さんを妨害してる間に響さんを撃破しました。

「あとは2対1の状況に持ちこまれて、敗北。」

多分、最初から全力で掛って来られたら、もつと早く負けていたね。」

「ほんと、ここの駆逐艦ってぶっ飛んでますね。」

普通なら、殴り合える距離まで近づくことにも戸惑うのに。」

DVDを見ながら龍鳳さんは眩きました。

私にはよく分かりませんが、艦船時代の記憶を持つ艦娘は本能的にクロスレンジまで近づくことを避ける傾向があるそうです。

なので、GGGの艦娘のように積極的に近接格闘戦を繰り広げるのは異常なことらしいです。

「あつ、今度は私たちの演習風景ですね。」

「あつという間に終わりましたけどね。」

改めて見ると、満潮さんとの格の違いを思い知らされます。

身体全体を武器のようにして戦う満潮さんに対して、武器の性能に頼る形になっている私。

私に足りないのは、技術と実戦経験。それに尽きます。

もつともつと強くなりたいです。

今度こそ、みんなを守れるように。

今度こそ、失わないようにするために。

「すみません、雪風、ちよつと行く所があるので失礼します。」

「ん。今日は任務を受けるつもりもないから、気にしないでいいよ。」

満潮さんに言われた通り、彼の所に行ってみましょう。

「くうっ !!」

「反応が鈍ってきてるぞ !!」

私がクロスレンジ戦闘の師事を仰いだのは、GGG陸上機動部隊隊長の獅子王 凱さん。

満潮さんにクロスレンジでの戦い方を教えたのも凱さんらしいです。

それで早速訓練を受けているのですが……………

「そんな大ぶりの攻撃じゃあ、当たらないぞ !!」

「は、はい !!」

訓練の内容はひたすら実践を繰り返すだけの簡単なモノです。

でも、私の攻撃は当たらず、空振りを続けるだけ。

「はあっ、はあっ……………」

「雪風、君の攻撃は力を入れ過ぎなんだ。

そのせいで攻撃が当たり難いし、無駄に体力を消費してしまう。」

「は、はい……」

「君の膂力なら片手で十分振りまわせる筈だ。

それから、無理して武器で防ぐ必要はない。避けたり、受け流すことも必要だ。」

呼吸を整えながら、凱さんに言われたアドバイスを反すうします。

確かに両手で扱っていても凱さんのように手数が多い武器に対処できません。

「早速やってみたいね。」

「満潮。街に行くんじゃないのか？」

「これから出かける所よ。通りかかったから覗いてみただけ。」

「それで私服姿なんですね。」

今の満潮さんは、朝潮型駆逐艦に与えられる制服ではなく、黒いパーカーに青と白のチエックのスカート。さらに髪はストレートに下しているのでまるで別人みたいです。

「命がうるさいのよ。非番の時ぐらい女の子らしいおめかししなさいって。」

凱、実戦経験で鍛えるのはいいけど、手加減はしてあげなさいよ。」

「分かってるって。」

「じゃあ、雪風。頑張りなさい。」

そう言い残して、満潮さんは訓練室から出ていきました。

「さあ、再開しようか。」

「はい !!」

それから、私はG―サイズで凱さんと切り合いました。

1合、2合、3合、と最初の内は数えていましたが、10合を超えてからは数えるのを止めました。

でも、疲れ方はさつきと全然違います。数えきれないほど切り合っているのに、まだ振り回せませす。

「大分いい感じに仕上がってきたな。」

「ありがとうございます !!」

「今日はこちらまでにしよう。無理をして、体を壊したら元も子もない。」

「分かりました。またお願いします。」

「ああ。満潮と違って、俺は空いてる時間が多いからな。」

事前に連絡を入れてくれれば大丈夫だ。」

「はい!!」

こうして、私のクロスレンジ戦闘の訓練初日は終了するのでした。



Another Side

雪風が凱の手を借りて訓練に勤しんでいる頃。

GGGメインオーダールームでは、本土で諜報活動を行っている艦隊からの定時連絡が行われていた。

「深海棲艦が戦線を縮小している、だと？」

『うん。偵察機を飛ばして確認もしたから間違いない筈。』

「ふむ……不可思議な行動じゃのう。」

雷牙博士がヒゲを触りながら呟く。

現在、深海棲艦と艦娘の勢力は拮抗している状況だ。

もちろん物量では深海棲艦側に優位があるが、艦娘側は練度と連携でそれを補っている。

そんな状況で戦線を縮小すれば、艦娘側（つまるところ、大本営）は喜々として進撃するだろう。

「戦力の補充でしょうか？」

「いや、罊の可能性もあるな。」

「しかし、深海棲艦にそこまでの知能があるのででしょうか？」

「深海棲艦は学習能力を持ってイマース。罊の可能性も十分考えられるノデース。」

メインオーダールームに憶測が飛び交う。

そんな中、新しいモニターが開き、本土に居るビークルロボ、ボルフォッグの姿が映し出される。

「どうした、ボルフォッグ？」

『はい。大本営がこの戦線縮小に乗じて、大反攻作戦を計画していることがわかりました。』

大本営に属するすべての鎮守府の主力戦力を以って、敵を撃滅する作戦のようです。』

「また無茶な作戦を立てるな。大本営は。」

「分の悪い賭けにも程があるぞ。」

メインオーダールームに居る面々は大本営発案の作戦に否定的だった。

それも当然だろう。

戦線を縮小しているからと言って、相手の物量が減っているわけではない。さらに言えば、この戦線の縮小が敵の罠である可能性が捨てきれない以上、闇雲に突撃するのは非常に無謀だ。

「ボルフォッグ。この作戦の詳細が分かり次第報告してほしい。」

『了解しました。』

『じゃあ、私も任務に戻るよ。』

展開された二つのモニターが消える。

「最悪の場合、我々が表舞台に立つことを視野に入れる必要があるな。」

「戦線縮小が敵の罠だった場合、だな。」

火麻の言葉に大河長官がうなづく。

「作戦が中止になってくれるのが一番なんだが……」

ほとんどあり得ないが、彼はそう願わずにはいられなかった。

第4話

雪風 Side

龍神祭。

それは夏と秋に行われる夢幻島唯一のお祭りです。

夢幻島とその周辺の島の守り神である龍神様に感謝を捧げる行事が時代と共に変化して、今に至るそうです。

その規模はとて大きく、龍神神社の参道から境内まで屋台がズラリと並んでいます。

島の人はいよいよ騒ぎながらこのお祭りを大層、楽しんでいるみたいです。

「にぎやかですねえ。」

「ええ、本当に。警備担当に充てられなくてよかったわ。

こんな風にのんびりとお祭りを楽しめるのも雪風さんのおかげね。」

「運が良かっただけですよ。」

この龍神祭の日は、GGGにある任務が入ってきます。

内容はお祭り会場の警備。まあ、警備と言っても主な仕事は酔っ払いの対処や迷子の対処なんです。

ただ、この警備任務は基本的に進んで受託する艦娘が居ないので、基本的にジャンケンで警備担当が決められることになります。それで第7戦隊からは私が代表として出て、見事勝利を収めたので、こうやってのんびりできるわけです。

「普段お目に掛かれないものばかりで楽しいですね♪」

「そうですね。でも、食べ過ぎはダメですよ？」

「分かっていますよ、初霜さん。あむっ」

ん〜♪ このリング飴、美味しいです♪

ちよつと高かったですけど、それだけの価値はあります。

「あつ、甘い匂いが……あの夜店ね。」

「ベビーカステラですね。」

「2人で分けて食べましょうか。」

「賛成です !!」

——という訳で、人の波を潜り抜けて“ベビーカステラ”という看板が掛かった夜店に突撃します。

「すみません、1000円の袋一つお願いします。」

「ちよつと待っててね。もうすぐ出来上がるから。」

夜店を仕切っているのは、私とそう変わらない背丈の女の子でした。

はて？ 声に聞き覚えがあるような気が……短め茶色の髪に同じ色の瞳、やっぱり覚えがあります。GGのどこかで会ったことがある筈なのですが……

「あれれ？ まだ気づかないのかにや？」

「その特徴的な喋り方……あつ、思い出しました！！

第3戦隊旗艦の睦月さん！！」

「正解だよお。やっと気づいたね。まあ、会う機会なんてほとんどないし、仕方ないのかな。」

どこことなく猫を彷彿させる彼女は遠征を主任務とする第3戦隊の旗艦、睦月さん。

元になった艦が、旧式ということもあって、睦月さんも他の駆逐艦娘には劣るようですが、Gウエポンの扱いに関しては第8駆逐隊に匹敵するそうです。

実際に戦ってる姿を見た訳ではないので、どれくらいの実力を持っているのかは分かりません。

「そういえば、第3艦隊の人は夜店を出しているんですけどね。」

「そうだよ。この夜店以外にも、もう1つ屋台出してるの。」

「そっちは夕立ちちゃんと吹雪ちゃんが中心にやってるけどね。」

「この夜店は睦月さん1人でやってるんですか？」

「ううん。睦月以外にも弥生ちゃんと卯月ちゃんが手伝ってくれてるよ。」

「今はちよつと用事で離れちゃってるけどね。——はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

お代を払って、ベビーカーが大量に入った袋を受け取ります。

そして、次の場所へ行くこうとした時、すぐ近くで何やら人だかりができていました。

「何かやってるんでしょうか？」

「あー、うちの卯月ちゃんだね。さつき、射的の助っ人頼まれたから。」

「射的、上手なんですか？」

「上手いなんてもんじゃないよ。目視できる範囲なら、百発百中。」

射撃の腕前ならGGGでナンバーワンじゃないのにかにゃ？」

「それはすごいですね……」

「うん♪ 長女として鼻が高いよ♪」

「——つと、次のお客さんが来てるから、お話しはここまで。」

「あつ、お邪魔してすみませんでした。」

「失礼しまーす。」

商売の邪魔をする訳にはいきませんからね。

あつ、このベビーカーカステラ焼きたてで美味しいです♪

「この後、どうします？」

「そうですね……取り合えず、神社の方に行ってみましょうか。」

「あつ、いいですね。」

・・・

・・・

・・・

・・・

「うわー境内も夜店が出てますね！！」

山頂にある龍神社の境内も夜店とお祭りの参加者で一杯でした。

さい銭箱にお賽銭を投げいれて手を合わせてる人、食べ歩きしてる人、知り合いと雑談してる人。こうやって見ると、この島も結構大勢の人が住んでるんですね。

「あつ、あなたたちも来てたのね。」

「イムヤさん。そちらの仕事は大丈夫なんですか？」

「ええ、今は休憩中だから。」

食べ歩きしている人の中に紛れ込んでいたのは、龍神社の巫女、イムヤさんでした。今回は赤と白の巫女服に身を包んで、その手には……手羽先？

「やつぱり、こういう場所で食べる物って格別ね。もぐもぐ」

「汚しても知らないですよ。」

「何かしら食べとかなないとやってられないわよ。それに、予備の服はちゃんとあるし。」

そう言いながら、イムヤさんは2本目の手羽先を食べ始めます。

この姿を見ていると、島の守護神たる龍神様に仕える巫女とは思えませんね。

「それじゃあ、私はもう少し食べ歩いてくるわ。一緒に来る？」

「止めときます。ここに来るまでに結構食べましたから。」

「雪風も今回は遠慮します。」

「残念。じゃあ、私はもう少し楽しんでくるわ。」

そう言って、イムヤさんが人ごみの中に入って行きました。

——が、そのすぐ後、何かを思い出した可能ように戻ってきました。

「そうそう。言い忘れてたことがあったの。」

2人とも、私が占いできることは知ってるわよね？」

イムヤさんの言葉に私たちは頷きます。

的中率はよく当たる占い程度なのですが、長官も一目置いているそうです。

過去には、この占いのおかげで敵の大規模侵攻を防げた事例もありますらしいです。

「その占いがあまり良くない……いえ、過去最大級に悪いモノだったわ。」

「……その話、長官には？」

「まだ伝えてないわ。ついさつき占ったばかりだし。」

必ず的中するとは限らないけど、一応伝えておいてくれる？」

私たちに伝言を託すと、イムヤさんは今度こそ人ごみの中に入って行きました。

「過去最大級の悪い占い……過去にあった大規模侵攻よりも悪いんでしょうか。」

「それは……当たって欲しくありませんね。」

G G Gの戦力が整ってきた頃に起こった深海棲艦の大規模侵攻。

それはとても烈な戦いでG G Gもかなりの被害を被ったと聞いています。

その時に比べると、G G Gの戦力は増していますが……

「当たってくれないことをお祈りしましょうか。」

「それは良いわね。」

しかし、この2日後。

雪風と初霜さんの祈りも届かず、イムヤさんの占いは当たってしまうのです。



Another Side

夢幻島がお祭りで賑わっている頃、最前線の鎮守府に大勢の艦娘が集まっていた。

各地の鎮守府から集められた主力の艦娘たちであり、人類側の全力と言っても過言ではない。それだけの戦力が一か所に集まっているのは、宵闇に紛れて敵に奇襲を掛けるからだ。

「あゝ……やっぱり実行に移しちゃったか。」

鎮守府の上空で飛行するガングルーの中で陽炎は呟いた。

本土での諜報活動に従事している第4戦隊は、大規模反攻作戦の情報を入手し、こうやって張り込んでいたのだ。

「こちら、陽炎。艦隊の出撃を確認しました。」

『OK。こつちも長官から新しい指令が来たよ。』

そのまま艦隊に気付かれないように監視を続ける、だつてさ。』

「まあ、そうなりますよね。取り合えず、一旦戻ります」

『りよーかい。気を付けて帰っておいでよ。』

川内との通信を切った後、陽炎はため息を吐いた。

「本当なら、お祭りに参加できる筈だったのに……」

本来の予定では、陽炎たちはお祭りの時期に合わせて島に帰還する筈だったが、大本営の大規模反攻作戦の発令を受けて、第4戦隊は休日を返上することになったのだ。

「まあ良いわ。代わりに給料せしめてやるんだから。」

コックピットで一人眩くと、陽炎は操縦桿を握りしめて、拠点へ戻るのだった。

第5話

Another Side

——GGGベータワ―基地——

「そろそろ、例の作戦が行われている頃だな。」

大鳳が淹れたコーヒーを飲みながら、大河長官は時計を確認し、呟いた。

「おお、もうそんな時間か。」

「あんなごり押し of 作戦、上手く行くのかねえ……」

「成功する確率は極めて低いでしょう。」

現在、GGGベイタワー基地が存在する夢幻島周辺の海域は深海棲艦の出現もなく、メインオーダールームの面々は少しばかり暇を持て余していた。

そんな彼らの話題に挙がるのは、大本営が進めている大規模な反攻作戦のことだ。

今頃、日本国の防衛を担っている鎮守府の戦力のほとんどは深海棲艦と熾烈な戦闘を繰り返していることだろう。

「作戦の行方も気になるが……」

「イムヤの占いのことか？」

火麻の言葉に大河長官は頷く。

「かつての大規模襲撃の時、我々は辛うじて深海棲艦を退けることができた。

もし、あの占いが実現した場合、島を守り抜くことはできるのだろうか……」

「大丈夫ですよ、長官！！ あの子たちは、あの時よりも強くなっていますから！！」

「ふっ……そうだな。」

命の前向きな言葉に長官を受け、それ以上考えるのを止めた。

「猿頭寺くん、陽炎くんと通信を繋いでくれ。」

「はい。」

手元のコンピュータを操作し、秘密裏に作戦に同行している陽炎と通信を繋げる。しかし、メインモニターにはノイズが生じているだけで陽炎の姿が映らない。それだけではなく、陽炎からの音声もない。

「機材トラブルか？」

「いえ、これは……通信が妨害されています!!」

「向こうで何かあったのか……ボルフオッグもついてるし、大丈夫だとは思うが」

「念のためだ。救援の準備を……」

そう指示を出そうとした刹那、メインオーダールームにアラートが鳴り響いた。同時にメインスクリーンに艦装を纏った大鳳の姿が映し出される。

「大鳳くん、何かあったのか？」

『これを見てください！！』

画面が切り替わり、スクリーンに大海原の様子が映し出される。

しかし、その海に存在しているモノを確認した瞬間、全員が絶句した。海上に居たのは、深海棲艦の大軍。それも

「Oh, NO !! 少なくとも100体は居マース !!」

「な、なんという数だ !! あの時よりも遥かに多いぞ !!」

「くっ、占いが当たってしまったか……。」

機動部隊全員に伝令 !! 出撃準備が出来次第、随時出撃せよ !!」

「了解 !!」

穏やかなムードは一変し、メインオーダールームに緊迫した空気に支配されるのだった。



「あらあら、お客さんが一杯ねえ。」

「荒潮、暢気なことを言ってる場合じゃないわ。」

真っ先に出撃したのは満潮率いる第1艦隊の面々だった。

艦隊内演習を行う直前だったので、弾薬を演習用から実戦用に変更して、すぐに出撃したのだ。

「満潮、どうするの？」

「殲滅するに決まってるじゃない。荒潮と大潮は敵の艦載機を。」

「わかったわー。」「頑張るよー!!」

「他の奴は私と一緒に敵陣に突っ込むわよ。」

そう言って、満潮は最大戦速で敵に向かっていく。

その後を追って、僚艦の朝潮を含めた3名が敵に向かっていく。

「蹴散らしなさい、ケラウノス!!」

試製第3世代Gウエポン、ケラウノスから電撃が放たれる。

それを皮切りに深海棲艦の大軍とGGGの生き残りを掛けた海戦が勃発した。

砲弾が、艦載機が飛び交い、海面は爆発の衝撃によって絶えず揺れる。

「敵が……多すぎるっ !!」

圧倒的に不利なのは、艦娘の方だった。

敵は最前線に駆逐艦、軽巡を配備して、その後ろに戦艦や空母を配備しているので、主力まで攻撃を届かせるのが非常に難しいのだ。

確かにGGGの艦娘は一騎当千の力を持っているが、防御力に関しては駆逐艦と変わらない。

つまり、戦艦や艦載機からの攻撃を受ければ、至近弾でも大破に陥る可能性がある。そんな砲弾を全て避けつつ、敵の防御陣を破って主力にたどり着くのは、至難の業だ。

「ああっ !!」

「朝潮 !?」

「だ、大丈夫……主砲がやられただけよ。」

敵の砲弾を主砲で防御したのか、朝潮の主砲は使い物にならなくなってしまった。それだけではなく、主砲を装備していた右腕は酷い火傷を負ってしまっている。

『満潮姉くちよつとまずいことになったわ〜』

「こんな時に何　!？」

『ジエネシツクボルトがなくなっちゃった〜』

「だったら、さっさと補充してきなさい　!!　大潮、ちよつと負担が増えるわ　!!」

『お任せあれ　!!　——つて、言いたい所だけど、ちよつとキツイかも』

荒潮の持つボルテイングドライバーはアタツチメントを装着して真価を発揮する。

しかも、そのアタツチメントは使い捨てなので、手持ちの分を使いきると一度基地まで戻らないといけないのだ。

『こちら、第2戦隊旗艦阿武隈。これより援護に入ります !!』

荒潮と入れ替わるように準備を終えた艦娘たちが戦場に集結する。

到着した増援はすぐに戦闘に突入し、深海棲艦を次々と沈めて行く。

艦娘の快進撃が続くかと思いきや、それは一発の砲弾によって終わりを迎えた。

——ドオオオオンツ

!!!!!!

——

爆音と共に立ち上がる水柱がその砲弾の威力を物語っていた。

戦艦ル級や戦艦夕級の主砲とは比べ物にならない威力にその場に居た全員が目を見開く。

そして、その射線上に居たのは……巨獣のような艤装を従えた深海棲艦。

「ナンドデモ……シズメテ……アゲル……」

「戦艦、棲姫……!!」

満潮はその名を呟いた。

その刹那、巨大な艦装から伸びる砲塔が火を噴き、戦艦棲姫も砲撃戦に参加する。敵が1体増えただけなのに砲撃戦はより苛烈になり、水柱が絶えない。

『うう……やられた、びよん』

『いたた、睦月もやられたのね』

「大破した奴はすぐに下がらなさい !! 沈むのは許さないわよ !!」

敵の砲撃を避けたり、時にはケラウノスで迎撃する満潮。

その視線は敵だけではなく、味方の方にも向けられていた。

(祭の後でほとんどの艦娘が揃ってたのが幸いしたわね。少し戦力が減っても防衛戦の維持できる。)

祭の後片付けのため、普段は基地に居ない艦娘も今日は集結していた。それもあって、多少被害を被っても防衛戦を維持することは可能だ。しかし、このまま被害が増え続ければ、防衛戦は維持できなくなるだろう。

「仕掛けるなら、今っ !!」

満潮は海面を蹴り、単身敵陣の奥へと突撃する。

敵駆逐艦を踏みつけて、強引に敵の防壁を飛び越えて、ケラウノスを振りあげる。

（狙うのは、戦艦棲姫っ !!）

「クチクカンゴトキガ……ナマイキナ」

「そう余裕をかましてられるのも今のうちよ !!」

満潮は自信満々にケラウノスを振り下ろす。

今まで数多の深海棲艦を切り裂いて来た戦斧は戦艦棲姫の身体を切り裂く——かと思いきや、その強固な装甲によって戦斧の刃は止められていた。

「なっ !?」

「ソナオモチャデ、ドウニカデキルト ? カタハライタイタイ !!」

(やばっ)

回避行動に移る暇もなく、艦装から生える巨腕がその華奢な身体に叩きこまれる。

「がはっ」

満潮の身体はまるでボールのように2、3回バウンドしてようやく停止する。

「ソロソロ、シズメルカ。」

戦艦棲姫がそう眩くと、海面が揺れて増援が現れる。

空母ヲ級が5体。拮抗している制空権争いを崩すには十分すぎる戦力だった。

「ヤレ」

戦艦棲姫の号令と同時に空母ヲ級は艦載機を放つ。

大鳳、龍鳳、大潮が奮闘するが、すべての艦載機を撃墜することはできず、十数機の艦載機が防衛戦を越えて、夢幻島へ向かっていくのだった。



雪風Side

「そんな……満潮さんが」

満潮さんがやられる瞬間は、比較的後方に居る私たちにも見えました。

GGG最強を称される満潮さんがやられる姿は、私たちの士気に影響を与えるには十

分すぎる衝撃でした。

「雪風 !! 呆けている場合じゃない !!」

「はっ !!」

そうでした。この防衛戦を突破されたら、あの島は……

「そんなっ !!」

気を引き締め直した瞬間、龍鳳さんが声をもらしました。

敵味方の艦載機が飛び交う空を見上げると、十数機の敵艦載機が防衛戦を突破しました。

しかも、お腹の下には爆弾を抱えています。

「弾種選択、三式弾 !!」

「初霜 !! すぐに島の防衛に !!」

「はい!!」

重砲形態のG―サイズから放たれる戦艦用の三式弾。

駆逐艦用の三式弾よりも広域の艦載機を撃墜できる代物ですが、それを使っても防衛戦を突破した艦載機をすべて撃墜することはできませんでした。

「間に合わない……!!」

「誰か……誰か居ないのか!?!」

この付近にはGGGの全戦力が揃っています。

つまり、現状に対処できるのは補給に戻った荒潮さんか、大破中破して帰投中の味方だけ。

あれだけの艦載機が居れば、あの綺麗な町を火の海にするには十分でしょう。

「お願いします、誰か……雪風たちに力を貸してください」

島の人たちが悲しむ姿を、雪風は見たくありません。

あの人たちにはずっと笑顔で居て欲しいから、それが雪風の力になるから

だから……だからっ
!!

誰か、島の人たちを守ってください……!!

——シエニブルの雨 !! ——

——プライムローズの月 !! ——

—— テイガオ4 !! ——

—— テイガオ4、ヴァン・レイ !! ——

—— チエストスリラー !! ——

—— チエストウオーマー !! ——

その光景を誰が予想できたでしょうか。

島のすぐ近くから放たれた幾条の光は、艦載機を撃ち落としてみせました。そして、島の危機を救ってくれたのは6体のロボットでした。

「「「最強勇者ロボ軍団、ここに復活 !! 「「「」

第6話

戦艦棲姫が正規空母を召喚した直後。

その光景は、メインオーダーームでも確認することができた。

「いかん !! いくらのも3人でも、あれだけの数は対処できん !!」

「くっ……荒潮くんの補給はまだか !!」

「少なくとも10分は掛かります !!」

命の報告に長官は唇を噛む。

荒潮が使うボルテイングドライバーのあたっチメントは、生成に時間が掛かる。

本家のジエネシックボルトなら瞬時に作り出すことができるのだが、サイズが合わないため、Gウエポン版には使えない。

「くそっ !!」

「待て、凱 !! 何をするつもりだ !?」

「ジエネシックで出る !!」

「無茶を言うな !! ガジェットガオーの動力源であるGストーンは今はないんだぞ !?」

「くっ !!」

凱は苦虫を嘔み潰したような表情を浮かべ、足を止めた。

「ジエネシック」というのは、G G Gの切り札であり、かつて1つの星を救った伝説を持つ。

しかし、その動力源である特殊なGストーンは大潮のガジェットフェザーに使用しているため、G G Gはその切り札を使うことができない。

「我々に止める手立てはないのか……」

その時、メインオーダールームに緊急事態を報せるアラームが鳴り響く。

「どうした!?」

「ひ、非常用のミラーカタパルトが勝手に動いています!!」

「何だと!?」

アラームの原因は、GGGベイタワー基地に増設されたミラーカタパルトが勝手に発進シークエンスに入っていることだった。

そのミラーカタパルトは、敵が基地のすぐ近くまで迫ってきた場合を想定して、迅速に対処できるように設けられた物である。機能は、三段飛行甲板空母に搭載されている物と大差なく、違いと言えば垂直発射式になっていることぐらいだ。

『こちら、ソール。メインオーダールーム、聞こえる?』

「どうしたんだ、ソールくん。こちらは少々立て込んでいるんだ」

『知ってる。だから、事後承諾になるけど、とびっきりの援軍を出したの』

そう言いながら、ソールは微笑んだ。

「援軍？」

『まあ、見てもらった方が早いわ。』

すると、メインスクリーンが切り替わり、ミラーカタパルトの射出口が映し出される。そして、映し出された光景にメインオーダールームは驚きと喜びに包まれた。

「戻ってきたか、勇者たちよ !!」

ミラーカタパルトの射出口付近には、合計で6体のロボットが集結していた。そして、その周辺には撃ち落とした艦載機の残骸が散乱している。

「へへ、間一髪だったぜ。」

「ぼさっとするな、炎竜。戦闘はまだ終わっていないぞ。」

GGG最古参になる勇者ロボット。その名は、氷竜と炎竜。

「ちっせえ敵だな。オービットベースに侵入してきた原種を思い出すぜ。」

「敵の実力は未知数だ。気を抜くなよ、雷龍。」

氷竜、炎竜の2体をモデルにした兄弟機。その名は、風龍と雷龍。

「この位置からだとなの子たちも巻き込んだんじやうかな？」

「そうね。島の防衛に専念するべきだわ。」

女性をモデルに製作された勇者ロボット。その名は、光竜と闇竜。

「マイクも居るもんネー!!」

今度は海中からアメリカンカラーのロボットが現れる。

『よし、マイク !! 久々にご機嫌のサウンドを聞かしておくれ !! 』

「オツケーだもんね !! システム・チェンジ !!」

円盤型の飛行ユニットバリバリンから分離した丸っこいボディが変形し、青と赤を基調にした人型のロボットへ変わり、高らかに名乗る。

「マイクサウンダース13世 !!」

人型ロボットへと変形したマイクは表裏反転したバリバリーンに着地。そして、そのボディに秘められた力の一端を解放する。

「カモン、ロックンロール !! ディスクP、セットオン !! ギラギラーンVV !!」

バリバリーンから射出されたディスクを胸部の機構に装填し、ギター型の武装を召喚。

ボディに備え付けられたスピーカーとギター型の武装―ギラギラーンVVから軽快なミュージックが発せられる。

マイクから発せられるミュージックは夢幻島周辺の戦闘海域全域に届いていた。戦場に響き渡る軽快なミュージックに敵味方共に動きを止め、砲弾の雨が一時的に止んだ。

「何でしょう、この音は？」

「なんだか……身体中から力が湧いてきます！！」

いち早く影響を受けたのはサウンドの発信源の近くに居た雪風と初霜の二人だった。戦闘で疲労が蓄積しているにも関わらず、力が湧き上がり、疲労を打ち消す。

「これは……^{セファイラ}霊水晶が活性化してる？」

『察しが良いのう、響。あのロボット、マイクサウンダース13世から放たれるサウンドは君たちの^{セファイラ}霊水晶を活性化させる働きがあるんじゃないよ。』

マイクサウンダース13世から発せられるディスクPのサウンドウェーブ。

その正体はGストーン（正確にはGストーンを用いたエネルギー機関）の働きを活性化させるエネルギーウェーブである。その効果は、量子力発生機関である^{セファイラ}霊水晶にも及び、その働きを活性化させるのだ。

「なるほど……なら、あのロボットたちは味方だと考えていいのかな？」

『説明が遅れてすまないね。あのロボットたちは真正正銘、GGGの味方だ。島の防衛は彼らに任せて、君たちは深海棲艦の対処に専念して欲しい。』

「了解した。これから第7戦隊も前に出るよ。」

雪風、潮、初霜は私と一緒に前線へ。龍鳳は大鳳さんと合流して」

「「「了解 !!」」」

雪風はG―サイズを大鎌形態へ変形させ、響たちと共に前線へ突入する。

「切り裂け !!」

「当たって !!」

鋭い大鎌が一振り、敵駆逐艦を大破に追い込み、初霜の砲撃が轟沈させる。

ディスクPから放たれるミュージックは戦場の艦娘に活力を与え、艦娘側の方が徐々に優勢になっていく。

「みんな、雷撃戦を仕掛けるよ。」

「了解！！」

駆逐艦の数が少なくなると、響は1つの指令を出す。

4人が一列に並び、魚雷発射管を敵艦隊へ向ける。

「統制雷撃、開始。」

「てえっ！！」

響の合図と同時に4人の魚雷発射管から酸素魚雷が発射される。

駆逐艦最強の威力を誇る魚雷は海中を直進し、重巡クラス数隻を沈め、戦艦クラス数

隻に大ダメージを与えた。

「ジエイクオース !!」

さらに残った戦艦クラスの中でも強固な戦艦夕級 flagship に向けて不死鳥が羽ばたく。

魚雷に勝る威力を誇るJクオースはその体を買き、響の元に舞い戻る。

「はあ、はあ……」

「大丈夫ですか、響ちゃん？」

「うん。霊水晶《セフィラ》が活性化してる今なら、もう一発ぐらい撃てるよ。」

「戦艦夕級はもう残っていないけど……」

「あいつがまだ残ってるね。」

響と潮の視線の先に居るの敵の旗艦、戦艦棲姫。

その火力や装甲はつい先ほど倒した戦艦夕級 flagship を超えており、Gウエポンという強力な武装を持つGGGの艦娘でも易々と倒すことはできない相手だ。

「響ちゃんのJクオースで倒せないの？」

「難しいと思う。シミュレーションでも、倒せたことはなかったし……」

「何か方法はないんですか？」

魚雷の再装填を終えた初霜と雪風が帰還し、響に問う。

「我らが総旗艦なら倒せると思うけど、彼女はさっきの攻撃で……えっ!!？」

「あ、あの傷でどうやって……」

響と潮の視線の先には、いくつかの骨が折れてるにも関わらず、戦艦棲姫の前に立つGGG艦娘部隊総旗艦、朝潮型駆逐艦2番艦 満潮の姿があった。

「ミミザワリダ……シズメテヤロウ」

「待ちなさいよ、戦艦棲姫」

マイクに向けて砲口を向けようとした戦艦棲姫がその動きを止める。

「シニゾコナイガ……」

「あいにくと、あれくらいで沈むような軟じゃないわ。」

そう言いながら満潮は斧を後ろ腰に装着し、戦艦棲姫を睨む。

「アンタはここで倒すわ。この私がおね !! ガジェットツール !!」

満潮の両手に黒いナックルガードが装着され、Gストーンが強い光を放つ。

「ヘル・アンド・ヘブン !!」

左手にGストーンのエネルギーが、右手に霊子力が集束する。

満潮の行動に危機感を覚えたのか、戦艦棲姫は巨大な艦装に生えた砲口を彼女に向ける。

「シネエ !!」と怨嗟の声と共に主砲が火を噴くが……………

「残念だったわね」

満潮と戦艦棲姫の間に割り込んだ満潮が戦艦棲姫の砲弾を防いでいた。

ボルテイングドライバーのアタッチメントの1つ、プロテクトボルトの力は空間湾曲。

その余波によって砲弾の方向を逸らして、満潮を守り切ったのだ。
「ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……はあつ !!」

両手を組み合わせ、霊子力とGストーンのエネルギーを融合。
同時に電磁トルネードが発生し、戦艦棲姫の体を拘束する。

「ウイイイイタアアアア
!!!!」

機関をフル稼働し、最大戦速で戦艦棲姫へと突撃する満潮。

その膨大なエネルギーを纏った拳がその身体に突き刺されれば、コア諸共ボディは破壊されるだろう。

「ソウカンタンニ……ヤレルトオモウナ !!」

敵の拘束に使われる電磁トルネードは強力で、並みの深海棲艦にその拘束を解くことはできない。しかし、戦艦棲姫は姫級と呼ばれる上位個体であり、その力は並みの深海棲艦を凌ぐ。

まったく身動きが取れない筈の拘束をどうにか振り解き、身体を反転される。その結果、満潮のヘル・アンド・ヘブンは戦艦棲姫の艀装の方に突き刺さり、内部から大爆発を引き起こした。

「はあ、はあ……くそつ、逃げられた。」

煙が晴れると、そこに戦艦棲姫の姿はどこにもなかった。

艀装を破壊した時に発生した煙に紛れて撤退してしまったようだ。

「満潮姉、大丈夫……には見えないわね〜」

「かなり無茶をしたからね。正直、動くのも辛いわ。」

「HEY !! 無事かい、レディたち？」

「アンタは……長官が隠してた秘蔵戦力ね。さっきは助かったわ。」

「仲間を助けるのは当然のことだぜ。」

そう言いながらマイクは満潮と荒潮を両手で拾い上げると、スタジオ7を上昇させ、戦域から離れる。

海上の戦闘もほぼ終わり掛けており、残党処理を行っている段階だ。

「無事に守れた……みたいね。」

「ええ。轟沈した娘も居ないみたいよ。」

「最後の一撃、ナイスガッツだったぜ。」

「ありがとう。」

「おっと、ドクター・雷牙のお出迎えだ。」

「ご苦労だったな、マイク。荒潮、ストレッチャーに満潮を寝かせるんだ。」

「は〜い」

荒潮は満潮を御姫様抱っこすると、マイクの手のひらから降りて、雷牙博士が用意したストレッチャーに彼女を寝かせる。

「マイク、まだいけそうか？」

「もちろんだっぜ !!」

そう言うと、マイクは再び大空に飛び上がり、エネルギーウェーブで戦闘海域全域に響かせるのだった。

そして、戦闘が終了したのは、満潮が医務室へ運び込まれた後だった。

「ふう……なんとか乗り切れたな。」

「氷竜たちが目覚めてくれたおかげだな。一時はどうなるかと思っただぜ。」

「だが、こつちの被害も大きいな。」

そう言つて、凱は各戦隊の被害状況を眺める。

確かに深海棲艦の大規模攻撃を凌ぐことはできたが、艦娘たちは大なり小なり傷を負つており、無傷の艦娘の方が少ない。

「それに、ぶつつけ本番でのディスクPによる霊水晶《セフィラ》の活性化。

彼女たちの艤装にどんな影響が出てるか分かりません。」

「万全の状態に戻すのには、かなりの時間がかかりそうだな。」

「まあ、あれだけの大戦力がやられたんだ。奴さんもすぐには攻めてこないだろ。」

『メインオーダールーム、聞こえる!? 聞こえるなら返事して!!』

勝利の余韻に浸っていると、メインオーダールーム内に切羽詰まったような声が響く。

声の主は、本土から派遣された艦隊をスニーキングしている陽炎だ。

「陽炎くんか? 通信が繋がらなかったが、何かあったのか?」

『深海棲艦のせいで通信が妨害されてたのよ。それより、長官の読みが当たったわ。』

「やはり、陽動だったか……」

『ええ。艦隊は壊滅して、退路も防がれてる。今は無人島に立て籠もってるわ。』

それから……事後報告になるけど、勝手に救助に入ったわ。』

「いや、陽炎くんの判断は間違っていない。だが、こちらも小さくない被害を負った。救援部隊の派遣には少し時間が掛ってしまう。」

『了解。それまで、何とか守ってみるわ。それから島の座標も送っておくわ。深海棲艦の通信妨害のせいで通信はできないから。』

それだけ伝えると通信が切断される。

「どうするんだ？　このまま助けに行くと、俺たちの存在が露見するぜ。」

「致し方ないだろ。見殺しにすることなどできん。」

そうやって、大河長官は地下の秘匿区画に通信を繋げる。

通話の相手は、GGGの勇者ロボの修復を行ってくれた協力者であり、艦娘について誰よりも詳しいと自負する少女―ソールである。

「ソールくん、頼みがある。」

『無理難題じゃない限り引き受けてるけど……内容は？』

「艤装の整備を翌朝までに終わらせて欲しい。少なくとも2艦隊分は欲しい。」

『無理とは言わないけど、キツイ内容だね。何か訳ありかい？』

「うむ。以前話した作戦が失敗し、多くの艦娘たちが助けを求めている。

GGGとしては、彼女たちを見殺しにすることはできません。」

『……分かった。すぐに行くから、牛山氏とドクター雷牙に声を掛けておいて。』

「すまないが、頼む。」

『気にしなくていい。』

「やれやれ……これから大変そうだ。」

大河長官はこの後に待ち受けているであろう未来を予想して、小さく呟いた。